

*Kyokagaku-kenkyu* Edit by Nichiren-shu Modern Religions Research Ins.

# 教化学 研究

8

現代宗教研究 別冊

# 教化学 研究

8

目次

■巻頭言

人は変わるか……………三原正資……………1

■第十七回日蓮宗教化学研究発表大会

今、宮沢賢治を考える……………齋藤宣裕……………6

奥之院に立つ四恩杉の原点……………三谷祥禰……………16

教化の目的と手段……………大場唯央……………25

伝わるからだの探求④―セロ弾きのゴーシュを模擬的に色読して―……………釋一祐……………35

次世代教育への二三の留意点……………森下龍浄……………43

宗教音楽と教化……………西口玄修……………48

重症心身障害児の地域生活について……………大野真如……………59

近代山梨県下における日蓮宗記念事業の研究―地方紙に見る「御降誕七〇〇年」の様相―……………鈴木義俊……………69

「十年間の成功と失敗」から得たニュートラルポジション……………尾藤宏明……………86

山形県米沢市日朝寺安置五輪塔の一考察―その由来とその意義について―……………玉木晃仁……………96

近現代哲学の認識問題から教化を考える……………石伏叡齋……………105

「寺と社会」を考える―もし、自分のお寺が避難所になったら―……………石原顕正……………113

■特別発表

過疎地域における寺檀関係の持続可能性―他出子の動向に注目して―……………中條暁仁……………120

■あとがき

………………………………………………………………………………141

■執筆者一覧

………………………………………………………………………………142

# 人は変わるか

現代宗教研究所長 三原正資

「アメリカ・ファースト」を訴えたドナルド・トランプ氏が、米国新大統領に就任した。平成二九年一月二〇日（ワシントン）、国会議事堂からホワイトハウスへ、夫人・子息とともに、賛非の声の中を移動するトランプ氏（一九四六年生まれ）は、次のように語っていたという。

「人間は動物の中で最も悪質な存在で、人生は勝つか負けるかで終わる戦いの連続だ。求めるものを手に入れるまで押しまくる。」（産経新聞 一月二一日）

TVは、「求めるもの」をすべて手に入れた勝者の姿を伝えていた。脳科学者中野信子氏は、犯罪者に多いサイコパスは成功した政治家や実業家にも見られるという。サイコパスの脳は「扁桃体の活動が低」く、「扁桃体と前頭前皮質の結びつきが弱い」という（『サイコパス』文春新書 二〇一六）。するどく他者を批判して全く動じない、トランプ氏のあからさまな差別的言動を見るたびに、中野氏の指摘を思い浮かべる。

「求めるものを手に入れるまで押しまくる」トランプという人物の言動が、今後、どのように変化していくのか、大変興味深い。

解剖学者養老孟司氏は、『考える人』（新潮社 季刊）に連載した文章の中で、次のように述べている。

そもそも、「変わらない私」が存在し、それが人間の「本質」であるなら、教育は要らない。本質的に変わらないガキを、どう教育すればいいのか。冗談じゃない。だから若者は育たなくなり（育つとは変わることですからね）、いつまで経っても一人前にならなくなったのである。だから現代では、教育はなんとなく要らないものになった。教育の価値はひたすら低下したのである。教育の本質は「人を変える」ことだからである。

人間の本质についての養老氏の考え方は、仏教の五蘊無我説と同じだ。「人は変わる」ことを前提として、教育も、私たちの「教化」も成り立っている。

一九四六年、ノーベル文学賞を受賞したドイツの作家ヘルマン・ヘッセ（一八七二—一九六二）の名作『シッダールタ』を、このたび、私は五〇年ぶりに読み返した。高橋健二訳の新潮文庫版は、一九七一年の発行から七五刷を重ねる。『シッダールタ』は、第一次世界大戦後の一九二二年刊行された。訳者は〈解説〉で次のように述べている。

思想として解脱を書くことは、すでに二十年もインド思想を研究していたヘッセにとって、さして困難ではなかったであろう。しかし、ヘッセにとっては、作品中に述べられているように、思想やことばは重要ではなかった。救われる体験の秘密が問題であった。

「救われる体験の秘密」、それは誰もが知りたいところである。ヘッセは、『シッダールタ』において、「体験の秘密」を描くために、禁欲や瑜伽の行につとめたという。この小説では、シッダールタは出家以前のゴータマ・ブッダではない。だが、ヘッセは主人公にブッダの幼名を与えることによって、ブッダの体験——人が変わる秘密——に迫ろうとした。

ヘッセは、シッダールタとブッダの出会いを次のように描いた。

彼は注意深く、ゴータマの頭を、その肩を、足を、静かに垂れている手を見つめた。(略)この人、この仏陀は小指の動きに至るまで真実だった。この人は神聖だった。シッダールタは、この人ほどひとりの人をあがめたこと、愛したことはなかった。

しかし、シッダールタは、道をとにもにする友人ゴーヴィンダのように、ブッダの弟子になることはなかった。それは、最初に読んだとき、もっとも心に残った場面の一つである。

もし私があなたの弟子のひとりになりましたら、私の自我が、ただ外見的に、ただまやかしに安心あんじんに達し、救われるだけで、実は生き続け、大きくなるようなことになりはしないか、と恐れます。

と、ブッダに告げて、シッダールタは去った。

「人は変わる」。だが、その変わり方が問題ではないか。五〇年前も、現在も、多くの宗教や運動が社会に渦巻き、人を呑みこもうとしている。私たちは、「変わる」ことに慎重でなければならない。ヘッセのこの作品は、私たちに大切なことを教える。

シッダールタの言う「まやかしに安心に達し、救われる」ことについて、作家工藤律子氏は、その著書『マラス——暴力に支配される少年たち——』(集英社 二〇一六)の中で、警鐘を鳴らしている。

自分は何者なのか。どこに帰属するのか。何のために生きているのか——。疑問ばかり漂う深い霧の中を歩むスラム少年たちに、ギャング団はそれを払拭する機会を、アイデンティティを与えてくれる。ギャング団という「家族」、帰属先を提供され、(略)「役割」を与えられることで、少年たちは自らの存在に対する安心感を得る。

安心や救済と危険な依存の区別は、どこにあるのだろうか。

さて、シッダールタは、誰に依存することもなく、他人から役割を与えられ、支配されることもなく、シッダールタの人生を歩む。

大いに変わらなければならない人、様々の衣服をまとわなければならない人が少なくない。私はそういう人のひとりだ。

と、老いたシッダールタは、老いた友ゴーヴィンダに語る。彼の心の変化、成熟していく内的体験の告白には、ヘッセの把握した仏教の秘密が輝く。

天台大師が法華経を権実や本迹の概念で解釈したことには、仏の教化、「人は変わる」ことの秘密が示されているのではなからうか。

二〇一一年、現代宗教研究所主催のセミナーで講演したケネス・タナカ師の新著『アメリカ流 マインドを変える 仏教入門』（春秋社 二〇一六）を読んでいると、シッダールタの語った内的体験に通じる一章があった。

タナカ師が事故によって車イス生活続ける信者のクリスティーンさんを励ますために訪ねたときのことだった。

私は立場が逆さまになってしまっているのに気づきました。なぜなら私がクリスティーンのもとを辞した時、会いに行った時よりもインスピレーションを受け、元気づけられていたからです。彼女は私にとっても重要なことを教えてくれたのです。

クリスティーンさん、あなたは私にとつてのブツダであり、あなたの言葉は今も私にインスピレーションを与えてくれている——私は彼女にそう呼びかけたいと思います。

今、トランプ大統領はメキシコ国境に「壁」を建設し、あるいはイスラム教国からの移民を制限しようとしている。強権発動のさなか、キリスト教国の中でマイノリティである仏教がおびやかされないだろうか。

世界中に危険なしるしが見られる二一世紀に、さまざまなプラクティス（実践）によって穏やかに人の心を変え、『始聞仏乘義』等に示されているように法華経には「変毒為薬」のはたらきがあるという）、成熟させていく仏教の役割は増々大きくなる。

# 今、宮沢賢治を考える

齋藤 宣裕

## 一、はじめに

平成二十九年の三月十一日をもって東日本大震災は七回忌を迎える。大震災の直後には日本全体が重く暗い雰囲気  
に包まれていたが、その時に脚光を浴びたのが、被災地でもある岩手県出身の宮沢賢治であった。特に俳優の渡辺謙  
氏が朗読した『雨ニモマケズ』の詩は多くの方の心に響いて話題となった。

周知の通り、宮沢賢治は法華経の熱心な信仰者であり、その作品には法華経の精神が息づいている。作品の中に息  
づくその法華経の精神によって、東日本大震災で傷ついた多くの人の心が救われた部分があったのであろう。しかし、  
あれから五年半が過ぎ、少しずつ東日本大震災の記憶が、そして宮沢賢治の記憶が薄れてきているように思われる。

毎日、数えきれないほどの事件や事故、自然災害などが起こり、少子高齢化、人口減少問題など多くの問題を抱え  
て社会全体が不安定な状態にあるが、このような時代、このような時期だからこそ、宮沢賢治の作品、その思想や生  
涯に学ぶものがあるのではないだろうか。本発表では宮沢賢治を「今」改めて考えることによって、我々の今後の教  
化を考えてみたい。

## 二、宮沢賢治研究について

まずは宮沢賢治研究を振り返ってみると、賢治研究の初期時代においては、宮沢賢治を世に広めたいという熱意を持った人々による普及の時期であり、実弟である宮沢清六氏、草野心平氏などによって賢治が世に広められた。この時期には戦争という非常事態にも関わらず、社会に広く受け止められ始めたことが特徴である。また、『雨ニモマケズ』の詩が貧しさに耐える美德の象徴として国策に利用され、教科書に取り上げられることで広く世間に知られることになった。

次に一九五〇年代になると、恩田逸夫氏や佐藤勝治氏によって、賢治作品に対して客観的あるいは批判的な立場に立って研究が行われるようになる。そして一九六〇年代には宮沢賢治研究史において最も大きな論争ともいえる『雨ニモマケズ』論争が巻き起こる。これは『雨ニモマケズ』を高く評価していた哲学者の谷川徹三氏と、この詩を「ふと書き起こした過失のように思われる」と評し否定的な立場をとった詩人の中村稔氏との間で批判を合わせた論争であった。

その後、『校本宮沢賢治全集』の刊行を経て、没後五十年を迎える頃に宮沢賢治記念館が開館、「ヒデリ・ヒドリ論争」、一九九〇年には宮沢賢治学会イーハトーブセンターの設立、生誕百年を迎えた一九九六年頃の賢治ブーム、その後も研究雑誌やインターネットを通じて研究が進められてきた。

これまでの賢治研究における問題点として、文学的研究が主であり、不思議なほどに賢治と仏教、あるいは法華経信仰についての研究が避けられてきたということが挙げられる。その理由について正木晃氏は文学研究者にとって「仏教は難しくてよくわからない（中略）だから無視せざるを得ない」「文学研究者の多くは、文学が宗教と関わっているという事実を認めたくない（中略）宮沢賢治に日蓮宗とか法華経信仰とか国柱会とかいうレッテルが貼られるこ

とを、ひじょうに嫌っている」と述べている。<sup>①</sup>

私は平成二十八年、生誕百二十周年という記念の年に、宮沢賢治学会の研究発表会に初めて参加させていただいた。その中で岩手大学名誉教授であり、宮沢賢治学会イーハトーブセンター副代表理事をお勤めだった望月善次氏は「『御本尊』四題」というテーマでご発表になり、「賢治研究の今後を左右するものの一つは『妙法蓮華經』に関わる問題であろう」と述べておられた。今後は賢治の法華經信仰の側面からの研究が活発になることが期待される。

### 三、賢治の法華經信仰について

さて、賢治の法華經信仰について考える時、賢治が入会をしていた国柱会の存在が挙げられるが、賢治の生涯、その信仰について改めて調べていくにつれて、賢治は国柱会の思想、信仰とは一定の距離を置いていたことがわかる。

その根拠のひとつには、賢治の法華經信仰は国柱会を介したものであったにも関わらず、その思想に国体主義の思想が見えてこないということが挙げられる。大谷栄一氏は「賢治の法華經信仰には、国柱会と密接な関係があった一九二〇年代前半においても、智学の蓮主義の核にある国体観念の影響を見いだすことができない。」「『世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない』と宣示した『農民芸術概論綱要』（一九二六）にも、個人・国家・世界の救済を説く日蓮主義の影響が透けてみえるが、やはり、国家に対する視点が賢治には欠落しており、むしろその救済観は宇宙規模のスケールを持っている」と述べている。<sup>②</sup>

もうひとつには、賢治と国柱会との関係が緊密ではなかったということがある。正木晃氏は「賢治が入会したころは、田中智學と大幹部の山川智應の間にあつれきがあつたらしく、内部で一種の権力闘争みたいなものが生じ、国柱会自体が分裂騒ぎという時期でもあつたようです。ちょうどそういう時期に入ってしまったこともあって、国柱会の内部にひじょうによそよそしい、冷たい空気が漂っていたのです。賢治はそういう雰囲気を感じて、詩に

うたっています。」と述べて、『国柱会』という詩の内容から、当時の国柱会の雰囲気、また実情に対して賢治が微妙な思いをいただいていたことを指摘している。

### 『国柱会』

外の面には春日うららに

ありとあるひびきなせるを

灰色のこの館には

百の人気配だになし

台の上、桜、花咲き

行楽の士女さざめかん

この館は冷え冷えとして

泉石をうち繞りたり

大居士は眼をいたみ

はや三月の人の見るなく

智応氏はのどをいたづき

巾巻きて廊に按ぜり

崖下にまた笛鳴りて

東へととどろき行くは

北国の春の光を

百里経て汽車の着きけん

この作品については、田中智学の孫にあたる大橋富士子氏が解説をしている。

陽春四月、戸外には麗かな春の息吹が響きあい、上野公園は花見客で賑わっているのに、灰色のような国柱会館には、まるで人の気配もない。

この館の内部は冷えびえし、外の庭も冷たい庭石がかこんでいる。会館の内外に、春なのに寒々しさが感じられる。ここに来てはや三カ月、智学大居士に一度も逢えぬのは、眼病のせいであろうか。

智応氏は風邪でのに包帯をして、考え事をしながら廊下を行き来している。何というもの淋しさであろう。

屋上庭園から上野の森を見ていると、真下に汽笛がまた鳴った。東にむかって轟々と行く汽車が、百里も遠い北国の早春の光をのせて、いま終点の上野駅に着くのだろう。<sup>④</sup>

しかしながら、妹トシのお骨の存在もあってか、国柱会とは結局付かず離れずの関係を続けていたようであり、賢治は生涯にわたって脱会をしていない。このように、賢治は花巻で法華経と出会い、当時岩手県で盛んに布教されていた国柱会に希望を抱き、東京まで家出同然に出てきた。しかし、そこで見た国柱会本部の内情にいわば失望を覚えるのである。その後、賢治の作品が多く生まれてくることになるが、信仰という面ではおそらく賢治は独自の法華経

信仰へと舵を切つていったと想像される。

それでは賢治のたどり着いた法華経信仰とは一体どのようなものであったのだろうか。昭和六年九月二十日、上京してきた賢治は東京神田駿河台の宿にて急に発熱する。体調はかなり悪く、死期を悟った賢治は、翌二十一日に父母宛の遺書を書いた。この頃に書き始めた手帳こそが、有名な『雨ニモマケズ』の詩が記された手帳である。この手帳の内容こそが、賢治が人生をかけてたどり着いた信仰を表しているのではないだろうか。

この手帳は『雨ニモマケズ』の詩や五ヶ所に記された御曼荼羅が有名であるが、手帳の一ページ目には「当知是処 即是道場 諸仏於此 得三菩提」

三ページ目には

「諸仏於此 転於法輪 諸仏於此 而般涅槃」

という、妙法蓮華経如来神力品第二十一の経文が記されている。二ページ目には

「昭和六年九月廿日 / 再び / 東京ニテ / 発熱」

と記されており、手帳を書き始めた初期にこの如来神力品の経文を書写したことが伺える。つまり賢治はこの経文を大変重要視していたものと想像できるのである。

この経文は「そのような久遠の釈尊に教え導かれた諸の仏陀世尊は、どこで修行したかといえば、まさに今、仏陀が衆生とともに在るこの場所で、永い永い修行をなさったのであり、そして諸の仏陀はこの現実の世界でこの上なき尊いおさとり（無上等正覚）を体現なされたのであり、（さらにこの現実世界で教えを説いたのであり、ついにはこの現実の世界で涅槃にお入りになられたのである）」<sup>⑤</sup> という意味の部分である。

そして『雨ニモマケズ』の詩の中では周知の通り、常不軽菩薩の請願について表現されている。渡邊寶陽氏はこの解釈について「人々の苦悩の現実の前に、ただ『ナミダヲナガシ』『オロオロアルキ』ということしかできないで、

『ミンナニデクノポートヨバレ』るしかないと覚悟して、真理の実践の道に分け入ることを詩っているのである。こうした内容こそは、まさに常不軽菩薩の礼拝行そのものではないのか。どれほどの理想を立て、その実現を誓っても現実にはさまざまな困難がある。それに挫折してもならないし、また安住してもならない。それが常不軽菩薩の礼拝行なのだろう。そこにこそ仏教の示す深い請願の世界があるであろう。」<sup>⑥</sup>と述べている。これらを合わせて考えると、賢治の法華経信仰が見えてくるのではないだろうか。

#### 四、今、宮沢賢治を考える

ここで『雨ニモマケズ』をもう一度読んでみる。

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

慾ハナク

決シテ瞋ラズ

イツモシヅカニワラッテキル

一日ニ玄米四合ト

味噌ト少シノ野菜ヲタベ

アラユルコトヲ  
ジブンヲカンジョウニ入レズニ  
ヨクミキキシワカリ  
ソシテワスレズ  
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ  
小サナ萱ブキノ小屋ニキテ  
東ニ病氣ノコドモアレバ  
行ッテ看病シテヤリ  
西ニツカレタ母アレバ  
行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ  
南ニ死ニサウナ人アレバ  
行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ  
北ニケンクワヤソシヨウガアレバ  
ツマラナイカラヤメロトイヒ  
ヒドリノトキハナミダヲナガシ  
サムサノナツハオロオロアルキ  
ミンナニデクノボートヨバレ  
ホメラレモセズ  
クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ

今後、我々が社会から求められるのは、この『雨ニモマケズ』の精神、そしてこの現実世界での実際の行動ではないかと考える。詩の中に何度も出てくる「行ッテ」という言葉の通り、これからは寺院の中において来客をじっと待つではなく、傷つくことを恐れずにどんどん社会へ、地域へと出かけていく。社会との交わりの中で、実際に行動をもって布教をしていく、そして法を説くだけではなく、行動で法華経の教えを示していくという姿勢が重要であろう。法華経の教えが文底に隠された賢治の作品がこれだけ世の中に受け入れられ、愛されてきたことは紛れもない事実であり、それは法華経の教えが現代の人々の心に響くのだ、人々を救うのだという証でもある。東日本大震災後の人々の心を救ってきた賢治作品の力と宮沢賢治の生涯を、今後はさらに布教に活かしていくべきであると考ええる。

そのためには今後、ますます仏教的観点、信仰的側面からの賢治研究が必要となるだろう。今後の課題としては、賢治の法華経信仰と国柱会の思想との関係の整理、『雨ニモマケズ手帳』の内容の研究、賢治の信仰した御曼荼羅の研究などがある。また、平成二十三年に行われた第四十四回中央教化研究会議では宮沢賢治がテーマとして取り上げられ、三原正資現代宗教研究所長の基調報告『イーハトヴと宮澤賢治』、また第一分科会の討議の中で賢治の思想とアメリカ仏教との共通点として「超宗派性」「平等性」「社会性」の三点が挙げられている。この点に関しても、今後研究が必要であろう。

## 五、おわりに

賢治は『農民芸術概論綱要』において「宗教は疲れて近代科学に置換され然も科学は冷く暗い」「科学は如何短

かき過去の記録によって悠久の未来を外部から證明し得ぬ」「いま宗教は気休めと宣傳 地獄」、そして「われらの前途は輝きながら峻峻である」と記している。峻峻なる現状を乗り越え、輝く前途のために、宗教を温かく明るく存在へと変えていくために、「今」賢治を考えて「今」行動に移すことが重要であると考ええる。

### 【参考文献】

- 日蓮宗現代宗教研究所編『現代宗教研究』第四十六号、二〇一二年
- 天沢退二郎・金子務・鈴木貞美『宮澤賢治イーハトヴ学事典』（弘文堂、二〇一〇年）
- 渡邊寶陽『宮澤賢治と法華経宇宙』（大法輪閣、二〇一六年）
- 奥田弘『宮澤賢治研究資料探索』（蒼丘書林、二〇〇一年）
- 朝日新聞社文化企画局東京企画部編『生誕百年記念「宮澤賢治の世界」展図録』（朝日新聞社、一九九五年）
- ① 正木晃「宮澤賢治の仏教思想と復興の教化学」（日蓮宗現代宗教研究所編『現代宗教研究』第四十六号、二〇一二年、四十八ページ）
  - ② 天沢退二郎・金子務・鈴木貞美『宮澤賢治イーハトヴ学事典』（弘文堂、二〇一〇年）四三四ページ
  - ③ 正木晃「宮澤賢治の仏教思想と復興の教化学」（日蓮宗現代宗教研究所編『現代宗教研究』第四十六号、二〇一二年、四十二ページ）
  - ④ 宮沢賢治研究会編『文語詩の森 第二集』（柏書房、二〇〇〇年）
  - ⑤ 渡邊寶陽『宮澤賢治と法華経宇宙』（大法輪閣、二〇一六年）一七二ページ
  - ⑥ 同右 一八六ページ

# 奥之院に立つ四恩杉の原点

三谷祥禰

日蓮宗の総本山久遠寺の傍の久遠寺駅からロープウェイに乗り、約七分で身延山の山頂の奥之院駅へ到着いたします。日蓮聖人は身延御在山の九カ年の間、この山頂より、遙か遠き房総半島の先端にある故郷、安房小湊のご両親、師の道善房を偲ばれたといわれています。私が奥之院の石段を初めて登り、お参りをさせて頂いたのは、三十年以上も前の事でした。師匠は石段の中腹辺りの左右を見ながら四恩杉のお話をしてくださいました。奥之院にはたくさん杉木立がありますが、その中で樹齢を重ねた「四恩杉」と呼ばれる巨木があります。お父さまの妙日尊儀菩提の杉。お母さまの妙蓮尊尼菩提の杉。道善御房への報恩の杉。立正安国祈念の杉。この四本の杉が四恩杉です。父の恩。母の恩。師の恩。国恩。ご恩に報いる祈りを杉の木に託す霊木であります。遙か昔のその時、奥之院の四恩杉の由縁を聴き、心が強く揺すぶられました。十代で亡くした両親のことが去来したのです。伊勢神宮にお仕える家に生まれ育ちましたが、菩提寺もあり、朝夕、ご神仏にお給仕をしていました。皇学館大学の先生方、学生さんも出入りし、「家で寝泊まりされた先生が、鎌倉八幡宮のえらいさんになった」と喜んでいた祖父の話を覚えています。お正月などの神宮行事には、白衣を着て朱の袴をはき、寒い中、素足で、参宮の人々にお札をお渡しなど致しました。祖父の育った神社のお祀りの夜には、空の米俵に入り、太い海老の足を食べながら、お賽銭が入っていると成るの米俵の番をした幼い日のことなど思い出します。幸せな暮らしは長く続きませんでした。高校時代に、父が亡くなり、翌年に母が亡くなり、私の家はお線香の香りが充満していました。朝起きて、学校から帰っても、祖父母が灯す香りに癒

されました。お坊様がお唱えされるお経に惹かれ、お坊様と結婚すれば、親の供養がしていただけるとひそかに思い始めていました。社会生活に入り、結婚を意識する年頃になりますと、お坊様と結婚したいという思いが強くなっていました。宗派の知識もない私でした。お坊様とのご縁を持つ糸口がございません。どこかのお寺へ行き「私と結婚してください」とお尋ねしたいほどの気持ちでしたが、そういう度胸もありません。そこで、私は祈ることにしました。すでに、この世に生まれ、どこかに生きておられるお坊様の健康を祈り、私たちの出会いを祈りました。「私を見つけてください。私はあなたに出会いたい。私はあなたを待っています」というようにお祈りしました。どれだけ経ちましたのか、それからある日、始めて出会った男性とおしゃべりしている自分がいました。その男性は日蓮宗のお坊様でした。お蔭さまで、ご縁をいただくことが出来、めでたしめでたしとなりました。そのお方は、北海道から九州まで、各地の日蓮宗のご霊跡へ私をお連れくださいました。布教先のアメリカ本土、ハワイの寺院にも同行致しました。アジア各国へ送る文具類や日用品のお手伝いもしました。身延のお参りの時などは、まるで故郷へ帰ったような笑顔で案内くださいました。

奥之院の石段で四恩杉にであった昔日の感動を覚えています。そのころの私は、日蓮聖人のことは『立正安国論』をお書きになられたご立派なお坊様ということしか、存知ませんでした。薄霧が流れる霊山のなかで、計り知れない深淵な未来へのときめきを与えてくれました。日蓮聖人の広く深く歩まれた人生ドラマをこれから学んでいくとう嬉しい自覚でした。久遠寺本堂にお参りの時は、ご参詣者さまが、お経を朗々と暗唱されるご様子に、私は羨ましくてたまりませんでした。私もすらすらとお経を上げるようになりたいと強く思ったものでございました。

その日から三十年以上も過ぎた現在、本日の論題「奥之院に立つ四恩杉の原点」をお話させて頂く光栄に恵まれましたことを有難く思っております。「奥之院に立つ四恩杉」は、今も昔も変わりなくお立ちになっておられますが、本日の発表はその「原点」であります。まず、論題の原点を解説させて頂く前に「恩」についてお話をいたします。こ

の「恩」という言葉が日本で最初に見えるのは『金銅釈迦三尊造像記』であるとされています。ご恩は、日本人として、または、人間として、人生を語る上にも、日々の暮らしにも切り離せない人間の行動の最たるものでございます。感謝、義理人情など心を踴らす言葉の根元にあるのは「ご恩」でしょう。ご恩に応えさせていただく「報恩」には、やさしさ、思いやり、慈しみ、おもてなし、などの人道・モラル・マナーなどを感じ取ることができます。わたしたちの心にずっしりと感知している「恩」は日本で生まれた言葉であるように思っていますが、お釈迦様がお説きになられた法華経の信解品には「世尊大恩」、囑累品には「諸仏之恩」を学ぶことができます。恩を冠する熟語などはたくさんございますが、宗門の電子聖典から法華経と日蓮聖人のご遺文に関する文面を拝読し、恩への思いを探究しました。ご遺文九十一篇、語彙は三〇九個を数えています。その語彙の中で注目すべきは「四恩」であります。四恩は『四恩鈔』、『聖愚問答鈔』、『開目抄』、『上野殿御消息』に見えています。一には父母の恩を報ぜよ、二には国主の恩を報ぜよ、三には一切衆生の恩を報ぜよ、四には三宝の恩を報ぜよ、であります。この四恩の教えを語る経典は『心地観經』です。日蓮聖人が法華経の重大さを説かれ、御年三十八歳でご執筆の『守護国家論』、三十九歳の『十法界明因果鈔』、四十一歳の『四恩鈔』、四十四歳の『女人成仏鈔』、五十一歳の『開目抄』、五十四歳の『兄弟鈔』、五十五歳の『報恩抄』に心地観經が紹介されています。日蓮宗電子聖典には心地観經の説明があり、「心地観經」の正式名は「大乘本生心地観經」であります。この経典を翻訳したのは般若三蔵になっていますが、実際は靈仙三蔵という名の日本人が『心地観經』を翻訳されました。靈仙三蔵は、延暦二十三年（八〇四年）の遣唐船で入唐した最澄さん、空海さんと出航を同じくした奈良の法相宗の僧侶でした。遣唐船は大阪の難波津から出航し、九州経由で日本海を渡りました。四艘で出発して行きましたが、風任せの危険な旅でした。四艘のどの船に乗られたのか、資料は残っていませんが、二艘は難破や行方不明となり、残る二艘の数百人の乗船者と共に、最澄さん、空海さん、靈仙さんは無事唐土へ着かれたのでした。このお話の概略は十二年前の平成十七年に『祖書・注法華経』に引用の大乘本生心地観

経と靈仙三蔵の生涯』の論題で発表させて頂きました。その折に、語りきれなかったところ、時間的に紹介できなかったお話などを入れさせていただきます。最澄さんも空海さんも早々と帰国されましたが、靈仙さんは当時の憲宗皇帝の命を受け、靈仙さんが五十代に入った頃、般若三蔵を中心とした訳僧として長安のお寺で翻訳にかかります。貝多羅樹（ばいたらじゆ）に書かれた梵文を読み、漢字に翻訳し、用紙に書き写すお役でした。訳経にはそれぞれ役割があり、六名ほどのお坊様方と励まれました。般若三蔵は高齢でしたが、用があり、故郷のカシミールへ帰ってしまわれませんでしたため、靈仙さんが中心となり、八一年、大乘本生心地観經の翻訳を完成されました。お釈迦様が靈鷲山でお説きになられたことも、経文の冒頭にあります。憲宗皇帝より、訳経の功勞により、日本人で唯一無二の三蔵の位を授かったのです。その後、仏教を擁護されていた憲宗皇帝は他思想の反乱で亡くなり、中国の元和十五年（八二〇年）靈仙三蔵は身の危険を感じ、中国の五台山へ逃れ、五年ほどして歿します。『続日本後記』では、「嵯峨天皇より、五台山の靈仙は黄金百両を賜った返礼に仏舍利一万粒と新經二部送る」とあります。この新經二部には『心地観經』があったのではと言われています。靈仙三蔵没後、大本山清澄寺にご縁のある円仁上人が、五台山に上り靈仙の御廟と功績を知り、『入唐求法巡礼行記』に記録されました。心地観經は般若三蔵譯として将来しましたので、当時の記憶から靈仙三蔵のことは忘れ去られていきました。世に見る心地観經はすべて般若三蔵譯と記載されています。横川の源信僧都が著した『往生要集』には「心地観經」の文が見られ、『一乗要決』には「心地観經靈仙筆受」が見えます。日蓮聖人の注法華經・信偈品の行間には日蓮聖人の墨跡「心地観經偈云八卷般若三蔵譯靈仙筆受」がございします。日蓮聖人は恵僧僧都著書の書写をされておられたことで、そこに書かれた靈仙の一文をお知りになり、注法華經に靈仙三蔵のことを記されたのだと受け取っています。日蓮聖人が終生だいにされた『心地観經』が平安期の日本本、靈仙三蔵であることを承知されておられたのはわかりません。『心地観經』には八難が載っています。他国侵逼、自界叛逆、悪鬼疾病、国王飢饉、非時風雨、過時風雨、日月薄蝕、星宿変怪であります。『立正安国論』では

人衆疾疫、他国侵逼、自界叛逆、星宿變怪、日月薄蝕、非時風雨、過時不雨、以上の七難があり、仁王経や薬師経の名が出ていますが、心地観経の名は見えていません。『心地観経』には、心地観経卷第二の報恩品と卷第三の報恩品下に四恩が登場します。四恩の語彙は十二個見えています。当時、中国から高麗版など日本に渡って来た経典は、高野版、春日版などで呼ばれる版経として増版されますが、今度はその版経を見ながら、僧侶たちは墨で写し書きをし、それを他の僧侶が写し、当然のことながら、回し読みや経典の貸し借りは想像できます。日蓮聖人は『心地観経』の第二巻にある四恩を終生大切にされました。日蓮聖人が「恩」を信仰と布教の中心に位置付けられた『大乘本生心地観経』を日本僧、靈仙三蔵が翻訳された貴重な経本が大正二年に石山寺で発見されました。石山寺で見つかった『大乘本生心地観経』には日蓮聖人が注法華経に注記された靈仙筆受の文字と憲宗皇帝から三蔵の栄冠を賜った史実が載っています。

『大乘本生心地観経』が奥之院に立つ四恩杉の典拠、原点であることがお判りいただけだと思います。奥之院に立つ四恩杉の原点はかくも壮大なドラマを秘めていました。「四恩が、親の恩、師の恩、国の恩、衆生の恩の大切さを語るのであれば、奥之院の四本杉は父、母、師、国でありますから、四恩の衆生が入っていません」と律儀な意見を聞きましたが、その「衆生」は奥之院の「立正安国記念の杉」に集結されるでしょう。日蓮聖人お手植えの杉とされる四恩杉は大昔からの尊い宝であります。さまざまな伝承を忘れず振り返り、継承していく必要を感じています。豊かな未来への継続は、向学心、ビジョン、知的好奇心が高めてくれるでしょう。

靈仙三蔵の生誕の地、滋賀県の醒ヶ井に靈仙三蔵の記念堂が建っています。まだまだ語り尽せませんが、靈仙三蔵の記念堂の景観を紹介させて頂き、本日のお話を終わらせて頂きます。

「ご恩」についてのアンケートです。お役立てください

○×でお答えください

- 1 四恩という言葉をご存知ですか
- 2 靈仙三蔵・れいせんさんぞうという日本人をご存知ですか
- 3 ご両親へのご恩に報いたと思われたことはございますか
- 4 社会へのご恩に報いたと思われたことはございますか
- 5 世の中のためになる事をこれから何かしたいと思えますか
- 6 人様からご恩を受けたと感じられたことはありますか
- 7 日本人の僧侶が長安で経典を翻訳したことをご存知ですか
- 8 大乘本生心地観経という四恩が説かれた経典をご存知ですか
- 9 四恩という言葉は四つのご恩をいう言葉ですが

貴方様にとってのご恩とは、誰からいただいたものですか

複数の○でお答えください

親 祖父母 兄弟 子供 親戚 仕事などの関係者 日本の国

他人 先生 政治家 銀行員 廃品回収者 ホームレス

- 10 下記の人達に教えられ、または助けられたことがありますか

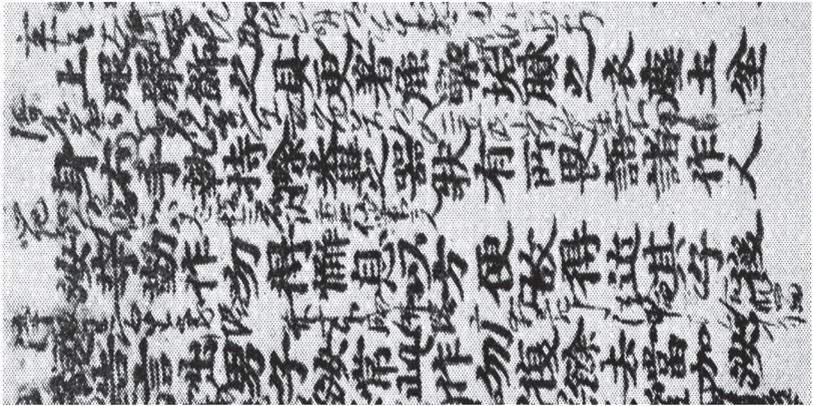
複数の○でお答えください

親 祖父母 兄弟 子供 親戚 仕事などの関係者 日本の国

他人 先生 政治家 銀行員 廃品回収者 ホームレス

「私集寂要文注法華經」より抜粋

日蓮聖人の注法華經信偈品第四の行間に  
「心地観經偈云八卷般若三蔵訳畫仙筆受」の  
日蓮聖人の墨跡が見られます



日本僧 靈仙三藏翻譯の大乗本生心地觀經

大乘本生心地觀經卷第一

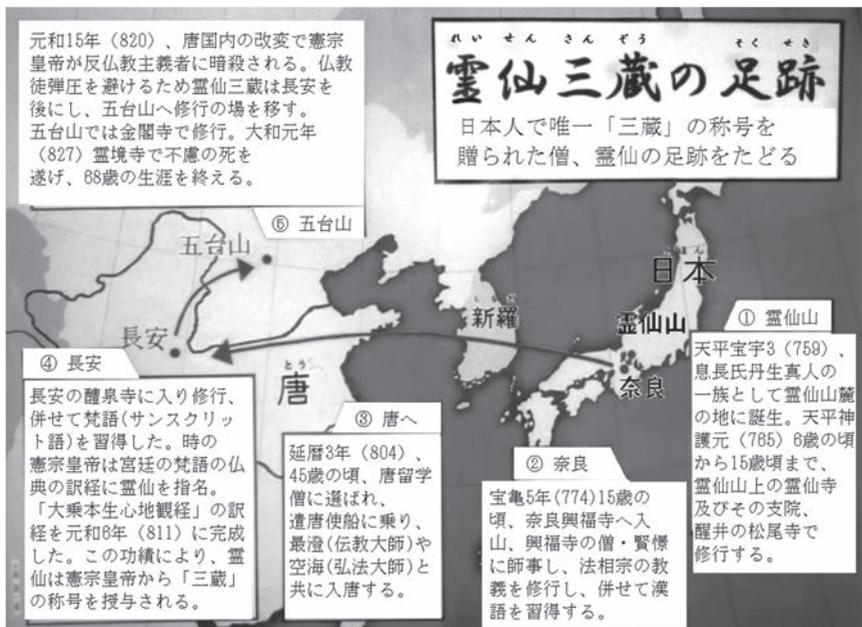
元和五年七月三日 内出梵夾其月七日奉 詔於長安醴泉寺至美年三月旨翻譯進上

蜀賓國三藏賜紫沙門般若宣梵文

醴泉寺日本國沙門靈仙筆受并譯語

經行寺沙門令暮閏文

右記は大正二年、滋賀県の石山寺にて古文書調査中に発見されたものです。唐の元和五年・八一〇年〜元和六年まで長安の醴泉寺にての翻譯です。憲宗皇帝が般若に宣託された梵文を日本国の僧靈仙が中心となり、筆受並びに譯語を担いました。この功勞により靈仙は三藏の位を賜りました。



### 靈仙三蔵記念堂



平成十五年竣工

滋賀県米原市山麓  
醒井養鱒場奥



(記念堂内部)

#### 参考文献

- 日蓮宗電子聖典(日蓮宗)
- 私集取要文注法華經上巻
- 國譯一切經(經集部六)大東出版社蔵版
- 大唐新翻譯大乘本生心地觀經(宮内庁書陵部蔵)
- 靈仙三蔵と幻の靈仙寺(さんどう会編)
- 四恩説の再検討(松永有慶著)
- 心地觀經通解(本多日生著)

# 教化の目的と手段

大場唯央

こんにちは。静岡県藤枝市にあります大慶寺というお寺で勤めています大場唯央と申します。本日はよろしくお願  
いいたします。大慶寺があります藤枝市は、人口十四万人の地方の街です。私自身は大慶寺で勤める一方地域でNP  
O法人や一般社団法人を経営したりボランティア団体を運営したりしながら地域作りに関わっています。

そんな経験故か、現在日蓮聖人降誕八百年記念事業の寺フェス事業のプロジェクトチームに属しておりまして、以  
前宗務院の会議で寺フェス事業について発表する機会がありました。その際に、現宗研の所長様よりお誘いをいただ  
き今此の現場にいるわけでございます。

大変恐縮なのですが、例年の発表大会がどのように行われていて、どのような内容を話されているかも存じ上げま  
せん。少し場違いなのかもしれませんが、本日は自分の経験を元に、お話しをさせていただきますが、私自身研究者  
でもなく学者でもないため、あくまで私見ということでご理解いただき、ご聴聞の程よろしく願いたします。十  
五分という短い時間ですのでテンポ良く少しペースを上げてお話をさせていただければと思います。

## 持続可能性の問い

我が宗門の日蓮宗は立教開宗から七百六十年以上、伝道教団として教化活動をしてきました。今後も教化を続けていくためには、まず必要なことは『どんな教化をしていくのか?』という問いももちろん大事なのですが、その前提として、『我々日蓮宗という宗門が今後も続いていくこと』という土台になる部分の議論も同時に必要なのではないかと考えています。

というのも、今まで七百六十年続いているからと言って、今後も七百六十年宗門が伝道教団として続いていく保証はどこにもないからです。つまり、教化を考える上では『我々日蓮宗という宗門が今後も続いていくこと』すなわち「宗門が持続可能」でなければいけない。

五年十年というスパンではなく五十年、百年先という長期の目でみたとき「持続可能かどうか?」ということが大切であり、今日はこういったアプローチから「教化の手段と目的」という話に結んで行きたいと存じます。

## 宗門の持続可能性

では「宗門が持続可能か否か」そのデッドラインは何か? ここには様々な要素があると思いますが、私は「多様な有無」に関わっていると考えています。

というのも時代は急激に変化しています。まさしく「諸行無常」でこの先はどうなるかわからない。いつ何が起るかわからない。

例えば「現在ものすごく成功している寺院」があったとしても、それは「現代」という「特定の環境において」成功しているだけであって、同じあり方が今後も続くとは限らない。

そして成功している寺院を参考に、現代の経営者が行っているように「選択」と「集中」をし、効率化をはかり、合理化していく。宗門が本社・支社のように、組織でガチガチに固めて、全てのお寺が同じように教化をし、寺院の経営をしていく、まさしく単一化です。例えば〇〇宗のように。

こうした場合、成功してる時は、もちろん莫大な効果があるかもしれませんが。しかし、「何かあったとき」は総崩れドミノ倒しです。単一化にはそうしたもろさがあります。

山や自然界もそうですよね？ 単一性の竹林、杉林より、広葉樹もあり針葉樹もあり、下草も生えて多種多様な植物が生息している山の方が強いんです。生命体もそうなんです、長いスパンで続いていく事を考えたならば色々なパターンを残す必要がある。

つまり日蓮宗ということ考えたときに、多様性を持っていた方が、今後何十年何百年単位で時代が変化していても、ゼロになることはなく、様々な変化に対応出来るんです。

では、宗門の多様性とは何か？それは紛れもなく、各寺院の個性です。各寺院の多様なあり方、教化方法です。

例えば、檀家さん相手に供養をしているお寺、信者さんに御祈祷をメインにやっているお寺、寺子屋活動に精を出すお寺、檀家制度を廃止したお寺、住職が兼業しているお寺、など多様な寺院のあり方があると思います。

そして教化の方法も、供養の法要、修法、説教など画一的なものではなく、各寺院の各教師のあるいは寺庭婦人のそれぞれの能力や特技やコミュニティを生かし、アプローチをしていく。

こうした各寺院の草の根的な教化活動というのは、短期的に見たら効率が悪かもしれない。けど、長期的にみたら、このような多様の寺院のあり方を包含していた方が宗門としては強いと思います。

ですので今、必要とされているのはそうした『宗門の多様性』各寺院の個性』なんです。各寺院の多様なあり方、そうした『寺院の多様性』を強化していく必要があると感じています。

## 自坊の取りくみ

その「寺院の強み」による教化のアプローチとして、自坊で行っていることを例として簡単に説明します。

私の勤めている大慶寺では藤枝市の中では歴史も七百六十年と古く、本堂・客殿の伽藍も立派で、天然記念物もある、旧東海道沿いであって、駐車場もあり、地域の観光マップなどではよく掲載される寺院です。かなりの強みです。

## 役割分担

檀信徒教化においては住職が中心となり行っています、信頼関係もかなり築いていると思っています。お寺に戻った私の役割としては「未信徒教化」。つまり五十年後の種まきです。

## 課題

未信徒教化にあたり、いきなり課題がありました。それはお寺の認知度です。歴史のあるお寺なので「藤枝市の大

慶寺」はそこそこの有名なだろうと思っていました。しかし「井の中の蛙大海を知らず」です。

ごくごく狭い中学校単位のなかでは、大慶寺といえば「あーあそこね！」ということは認知してもらえますが、少し離れると「どこにあるの？」という有様。全然市内にもまだまだ認知されていない。

いきなり未信徒教化といっても、何も伝わりません。教化までいくにはいくつかのステップがあると考えました。

『お寺の認知度アップ↓接点づくり↓お寺のファンづくり↓教化』です。

## 認知度向上

そこです。『知ってもらいたい』ということと考えました。しかし、ただ「お寺が広告をうつ」ということは下手をするとイメージを下げることになる。田舎の地域はそういうものです。なんとかして「こっそり」お寺のプレゼンスをあげたいと考えました。

そこで、私がボランティア団体やNPOなどのまちづくりに関わっていたので地域内のネットワークがそこそこあります。ですのでまずは「お寺で何かしらのイベントをやってもらおう」ということです。それもお寺主催じゃなく、地域の人が主催するイベントを行政がサポートするというやり方です。

この手法の強みは『いち宗教団体のイベント』ではなく、あくまでも「地域のイベント」なので公共性が担保される。そうなるイベントのチラシが藤枝市全戸に回覧版で回ったり、広報誌にも掲載されたり、新聞・テレビ・ラジオの取材があったり、そこではもちろん教義的なことを話すわけではありませんが、「会場は大慶寺」というだけで、

認知度が上がりました。

それだけで考えてみると、会場提供しただけで色んなメディアに「大慶寺」という名前がでてくるようになります。下手な広告をうつより、有効です。完全なステマです（笑）。

## 看板

こうした活動も継続していく一方で、より親しみをわかすために門前に大きな看板を立てました。目的は「認知される、知ってもらう」こと、その為の手段が「看板」という形態です。

なので、認知される看板でなければ意味がないのです。そこで作ったのが、「DKG」という看板です。最初は檀家さんに怒られるかなろと思っていました。おおむね好評でした。

そして、この看板のおかげで同じく新聞やテレビにも放映されました。先ほどの会場提供とこの看板設置、広告換算費にすればかなりの額になってるんじゃないかと思えます。

## 接点づくり

そうした、認知度向上を計ったら、その次に必要なのが「接点」。「直接お寺と触れ合う場」です。そこではじめてのが「毎月三日にお寺を開放する」という取り組みです。平日・土日祝日関係なく「毎月三日」はお寺を開放してマシエやワークショップやリラクゼーション、など複合型のイベントを開催しています。この毎月三日のイベントに私も常に滞在し、参加する人や、出店者などとコミュニケーションをとるようにしています。ここではお寺との接点を増やしネットワークを構築することができました。

三日にした理由は、毎年自坊では十一月三日にお会式と毘沙門天の祭を行っているのですが、そちらの参拜も増えるのではないかと、また二月三日節分です。いままで節分の行事はやっていなかったのですが、節分の行事にもアプローチが出来るのではないかと考えました。

こうした活動を地道に続けていき、お寺の認知度も向上し、ネットワーク構築もでき、今では檀家さん以外でお寺へ来る人も多くなりました。

けれどまだまだファンにもなっていないし、教化には至っていません。接点を作ってからファンになってももらうには、より一層のアプローチが必要になります。

## ファンづくり

ファンになるにはまず信用されること。そして「触れ合う場＋交流＋感動体験」。今度は私自身が主役となって企画を行うことが必要だと考えて、毎月三日の「おかげさん」に、自分自身が出店者として「おもいで供養祭」という人形など愛着あるものの供養祭をしたり、二／三には節分祈禱を始めてみたり、「寺シネマ」として「上映会＋トーク」をしたり、交流を図っていました。また近所のバーを貸し切ってお坊さんと話しながら飲みましょう！というポーズバー！という企画を試みたり、「年越し水行」、「七五三」など自分がアプローチできるターゲットを決めて様々な取り組みをしています。

## 教化の成果

成果の方は『教化できたか』というと、成果指標をどこへもっていくか？にもよりますが法華経や仏教の信仰へ導くという点ではまだまだ。途中経過です。ただ、こうした活動で直接檀家が二軒増えたという現状もあります。

また、一点ものすごく可能性があるなーと感じたのは、仏教に興味ある若者が多いということがわかりました。

それが「ポーズバー」です。ただお坊さんと飲もうよという企画です。今二年続けてやっていますが、告知を強化したこともあり、予約開始その日に予約満員です。「もつとやってー」との声も聞こえてきます。お坊さんが仏教のお話しをするという、ごくごく当たり前のことが求められているんだなーと感じました。

このように、「教化」にいたる手段・方法はいくらでもあると思います。大事なことは手段を目的化しないこと。例えば、「認知度向上」が「目的」で行う「イベント開催」という「手段」。これをイベント開催することが目的化にならないこと。

また翻って、我々が昔から行っている年忌や葬儀などの供養の法要、あるいは修法や法話など、「手段」が目的化されていないか、つまり何の為にしているのかという目的を見失い「お坊さんは法事をしていればいい、法話をしていればいい」という行う事自体が目的化していないかと問い直すことも必要かと思えます。

手段の目的化は「阿羅漢」です。目的を見失い、前例踏襲するのは阿羅漢です。例えば法華経を信仰していたとして

も、そういうスタンスが阿羅漢です。

今一度「目的」を整理すれば、教化の方法は多種多様にあると思います。一千人いれば一千通りの教化の方法があるんじゃないでしょうか。仏教は人に合わせて教えがありますから。ですので、今宗門に必要なのはそうした『多様な教化方法の開発にチャレンジする場づくり』なんです。

そして、これが日蓮宗八百年の「寺フェス事業」で提案するものになりますので、ご期待下さい。

寺院の個性を生かし、多様な教化方法を開発し、多様な寺院のあり方をつくる。これが宗門の多様性であり、持続可能な宗門をつくっていきます。

### 統合性

さらに、より宗門を強固にするには、多様性だけでなく統合性を求めていくことも必要です。

多様性と統合性、相反するものですが是を可能にするのが日蓮宗なんです。それは、まぎれもなく多様性と統合性の思想は「開会」の思想に通ずるからです。お曼荼羅の世界だからです。

そして宗門の統合性というのは「子弟教育」「教義教学の発展」「プレゼンスアップ」になると考えます。コチラについてもお話ししたいところではありますが、時間の都合上また機会がありました時にお話しさせて頂ければと存じ

ます。今日のご静聴ありがとうございました。

# 伝わるからだの探求④

——ゼロ弾きのゴーシユを模擬的に色読して——

釋 一 祐

易経に「地雷復」という言葉があります。大地に雷がとどろき慶事が始まる。自然現象が齋す縁起論です。始まるならば「生」とか「始」とすべきですが、「復」とあるのは、その陰行陰徳が遙か昔から反復されてきたことを教える為であります。

世界中で大流行しはじめた「マインドフルネス」は「瞑想」「禪」を元とした治療法です。人類は細菌感染症からはほぼ逃れ、今は免疫性疾患が課題です。この最有効治療として、ハーバード大学が出した答えが「マインドフルネス」でした。明治二十六年シカゴ万博にて開かれた、はじめての「万国宗教会議」。インドのヴィヴェーカーナンダと、日本の釈宗演が紹介した仏教の禪、ヒンズー教の瞑想は西洋の心を大きく揺さぶります。日本総監督は岡倉天心でした。ベトナム戦争中、米軍兵士は休暇中に仏教寺院へ入り僧堂生活をはじめ、アジア各地で仏教、儒教、道教を学びます。「教法流布の先後」の判断力をもってどう受け止めるべきなのでしょう。これらが野狐禪であるか止観業か？ その鑑定人が求められています。

地球は、まず植物により酸素濃度を上げ動物を生み、酸素濃度が低下すると巨大隕石を引き寄せ、ユカタンインパクトを起こし、十五年間の太陽隠れ（赤道下でマイナス十五度）をへて、環境を調べてまいりました。今でも、地球は年間約十万吨づつ質量が増加しているにもかかわらず、自転公転の速度や太陽との距離を保っています。

ヘルマンヘッセは渡し守にこう語らせています「私はこの川から学んだのです。すべてのものは帰り来るといふことを」と。今やこの論理（散逸構造論）はノーベル賞が認めるところです。

中国の砂漠に、夏だけ出現する川があります。陽の季節に齎される陰の恵み。亜熱帯の雨季と乾季。日本は四季と土用があり、山川草木彩り豊かなる由縁です。

中国では天地自然の流れを物理科学的に観察し気学として陰陽五行十干十二支に分科し、水流気流の観察を深めて天地一致を理解してゆきます。昼間は天に陽の力、大地は陰の力、夜は天に陰の力、地に陽の力。陽に対しては陰、陰に対しては陽、自然は強さに強さをぶつけません。

狩猟採集から農耕備蓄へと文明が転換しはじめたのは約一万年。狩猟採集時代は、身体能力の高さ、敵と毒を見つめる力が生存を支えました。相手の間違い探しと打ち負かしの能力です。それが農耕備蓄主流になると、自然現象の予見が優れた人材の資質となり、一方では貨幣を産み出します。一粒を半年で茶碗一杯にする、自然の圧倒的贈与、救い、一即多の法則に魅せられ、天地自然に倣う精神性、悦びと楽しみ、誉め励ます共感力の高さへと変化していきます。呪術と宗教のあわいです。

はじめ神への捧げものだった動物の血と肉は穀物へと替わり、やがて自他の関係性を信じ自らを捧げる菩薩が登場します。

昨今、心理学は六度・四無量心・三乗・一乗の教えを実用し始めています。心理学は、ヘルニズムにより運ばれた西洋における唯識的成果であり、キリスト教やユダヤ教の成立に仏教化があつたことは、もはや疑う余地のない今日であります。

アレキサンダーが西北インドを征服したのは、お釈迦様御入滅後約一〇〇〜二〇〇年。コーランに於けるイスカンドル、ヒンズー教のスカンダです。「大王はアジアの国土を征服したが、思想は征服された」と伝えられています。

このアレキサンダーの心を支配したアジアの「寛容の精神」はその後、民主主義ムーブメントを起こします。

アレキサンダー没後、約五十年（がアシヨカ王の時代、そして約三〇〇年後にイエスキリストが誕生します。紀元前の数十年間がシーザーの時代です。イエス様は、仏教の影響を最も受け、熱烈に救世主誕生を待ち望んだユダヤ教エッセネ派の出身です。

アレキサンダー自身も仏教インパクトを心に刻みました。また東洋の民衆もアレキサンダーインパクトを皆で共有しました。「あの様な大王の軍勢に国を蹂躪されたら、いくら自分個人のさいわい（成仏）を追求しても、埒が明かない」、これによりさいわいの定義が個人から集団、社会へと深化し、修行の在り方の変革を迫られます。

お釈迦様がお覚りになったところ、孔子様は、気学をふくむ、東洋の自然科学を纏め上げます。その後、仏教はこれを思想的な下地として漢訳され、そのまま日本へ伝わります。

ギリシャ神のトップ、ゼウスの姉にしてその娘を産んだデーメーテルと娘ペルセポネの地母神物語は鬼子母尊神様や七面大明神、伊邪那美命を想起します。多宝如来、地涌の菩薩、根の国↓国つ神↓地祇↓大黒さま↓日蓮聖人、当門下は大地との深き縁があります。地母神は寛容と柔順のシンボル、ま



さに千縁の象徴です。

マタイの福音書に「柔和な人達はさいわいである。彼らは大地の力を受け継ぐであろう」とあります。

陀羅尼品の呪文はダーラニーというよりマントラ、毘沙門天の呪文は地母神の力を高める讃文とも読めます。

今、禅が宗教の枠を越えコモディティ化されました。この先往きは個人から集団、社会、国家の健康へと向上するのでしょうか。世界一の大王アレキサンダーの心を掴んだ仏教と、世界共通の地母神に倣う寛容の精神「千縁運動」展開を願います。

宮沢賢治作品群には「寛容なる精神を育む」超課題（演劇用語で作家の意図）が籠められています。多く舞台化され俳優のレッスンとして親しまれており、聖霊が宿ると崇拜され、能楽にもなっています。

特に声に出し、からだで動いて役を生きる領域に入ると、それは仮想体験とはいい難いほどの感化力を持ちます。始めに訪れる三毛猫は、ゴーシュのトマトを穫ってきて「お土産です」といい、弾いてみなさい聴いてあげるからといいます。その言い草に怒って、ネコがいやがる曲を弾いて腹いせをします。

次にカッコウがやってきて教えを請うくせに、自分の言分ばかりを主張します。しかしその熱心さにほだされて随分上達します。

次はとつてもおらかな狸の子がやってきます。ゴーシュは誉められその気になり、リズムを取る練習をはじめます。心が躍る様なその子狸のリズムにゴーシュは愉しく弾きます。そしてそれとなく間違いを正す子狸の指摘も心安く受け容れてしまおう。

最後は野鼠の親子です。ゴーシュのセロの響きは按摩のようで病気が治ると励まされゴーシュは自分の存在の意味を感じます。

指導者に必要な資質「寛容さ柔らかさを伴う誉め励ます力」の重要性になぞらえ、小中高の歩み三乗が文脈として

あります。

賢治文学の特徴に「逆擬人法」があります。一見動物の擬人化と観がちですが、人間が動物に共感し同機します。主体が動物、客体が人です。見失ってしまったものを非社会的動物によって気付かされる。「夕鶴」なども同種の物語。あわいのもつ更生力です。

光とは動く一本の線で、光のベクトル上に自分が居合わせてはじめて光を受ける事が出来ます。宗教は天地自然、存在するすべてを逆擬人化する。信仰はその天地自然が放射する光に照らされ、自分がどう映えているのか、如何なる存在とされているのか、天地自然を主体に置き、それに対し自分は客体的立場に積極的に立ち、伝わってくるからだに柔軟に随う生活。昨今では科学もこの宗教的方法論を採用し始めています。戒定慧を超え「信」の領域を捉え始めています。

「仏教は強引な力を持ってではなく対話をもって伝道された類例のない宗教」とは西側の評価です。近代は宗教の力が衰え、国が力を増長します。正しいとか慈悲深い人間性等ではなく、統制巧みな人種や国家が権力を持つ時代。しかしその国家も絶対的なものでなくなり、今や地球上の何処で何が起きても、それがすぐにすべての国々の存亡、さらに我々一人ひとりの生活に直接影響がおよびます。数十年前までは、乱暴で野蛮な支配者によって社会が崩壊しても、その力の及ばない地域からの支援によって復興ができました。ところが世界が一つになってきた今、どこかで何か起きると、世界中にたちまちその影響が及んでしまう。そして破壊してしまったらもう取り返しがつかないという危険があります。後戻り出来ない地点、シンギュラーポイントを越えたのです。

「異質的なものに対する好意的関心」が個人及び組織の必須条件です。自分とは違う考え・信仰・習慣・行動・思想・主張に対する、お釈迦様が徹底して行なわれた寛容宥和の姿勢に注目が集まっています。

気学では「二黒欠けは地獄欠け」といわれ、もつとも恐ろしい事態とされ、寛容と柔順が欠けた社会を地獄の環境

と忌み嫌いました。二黒は大地を担当しています。寛容さを失い排他的独善性に大衆傾向が傾いた現代への対応策を気学は明確に示しています。そして、先祖供養やお墓や遺骨と自分との関係性が、自分の未来と対極で繋がっている事も示しております。マニユアル的に活用する危険性は歴史が警告するところですが、その奥にある論理構造や思想性からは明るい展望が開けます。この気学が二度目の東洋インパクト。十七世紀ころ、当事者はハイデガーやヘーゲル等の哲人達でした。

人間は意味もなく生存してはいけないのでしょうか？それとも意味は周りが見出すもの？意味が先か、生存が先か。穢れや悪を徹底して嫌い排除するのが仏教の精神ならば合掌という姿は生まれなかつたはずです。戦後最悪と報じられた相模原の事件を想いこれを考えます。リオオリンピックのテーマは「寛容」でした。

いま、我々人類は温暖化シンギュラーポイントを越え、日本文化喪失の歯車が廻り始めてしまいました。この人類生存の危機を回避する科学的方法は、気体炭素の固形化です。自然界に委ねるならば、善神捨国？闇と極寒の十五年。神話が伝える天の岩戸隠れなのでしょう。再び太陽の恵みを齎したのは悦びの声、神を称える美しい言挙げでした。仏教および宗教の立場からはどんな方法論を発信できるのでしょうか。

経済学の父アダムスミスが行き着いたファーストエコノミクスは「保身窮まれば利他となる」でした。もう菩薩の生き方は特別なものでも、聖者の特殊能力でもなく、仏教から独り立ちし、最も優れた処世術としてコモディティ化され始めます。僧侶と寺院はそのパイオニアとなれば、社会からとても大切にされるでしょう。

最後は、ヘルマンヘッセと宮澤賢治の言葉で締めくくりたいと思います。

渡し守は一言も発しないのに、語り手はよく感じた、静かに、胸を開いて、待ち受けながら、自分の言葉を受け容れてくれること、そして一語も聞きもらさず、一語も焦って促すことなく、賛辞も非難も挟まずに、ただじつところらの言葉に傾聴していることを。このような聞き手に、おのれを告白し、その胸の中へ自己の生涯、自己の探求、自

己の苦悩を沈め葬ることは何という幸福だろう。

自我の意識は個人から集団、社会、宇宙へと次第に進化する。

この方向は古い聖者の踏みまた教えた道ではないか。

新たな時代は世界が一つの意識になり生物となる方向にある

正しく強く生きるとは、銀河系を自らのうちに意識して、

これに応じていくことである。

なべての悩みを薪と燃やし、なべての心を心とせよ。

風とゆききし、雲からエネルギーをとれ。

個性の異なる幾億の天才も併び立つべく斯て地面も天となる。

我々に要るものは銀河を包む透明な意志、巨きな力と熱である。

有り難う御座いました。

大垣 宝光寺 釋潮叡

## 参考文献

「農民芸術概論綱要」「ゼロ弾きのゴーシユ」宮澤賢治・「シツタルダ」ヘルマンヘッセ・「宮澤賢治」齋藤文一・「雨ニモマケズ手帳新考」小倉豊文・「氣の思想」小野沢精一・「老壯と仏教」森三樹三郎・「儒教とは何か」加持伸行・「伝習録」王陽明・「易経」竹内好・「世阿弥」鎌田東二・「贈与と交換の教育人間学」矢野智司・「中村元選集」・「法華學報」伊藤瑞叡・「認識の仏教」丸山照雄・「国富論」アダムスミス・「ドラッカーライフアレンス」・「ダイアローグ」デヴィットボーム・「上原専禄著作集」・「世間への旅」阿部謹也・「公共哲学とは何か」山脇直司・「母性社会の日本の病理」河合隼雄・「平成二十五年度教師基礎研修会講義録」日蓮宗宗務院・「日蓮宗の近現代」日蓮宗現代宗教研究所

## 賢治探求の小径

賢治先生との急接近は、小学校国語教師鳥山敏子先生との出逢いから。憑依度があまりにも深く三十七歳になった時生き方を見失ったほどの方。敏子先生の賢治探求は賢治先生の教え子の方々との果てしない雑談と思ひ出話しを通して、生々しく賢治先生と同居することと作品の演劇読みだった。ゆえに「賢治先生」と呼ぶのがなじみ深い。敏子先生の師匠は演出家であり大学教授であった竹内敏晴先生。演出家岡倉士朗（岡倉天心の甥）、作家木下順二、俳優山本安英、宇野重吉らと近代演劇界の端緒をになつた方。この竹内先生の俳優のレッスン、人間の生き方レッスンには賢治先生の作品が課題の一つとして常に挙げた。理解から入る経路ではない、手本に従つておのれの分別価値観を介せず、体感から立ち上がってくる「目覚め」へ行き付く探求。信解と言うべきか、この経路を模擬的色読と仮名し、梅干のように食わずしても唾を涌かせる教化道を探求。

# 次世代教育への二三の留意点

森 下 龍 浄

## 寺院は如何様に見えるか

ある聾学校の先生の話。「楽ですね、手話を教えてるだけで」といわれたらしい。「何を言う、全人教育ぞ」と憤慨しておられたが、これは寺院社会も同じ。寺院貴族との陰口もきくし、「儲かりまっか」と問われるから、もつと複雑かも。「楽ですね、お経を読むだけで」「何を言う、お経は全人教育ぞ」と言いたいが弱点もある。

檀家などは迷信俗信の会話で、これに対し釈尊・宗祖・高僧の一生をなぞる法話をして終了。たまに道徳系垂訓的説法か偉人伝。俗世間常識に迎合した「禁忌説明」と祈祷。日蓮暦とおふだの配布は日常的。合掌の説明に「手のひらを合わせる、しあ（シワ）わせ」「手の甲と甲だと、ふし（節）あわせ」などなど。

低音で響く社会の要望は「寺よ変われ、僧よ変われ」。なのに法華経を語るでもなく、個々人の「観」や「感」にすぎないものを大上段から語る。とかく上から目線で超越項（お経）から説こうとする。補強材に孔子・聖徳太子・西行・賢治・石橋湛山などと繰り出してもその間をつなぐものがない。今や「住職の人生観は」「散骨は」「ガン告知は」「菩提寺変更は」「位牌とお墓は絶対必要か」などと全方位の覚悟を問われる時代。いやが上にも対応と即答は避けられない。僧個々人の人生観の再構築が求められている。

## 次世代育成にはぜひとも死生学

そこへいくと、俗人は多様な実人生ウォッチングと倫理学をはじめ諸学の積み重ねを土台としてアプローチしていく。人生観・死生観を多方面から語り、人間に横の広がりや深まりをみせる時、それを死生学というらしい。

そんな中、宗門緊要の次世代教育というと信行道場五十日・百日説、道場改革・新規カリキュラムとかのテコ入れが聞こえてくる。だが、ことはそう簡単ではない。人生観の変革を迫られる意識改革なので、お祖師さまのお示し「まず臨終のことを」が先にくるべきで、物理的テコ入れはその後のことではなからうか。総合的な人間学ととらえて、死生学に眼を向けてみようではないか。

## 人生観・死生観・死生学

死生観といえは「終活、死の瞬間、死後のこと。枕元に子供を集めて最期の別れを。病院はいや、畳の上で死にたい。お盆にはみんな集まって」などを思い浮かべよう。だが、そんな単純なこと？

四季の移り変わりのように、秋にはすでに冬の気を含み、生はすでに死の兆しを含む。死のまさに終わらんとするところに生の継がりを見る。周囲の人々の心の中に思い出という形で生き続ける、それはその人の命の連続であると考えたいのではないか。死そのものも生命現象。死もいのちという捉え方。人生を死において完成させること。そこに、死の悲しみや死を想像する苦しみを乗り越えるキッカケがあるとす「精神世界」もある。

## 如何様に見るかの死生学

さて、年来気になっている歌が二つある。千の風に「そこに私はいません。眠ってなんかいません。あの大きな空

をふきわたって、「とつづく。「そこにはいません」のところが波紋を広げた。墓をないがしろにしている、などとある県の某宗派寺院連合はこれを葬儀場BGMに使わないように申し入れをしたものの、数年後には「墓参り減少にはつながらなかった」撤回したという。そのいきさつはすっかり人々に見られた。こうした死生観を諸学の知見も交えて宗派内で議論したら、立派に死生学を学ばれたことになったろうに、惜しい。

いま一つは真白き富士の峰。三番にある「みたまよ何処に迷っておわすか、帰れ早く母の胸に」。ここは「御霊・いづこ・迷い」が要注意ポイント。「いづこに迷う」とは、この水難事故からして日本人大多数の感傷だろう。しかし法華経はどうか。事故死の霊は迷っているのか。

個々人の死生観を披瀝し、人生観・生きざま・お経の読み方・靈魂のありかへとふくらまして議論したい。

## 自殺を如何様に見るか

例えば自殺をどう受け止めるか。いのちを粗末にしてはならぬ。しかしその人の「究極の選択」をどのように受容しよう。注意が必要なのは説法の場合。普通には「いのち大切に。粗末にするな」が問題になることはない。お経の最重要度メッセージだろう。だが、自殺してしまったら。自殺者とその周囲の人々の前ではこれが禁句となる。「いのち大切に」が「ほら、粗末にしたでしょう」と非難の言葉になるからだ。

「それぞれの事情・理由で、ほかの道は見えずつからず、本人の弱さも加味した」かもしれないのに、命を断つた人には酷としかいいようがない。「その決断は容認」するの他はない。すでに死んだ人は、誰の中に生き続ける。その人生は誰に継承される。生の世界は死の世界のただ中にあり、死の世界は生の世界のただ中にあり、とはこのことといえる。生き残る者の生き抜き方と死に行く者の想いをつなげて考えようとする時、そこはもう死生学の世界。

終活のずっと手前から考え始め、そのずっと先までを視野に考えていけば、有意義な人生になるし、それが自分の

人生を「人として生ききる」の中味かもしれない。たえず死を思い己の価値観や死生観の見直しをしたい。

## 人生を生ききる

二〇一六年・死の臨床研究会札幌宣言に「最期の時まで、希望する生き方を実現しよう。させよう」とある。死の床に伏す人にも本当に大切なことを求める自由、その人の意思決定を支援し表明できるように環境を整えようというアピール。絶望に寄り添う、死の看取りの学、「死に向かう生」のケア学。出発点も到達点も「生の学」であり、どうしたら自分の人生を「生ききる」ことができるか。「生」をとことん見つめる学なので、深まり行く「生」にそっと投げ入れる触媒が死・死生学ととらえられよう。もともと死は語り得ぬもの。そこを語るには生からアプローチするしかない。終活など、断捨離をも彷彿とさせて法華経布教の場にはまったくもの足りないのである。

## 第二点・寺院世界のアキレス腱は

では注意点第二位にして緊急性第一位とは何か。

「未信徒教化」「我が家の宗旨」。普段は気にもしないこの二つが対峙する時がある。布教の効果ありて「ワシはお上人さんとの檀家になりたい」と来たとする。どっぷり世俗的だが推測してみる。未信徒なら当然のこと即OKだろう。他寺信徒に二種あり、一つは他宗、いま一つは本宗。この場合も他宗から入信は問題ナシ。超やっかいなのは「本宗寺院間での移籍問題」。

行くも追わず・来るも拒まずの態度も、当然ある。苦悶しつつ考えるべきは「盗った」「盗られた」の応酬。この処理を誤ると、寺院社会の奥の奥、醜い部分をさらけ出すことになるので、離れた人心は戻ってこないと見なければならぬ。しかもそれらのいきさつは尾ひれを付けて人の口から口へ、社会に広く広く伝播していく。

その時の檀信徒の心はどのようなものか。「盗った盗られたと、ワシらを物扱い?」「寺院間で談合して移動を認めないのは納得いかぬ。もう愛想が尽きた。他宗に行く」「信教の自由は憲法に保証されているはず」etc。つまり足をすくわれる仕儀となる。なんともはや、世をはばかり論になってしまった。崩れてはならない寺院共同体としては、法華経我土安穩を思えば、このような事態を想定し、一定の手順を考えておくべしと提案したい。全国どこかで今も発生している困惑事態である。緊急性アリと思う。

### 今後を如何様にすれば

寺院間がこれほど固定的で移動の壁が突破できぬとなれば、未信徒布教を掲げて社会に出ようとする「有為の新進気鋭次世代僧侶の布教意欲」が削がれることとなろう。「日蓮宗ミトラサンガ」からもうすうす感じとれる。ことは現役世代の矜持、人生の基本姿勢と密接につながる。伝道宗門と謳い、社会へ社会へと叫び、死身弘法を多用している我々。南無妙法蓮華経はこれでいいのか。ご本尊・お祖師さまが苦笑いでお済ましになられるだろうか。

すでに地歩を固めた寺院からの「うちを荒らすなよ」のささやきも、「所長・宗会議員を経験し、もう何もするところが無い、あ、あ、あ、」も、「権大僧正ほしい」も、ひとつの人生観ではある。このような閉鎖系宗門内議論を、外圧からとはいえ、開放系に衣替えして研鑽する時、それまでのもの見方がシャッフルされて新発見があるだろう。それで脱皮できるかもしれない。まず急務の二点を提示してみた。なんとすれば「うちを荒らすなよ」と言ったとたん閉鎖系を離れて寺院・檀家相互乗り入れ交通系になってしまったのだから。

# 宗教音楽と教化

西口玄修

## はじめに

国歌、校歌、社歌などは、歌う人数が多いほどより帰属意識が高まり、外側に存在をアピールする効果がある。ヨーロッパキリスト教社会では教会と音楽は、切っても切れない。ミサ曲、レクイエム、教会カンタータ等は、典礼儀式の荘厳さを演出し、賛美歌は、ともに歌うことで信仰を感化する。

## 伝統的な仏教音楽

仏教においても、民族性や歴史を反映した多くの種類のものがあるが、(チベットやタイに顕著) 一般に大乘仏教が音楽性に富んでいて、寿量品偈にも「諸天撃天鼓 常作衆伎楽」とある。

一番身近なのは、儀式で用いられる声明(浪曲、演歌のルーツともいわれる)

信徒が、仏教の教義や仏・菩薩(ぼさつ)あるいは高僧の徳などを、和語で讃える和讃。寺院・霊場巡礼の際に鈴(れい)に合わせて唱えることが多い御詠歌。

これらは、十六世紀ころにはすでに存在していたといわれる。

## 近代

明治期に入り、キリスト教の賛美歌に刺激されて西洋音楽の様式で作曲された歌による布教伝道が開始された。唱歌に始まり、讃仏歌（さんぶつか）オペラ、カンタータ、交響曲にまで展開されていった。

仏教讃歌は、仏教に関する素養のある作曲家、作詞家によって、明治から今日に至るまで、盛んに作られ、現在まで三百曲以上（仏教曲・曲目リスト）の仏教讃歌がある。また、浄土真宗本願寺派仏教音楽研究所（現・総合研究所 仏教音楽・儀礼研究室）によって制作された、クラシック音楽演奏会用の「カンタータ歎異抄」などもある。

楽譜と歌詞が掲載された著作として、『聖歌・讃歌集』（全六巻＋こども編全二巻 浄土真宗本願寺派総合研究所 仏教音楽・儀礼研究室編、本願寺出版社）、『曹洞宗仏教讃歌集』（曹洞宗宗務庁）などがある。佛教大学、京都女子大学、龍谷大学、相愛大学、愛知学院大学、駒澤大学、武蔵野大学、大谷大学、立正大学、大正大学などの仏教系大学では仏教讃歌が入学式や卒業式などの行事の際に歌われる。また一部の大学の合唱団では、演奏会等でも歌われている。

## クラシック音楽の分野

管弦楽の分野では、貴志康一の交響曲「仏陀」がすでに戦前に作曲演奏されている。

貴志康一（一九〇九～一九三七）

一九三四年 ベルリンフィルハーモニーを指揮

自作の交響曲「仏陀」その他を演奏

## 1、交響曲「仏陀」

第一楽章 「印度 ♪父 ♪」

第二楽章 「ガンジスのほとり ♪母 ♪」

第三楽章 「釈尊誕生 ♪人類の歓喜 ♪」

第四楽章 「摩耶夫人の死」

以下は構想のみ

第五楽章 「生老病死 ♪青年時代 ♪」

第六楽章 「出家を決心す」

第七楽章 「成道偈」

貴志康一没後五十周年記念コンサート 交響曲「仏陀」ビクター音楽

戦後、大編成のオーケストラに混声合唱という大規模の作品が生まれる。

宗門の記念大会、教団のイメージアップのために作曲された。

## 2、交響頌偈「釈迦」(一九八九年) 伊福部昭

バレエ音楽「人間釈迦」から音楽を抜き出し、オーケストラと混声四部合唱のための作品として完成させた。

第一楽章「カピラバスの悉達多」

王子として貧しさも飢えも苦しきも知らない暮らしをしていた釈迦が出家するまで、

第二楽章「ブダガヤの降魔」合唱付き、

釈迦がブダガヤで悟りを得るために禪定に入る、パーリー語で数多くの煩惱が歌われる（貪 瞋 痴）。そんな煩惱の悪魔と戦う修行の様子は、この曲の聴き所のひとつ。襲い来る煩惱。男性合唱が悪魔の軍勢、女声合唱が悪魔の娘たちの甘美な誘惑を表現する。

第三楽章は、悟りを開いた釈迦を讃える。合唱付き

頌偈とは、「佛の徳を讃える歌」

ゴジラを作曲した伊福部の特長である土俗的雰囲気、人生苦を。リズムの高揚感が煩惱との戦いを現し最後は、仏陀への讃歌で終わる。

この曲は浄土宗東京教区青年会の委嘱により作曲され一九八九年の四月八日に行われた「釈尊降誕会（はなまつり）コンサート」に於いて初演された。

CD 二種類あり。

3、松下真一作曲 法華経によるカンタータ《佛陀》第一番、二番、三番

立正佼成会の委嘱により、法華経二十八品すべてを管弦楽と混声合唱、独唱、ナレーションにより、再現しようとする壮大な試み。

未完に終わったが、方便品 見宝塔品 壽量品は、FMラジオで放送されたのを、聞いた記憶あり。LPそれぞれ三枚組あり。入手困難

4、萩原朔太郎 作詞 木下牧子 作曲 「涅槃」 一九七六年?

木下牧子が、東京藝術大学作曲科の卒業作品として作曲。

花ざかりなる菩提樹の下

密林の影ふかいところで

かのひとの思惟にうかぶ

理性の、幻想の、情熱の、いとも美しい神秘をおもふ

涅槃は熱病の夜明けにしらむ

青白い月の光のやうだ

憂鬱なる 憂鬱なる

あまりにも憂鬱なる厭世思想の

否定の、絶望の、悩みの樹陰にただよふ

静かな月影

哀傷の雲間にうつる合歡の花だ

涅槃は熱帯の夜明けにひらく

巨大の美しい蓮華の花か

ふしぎな幻想のまらりや熱か

わたしは宗教の秘密をおそれる

ああかの神秘なるひとつのいめえち

——「美しい死」への誘惑

涅槃は媚薬の夢にもよほす

ふしぎな淫欲の悶えのやうで

それらのなまめかしい救世の情緒は

春の夜に聴く笛のようだ

花ざかりなる菩提樹の下

密林の影ふかいところで

かのひとの思惟にうかぶ

理性の、幻想の、情熱の、いとも美しい神秘をおもふ

## その他

管弦楽と合唱とソリスト群のための《交響曲第六番—シンフォニア・サンガ》…文化庁芸術祭優秀賞受賞（一九七四年）  
合唱のための《カンタータ・仏陀—第三番》…文化庁芸術祭優秀賞受賞（一九七七年）

合唱曲【編集】

「大いなる哉」（林古溪作詞、平井康三郎作曲）【交声曲】

「涅槃」(森正隆作詞、大中恩作曲)【交声曲】

「樹下燦々」(阿南知也作詞、清水脩作曲)【交声曲】

「廟堂頌」(長田恒雄作詞、清水脩作曲)【男声、混声】

「仏教徒の歌」(小林一郎作詞、山田耕笹作曲)【混声】

「聖徳太子の歌」(野口雨情作詞、山田耕笹作曲)【女声】

「生命の光」(大滝州代作詞、伊藤完夫作曲)【混声】

「善き友」(長田恒雄作詞、伊藤完夫作曲)【混声】

「遊化」(長田恒雄作詞、田中昭徳作曲)【混声】

## 日蓮宗関連では

1、昭和二十八年 佐野前光 作詞 宮城道雄 作曲 交声曲(カンタータ)「日蓮」

日蓮聖人の銅像が、福岡市東公園建立されて五十周年記念に作曲を慶賛会より委嘱される。

宮城道雄の祖父が熱心な日蓮宗の信者で、神戸市に説教所を設け、法華経を十年説教したといわれる。道雄は、幼年時代この説教所の裏に住み毎日お題目を聞いて育った。

楽器編成

箏 十七弦 胡弓 笙 尺八 打ち物 バリトンソロ 混声合唱

(伴奏用ピアノの譜面が出来れば、もっと普及するのではないかと思う)

日蓮聖人の末法濁世の世を救う機運到来を表す

二、黎明

比叡山での修行を終え、法華経を真実の教えと悟り、南無妙法蓮華経を高らかに唱えた。

三、予言

立正安国論の献上と国難の預言

四、受難

受難と法華経故の喜び

五、旋風

迫害に耐えての布教

六、自覚

佐渡流罪と法難の意味を自覚

七、静寂

身延山での静かなたたずまいと、池上でのご入滅

ここで、お題目が独唱の背景音楽とし、合唱によりクライマックスに導く。

—レコード裏面 吉川英史の解説を参照—

2、昭和五十六年 西川 満 作詞 黛 敏郎 作曲 オラトリオ（聖譚曲）日蓮聖人

七百五十遠忌事業にて初演され、平成二十五年に藻原寺により再演。DVD化

## 一般向け

3、三波春夫 大日蓮 昭和五十三年 入手困難

4、日蓮大聖人讃歌 たちばなの譜 企画 堂坂義臣

作詞 堂坂義臣 作曲 池田四郎

5、合掌での光を 下津圭子(歌)

作詞 和田妙尚 作曲 小西悠史  
後援 身延山久遠寺 池上本門寺

推薦の言葉 日蓮宗管長 金子日威 協賛 日蓮宗新聞社

キングレコード制作

6、静岡中部宗務所委嘱 讃仏かぞえうた 作詞 峯 陽 作曲 小林秀雄

非常に親しみやすく歌詞も法華経の教えが、平易に表現されている。残念ながら日蓮宗仏讃歌集には、入っていない。

ひとつとや ひとつとは容姿こそ違っても 心はひたすら み仏に

ふたつとや ふしぎなものです 信心は この世の花を実らせる

みつとや みんなが一人のためになり 一人がみんなのためになる

以下略

7、昭和五十六年七月

日蓮宗仏教讃歌集（楽譜）

池田四郎氏編集委員

各寺院に配布

8、平成六年 七百五十遠忌記念CD 日蓮宗の歌

この企画において、宗歌 四弘誓願などの仏讃歌CDを全寺院・教会結社に配布

イメージソング 今はとびたつとき

作詞 高橋純子 作曲 勝田佳代

歌 小坂明子

9、平成二十八年 仏讃歌CD

伝道部企画

ソプラノ 西口彰子

ピアノ 津島圭祐

日蓮宗新聞社

10、平成二十八年九月二十二日 仏讃歌奉納演奏

七月に開館した妙建寺あんのんホールにて

仏讃歌CD完成記念の演奏会を開いた。

ソプラノ 西口彰子

ピアノ 津島圭祐



お会式には、演奏家を招きコンサートを、催しますが、必ず宗歌、仏讃歌を入れ、集まった檀信徒とともに歌うようにしています。

宗門内には、合唱団を組織して教化活動されている寺院は多いと思うのですが、活動情報を公開して、もっと普及すれば、布教の一方方法として有効だと思われる。

# 重症心身障害児の地域生活について

大野 真如

## 一 重症心身障害児とは

近年の晩産化により障害を持つ確率や未熟児が増える中、医療の発達によって昔なら亡くなっていた子どもたちの命が助かる、素晴らしい時代になりました。しかし、重い障害や困難な身体症状を抱えた子どもたちが急増しています。重症心身障害児・障害者の数は全国で四万人以上（推定）平成二十年度財団法人日本訪問看護振興財団の報告によると重症心身障害児の発生率は、人口一〇、〇〇〇人あたり三人程度でしたが、平成二十六年公益社団法人日本重症心身障害福祉協会の報告では、人口一〇、〇〇〇人あたり三〜九人とあり、高度の医療機関が集中する都心部ほどその人口比率は高くなっています。

一般社団法人全国重症心身障害児デイサービスネットワークが今年の六月三十日に発行しました白書と厚生労働省が今年の三月に出した報告書を用いご説明させていただきます。

重症心身障害児とは、重度の身体障害と重度の知的障害の両方を持つ子どもたちです。重度の身体障害とは、食事、入浴、着替え、排泄などすべてに介助が必要となる生活で、自力では歩くことができず、座るのも難しい障害です。車椅子や身体の支えがないと身体を起こせません。また、重度の知的障害とは、話す能力の発達が弱く、そのため表情、目や発声でのコミュニケーションが中心です。

そして、近年では、重ねて、医療的な対応が必要な子どもたちがいます。胃瘻、痰の吸引、経管栄養、気管切開など、看護師または家族による「医療的ケア」がどんな時間でも必要な「超重症児」「準超重症児」といわれる子どもたちです。重症心身障害児のうち医療的ケアが必要な超重症児・準超重症児の割合は年々急増しています。

## 二 重症心身障害児の地域生活の実態

超重症児で在宅で生活している数は全国で八、〇〇〇人といわれています。このような子どもたちは、医療機関のNICUで新生児から乳幼児期を過ごしています。NICUとは新生児特定集中治療室といい、生まれたばかりの赤ちゃんに特化した専用のICUです。日本において、NICUは慢性的に病床数が不足している状態であり、ハイリスクな赤ちゃんが増加していることを表しています。NICUで集中治療を受けている間、お母さんは一度も赤ちゃんを抱くこともできず、何ヶ月も過ごします。長い方は年を要します。そのまま小児科病棟に移り、一生を医療機関で過ごすケースもあります。

しかし、NICUを晴れて退院できた場合も、困難な生活が待っています。子どもたちは、退院後自宅に戻ってからも、二十四時間体制のサポートが必要という点では変わりありません。これまで、医師や看護師らが複数人で見守る体制から、自宅ですべてを家族が担うこととなります。主に母親がケアを一人に対応します。食事は経管栄養で一時間かかり、それは一日に何度も行います。痰の吸引も多いときは十分おき、二十四時間離れられない状態が続きます。夜も子どもの体調を観察しながら起き、睡眠は分断されます。さらに子どもと一緒に外出したいのに、行ける場所が限られます。代わりに介護を頼める人がおらず、母親は体調不良にもなれません。なんとか成長し、特別支援学校に通うようになって、送り迎え、授業に付き添いと子どもから離れることができな日々を過ごします。

### 三 出生と育ちかけ

私は大病院の手術部の看護師を経て、結婚し、お寺の嫁になりました。看護師時代の話です。手術部というのは生死に直結する現場でした。新人看護師は、まず緊急性の高い手術から覚えさせる教育体制があり、緊急帝王切開術を叩き込まれます。私はこの緊急帝王切開術を数多く経験し、命の誕生の瞬間の素晴らしさと共に、あることを感じていました。それは、未熟児の出産の多さです。五〇〇gは当たり前、私の経験した中では三〇〇gの未熟児も珍しくはありません。死産になる場合もありましたが、NICUと連携し、一命は取り留めます。その後は、集中管理の元、医療の力で育てられますが、それが原因で重い障がいが残ることもあります。先天的な障がいがある場合もあります。私がこれまで想像していたような幸せな出産とはかけ離れた現場でした。

「このように生まれてきたたくさんの子どもたちは、どうやって育っていくのだろうか？」当時、私の仕事は手術を行うことでしたので、子どもたちの未来のことを知ることはできませんでした。

それから数年後、病院を退職し、僧侶になり、ある檀家さんの葬儀に出仕しました。障がいのある方の葬儀でした。身寄りもなく、県外の施設で亡くなりました。親亡き後、親戚に預けられました。親戚もしばらくして亡くなり、施設に入所。スタッフ数名が見守る中の寂しい葬儀でした。葬儀の後、住職から、亡くなった方は、お寺の近くに住んでいて、母親が懸命に介護しながらもこの村で暮らしていたと聞きました。母親は、その方の将来を心配していたに違いありません。私ははじめて、親なき後、生まれ育った地域で最後まで過ごすことができない障害者の地域生活の現実に触れました。

しばらくして、私にとってある出来事がありました。自分自身の妊娠です。喜びも束の間、ある定期検診でそれまで元気だったはずの赤ちゃんが「心臓が止まっている」死産でした。悲しみに沈みながら、私は「重い障がいの子ども

も」を授かっていたのだと思いました。もし、生まれてきていたら、心臓の弱い子どもを育てていくことができたろうかと考えるようになりました。

これらの出来事がきっかけで、重症心身障害児の地域生活について関心を持つようになりました。

#### 四 事業開設まで

私はまず、地域に重い障害をもつ子どもたちのサポート体制があるのかを調べました。すると、医療機関以外に民間の事業はないという実態がわかりました。重症児の安心した生活を考える時、①命を守る「医療」や健康を守る「看護」と「リハビリテーション」（訪問看護、機能訓練）ばかり着目されます。しかし、実は②生活を支援する「福祉」は重症児の生活に、医療やリハビリテーションよりも多くの時間をかけて関わっていきます。そして③発達を支える「教育」も大切です。家族の困難感や負担を軽減するには①②③のバランスが保たれながら、身近な支えとしてしっかり機能することが必要です。（資料）

私は「重症児のデイサービス」を開設することに決めました。「福祉」の事業所でありながら、看護師、リハビリ職、嘱託医がいて、さらに保育士や児童指導員の資格をもったスタッフで構成されます。児童福祉法に基づく「放課後等デイサービス（重症心身障害児対応型）」という事業です。

ところが、当初、あらゆる反発を受けることになりました。私が事業を始める準備をしていたのは平成二十四年頃からです。当時、県内には前例がなく、看護師による医療的ケアのできるデイサービスを行いたいと言えば、多数の不安の声があがりました。特に、複数の小児科の先生より、重症心身障害児というのは明日亡くなるかもしれない、そんな命にかかわることをあなた方ができるのですか？ 立派なことをしようとしているのは分かるが、「責任は取れない」と厳しい言葉でした。

今では佐賀大学付属病院の小児科教授をはじめ、嘱託医と、素晴らしい医師に支援いただいておりますが、医療機関以外で医療的ケアを行う事業は地域では誰も手を出さない県内初の試みでした。その時、私は「障害児のお母さん方は、医師でも看護師でもないのに、家庭で医療的ケアを頑張っている。私たちにできないはずはない！」と思いなおし、力に変えるよう努めました。

法人設立、県知事指定の事業開設届、従業員の雇用など初めてのことはかりでしたが、家族や周囲の手助けをいただきながら、なんとか事業開設まで至りました。

## 五 事業開設

いよいよ平成二十六年七月に想いを現実にすることができました。タイミングよく、平成二十四年四月に障害者総合支援法と児童福祉法が改正され、私の思い描くデイサービスの骨格が法制化されたばかりの頃でした。

そして、開設するやいなや、申込みが殺到し、あっという間に二ヶ月で定員一杯になりました。こんなに地域に困っていた家族がいらっしやったのかと驚きの気持ちでした。ある母親は「うちの子でも利用できますか？」と恐る恐る尋ねられ、「大丈夫ですよ！」という涙を流して喜ばれます。

十七歳の女の子、超未熟児で生まれ、重い知的障害、側湾症、気管切開があり、痰の吸引が必要、胃瘻での経管栄養、腹膜透析、全盲、難聴、てんかん発作があります。デイサービスの利用では、送迎と入浴を希望されていました。母親は、「この子を一生病院で過ごさせるわけにはいかないと思って、NICUから逃げるように抱いて家に連れて帰りました。しかし、こんなに地域に支援がないとは知りませんでした。何度も連れて帰ったことを後悔して過ごしました。いろんなサービスを探し回りましたが、二十四時間三六五日を十七年間、この子から離れることができませんでした。」

私はこの言葉を聞いた時、この母親の支えになりたいと強く思いました。

この母親だけではありません。ほとんど全員の母親が育児・介護で疲弊していました。そして、デイサービスを利用するようになり、出産以来、久しぶりに仕事を始めたお母さん、妊娠したお母さんがいました。お友達とランチに行けることを喜ばれているお母さんもいます。もちろん、このサービスを利用しているのは、重い障害を持つ子どもたちです。しかし、まずはご家族、特に母親への支援が必要であるということを再認識しました。

## 六 事業について

運営法人 一般社団法人あまね（非営利型）

事業所一覧 重症児者デイサービスいーはとーぶ（重症児一日定員五名）

重症児デイルームAQUA（重症児一日定員五名）

放課後等デイサービスいーはとーぶ（重症児以外一日定員十名）

事業内容 児童福祉法に基づく児童発達支援事業・放課後等デイサービス事業

障害者総合支援法に基づく生活介護事業

佐賀市、小城市指定日中一時支援事業

利用契約者数 八十名

従業員数 二十三名

### （一）運営法人・事業所名について

名前の由来は、化城喻品第七の「願わくはこの功德をもって、あまねく一切に及ぼし、我らと衆生と皆共に仏道を成ぜん」からつけています。この法人は、信仰するゆえにできたものであり、重症児を支援することは、宗教活動の

一環であり、看護師でもある私に与えられた天命と考えます。

事業所名「イーはとーぶ」の由来は、宮沢賢治のあらゆる童話に登場する、賢治の理想郷「イーハトーヴォ」からつけました。賢治の生きた貧しい時代、貧困、凶作、感染症と、生命があつてなく死んでしまう絶望の中で、子どもたちが希望をもてるキラキラした素晴らしい世界を、賢治は「イーハトーヴォ」につめ込んでいました。宮沢賢治の小説には、いつも今の時代という障害のある人がキーパーソンとして登場します。彼らはみな朴訥として、个性的で、賢治の理想世界を彩っています。そんな世界を実現したく、この名前をつけました。障害のあるなしに関わらず、子どもは地域の宝物です。住み慣れた地域で最期を迎えられるよう、地域の間人が温かく支援する社会になりますように、という祈りを込めています。

## (二) 事業内容について

放課後等デイサービスとは、いわば障害児のための放課後学童で、学校終了後に支援学校や特別学級の子どもたちを車でお迎えに行きます。そして、デイサービスの中で訓練や創作活動を行い、ご家庭に送迎します。また、当事業所は土日祝日も営業しています。朝からお家までお迎えに行き、朝から夕方まで過ごす場所です。児童発達支援とは重い障害を持つ未就学児の保育園であり、生活介護は、特別支援学校を卒業した障害者のデイサービスです。生まれた時から、将来まで年齢に関わらずデイサービスを受ける体制を整えました。

## (三) 送迎について

送迎を広範囲で行っており、半径二十キロの送迎をします。利用者は、小城市・佐賀市を中心とした七つの自治体です。車両は七台あり、毎日稼働しています。

## (四) サービス内容

全職員は二十三名、嘱託医一名、看護師七名、作業療法士二名を始め、専門職のほとんどが常勤で勤務しています。

地域とのつながりを作っていくために、毎月外出のイベントを企画しています。これまで出かけた場所は、ショッピングセンターやカラオケ、公共の遊戯施設、近郊の公園をはじめプール、川遊び、果ては業界ではタブーとされる海水浴にも行きました。また、室内での活動は、制作活動（ホットケーキ・お好み焼き・パフェ・プリン、またアクセサリー作り等）や、折り紙、塗り絵、誕生日会、クリスマス会、季節ごとの行事を企画し楽しんでいただいています。どんなに重い障害があっても、様々な経験をし、地域に出かけていきたいと考えています。

#### （五）医療的ケアについて

重症心身障害児の契約者三十名中ほぼ全員が医療的ケアが必要な児童です。重心以外も四十五名中、身体障害児が三分の一、難病・医療的ケアが四名、てんかん発作が頻発する児童もあり、重心判定は持つていなくても、重症度の高い児童が主に利用している状況です。協力医療機関として、佐賀大学医学部小児科と連携し、かかりつけ医の指示書のもと看護師が医療的ケアを実施しています。安全に実施するために、支援計画とは別に看護手順書を作成し、医療機関との情報交換も欠かさず行っています。

#### （六）入浴介助について

身体障害のある利用者は、入浴の希望が多く、特に重症心身障害児の利用者のほとんどが利用時に入浴しています。当初、このように入浴サービスの利用が増えると考えていなかったため、浴室の広さや設備が十分でない中、これまでに職員二名体制で実施していました。浴槽には職員が抱っこをして一緒に浸かり、コミュニケーションの大切な場になっていました。現在は、介護負担が増大し、腰痛を訴える職員が急増したため、特殊浴槽を導入して入浴介助をしています。気管切開や胃瘻がある児童も入浴するので、看護師一名が必ず見守ります。

## 七 終わりに

私は、重い障害のある子どもたちを、最期まで見守りたいと考えています。障害者は親亡き後、生まれ育った地域で最期まで過ごすことは非常に困難な現状です。ある母親の印象に残っている言葉があります。

「この子より一日でも後に死にたい」

子どもが先に死ぬことを願う母親がいるのです。口にしないだけで、重症児の多くの親が同じ願いを持っています。親より後に子どもが亡くなるのが自然の摂理です。先に死んで欲しいと願わなければならないほど、未来が不安であり、サービスがまだまだ不足している現状です。

私は将来、社会福祉法人を取得し、公共性を高めた上で、グループホーム・ショートステイの夜間系の事業に進出したいと考えています。また、訪問看護ステーションの開設の準備もしています。最終的には在宅で看取りをできるシステムを作りたいと考えています。それが僧侶と看護師を両立しているからできる私の強みです。

さて、障害の重い状態で生まれてきた人の、人生の目的は、命の価値はなんでしょうか。私は、子どもたちの看護をさせていただいているうちに、重症児と共に生きる暮らしが当たり前になってきました。当たり前だから、ひとつひとつの命の尊さに健常者との違いはないと感じています。

ところがほとんどの人は人生で重症心身障害児と出会うことはありません。「生きる目的」を考えると、この社会では「何をしたか」「人の役に立つか」などの価値判断で評価が下されます。だからこそ、この前の相模原の事件の犯人のように短絡的に、人に生かされているだけなら生きていてもしょうがないじゃないか、と考える人がいます。こうして人は、つい自己の能力を過信し、劣る者を見下しては佛の慈愛から離れ、各々が孤立していくように思います。しかし、この子どもたちは、私たちに何も語らずとも、人は人との「つながり」のなかでしか生きられないとい

う佛の平等大慧を学ばせてくれます。純粹な笑顔をみせる子どもたちの命に触れたとき、支援者が笑顔をもらいます。紛れもなく、つながりを感じさせてくれます。まるで命が共鳴しているような癒しのひとときです。是非、このような子どもたちに触れていただきたいです。

私は、私こそが、子どもたちに生かされていると思うようになりました。もはや、こちらが支援してやっているという気持ちは心の中にはありません。この命と命のつながりがお互いの生きる目的であり、生きている証であるということを、この重い障害を持つ子どもたちから教えていただきました。そんな佛の平等大慧を体感させてくださる、尊い存在である重症心身障害児と共に、これからも地域で生きていきたいです。

# 近代山梨県下における日蓮宗記念事業の研究

—— 地方紙に見る「御降誕七〇〇年」の様相 ——

鈴木義俊

## ◆大正十年正月

『山梨民友新聞』（大正十年一月七日号（二）面）に次の様な社説が掲載されている。

「新玉の年立返る春日に甲府市内六萬の士女は松竹飾り日章旗の影鮮やかなる街を、嬉々して群れ行く、此間に在りて日蓮宗僧侶は宗祖降誕七百年祭を機とする日蓮主義の宣伝をして居る、天は薄墨の如く、地は泥田に似たる中をも、萬物悠々、萬景怡々、誰か此の間に処じて握足たるものぞと計り賀客の□紅なるに向ひて宗祖の折伏の生涯と法華經の功德を説く、壮なる哉の感が深いではないか、白熱的信仰の宗祖眠る身延の山に聞こゆ唱題、団扇太鼓の音は永久に人心渴仰の源である、吾人は、我山梨県に武田機山公と日蓮上人とを持つ事を實に誇りにして居るものである、（中略）吾人は此日蓮上人七百年祭に際して、より以上法華經を誦じて日蓮上人の偉大なる人格を讚美せねばならぬ」

□先帝の御製に

「日の下の守りは忍の一つなり 吾は保たん人を守れよ」

忍の一字、之を日蓮上人の一生であったと証すべし法華經、想うべし日蓮折伏の生涯。」

この引用部分は全文の三分の一程であるが、日蓮聖人への想いに溢れ、日蓮宗教師並び「御降誕七百年」に対して

も肯定的と取れる内容である。『山梨民友新聞』が地域の主力紙では無いとはいえ、一般紙において年頭の社説に掲載されているのだから現代の我々から見ると驚きを禁じ得ない。調査した範囲では、「御降誕七百年」について年頭（二月上旬）の社説で触れていたのは『山梨民友新聞』のみだったが、他紙に於いても「御降誕七百年」関連の記事、公告が大正十年前半に数多見られる。

本稿では、日蓮聖人御降誕七百年に当たった大正十年当時の山梨県下で発行されていた新聞記事（山梨県立図書館所蔵の一月から六月掲載分）と『宗報』を基に、祖山の御膝元である山梨県下における「御降誕七百年」の様相を紹介することによって、先人の足跡を辿りその業績を顕彰し、往時の記念事業の内容を伝え、「御降誕八百年」、その後に控える「七百五十遠忌」の事業企画運営の一助となる事を願うものである。

## ◆山梨奉讃會

まずは甲府市に於いて举行された記念行事について見て行きたい。『宗報』（大正十年三月十四日号（三面））によれば「山梨県寺院並に信徒は聖誕七百年を記念すべく山梨奉讃會を組織し（中略）去月十二三兩日は県下寺院總出仕にて慶讃講演並に法要を虔修したり……」とある。ここで「山梨奉讃會」の概要が判る。この時期の『宗報』には他の都道府県に於いても奉讃會が組織されているのが散見できる。また「慶讃講演並に法要」とあるので銘打っていないが、御降誕七百年に於ける山梨大会と捉えられるだろう。奉賛祝典の様子は次の様になる。

『宗報』（大正十年三月十四日号（三面））

三月十二日 天候（雨のち曇り）

正 午 甲府市舞鶴城にて数百の煙火が打ち挙げられる。

午後一時

講演会開会

於 甲府市公會堂機山館（舞鶴城内） 聴衆七百超

一、開会之辞 奉賛會長 中村是本師

一、戦線に立ちて 特派教師 横井龍顯師

一、思想問題の帰趣 陸軍少将 野澤悌吾閣下

一、降誕の意義 権大僧正 脇田堯惇師

一、閉会之辞 常任布教師 藤田恵曉師

萬歳三唱

午後六時

講演会閉会

午後七時

懇親會

於 開峽樓（甲府市桜町） 出席者七十名

挨拶 脇田堯惇師

謝辞 信徒代表 内藤文治郎氏

三月十三日

天候（晴れ）

午前十時

行列集合

役僧三百名 機山館に集合後、舞鶴城大庭へ移動

天童八十三名 幼稚園にて仕度後、舞鶴城大庭へ移動

午前十一時半 行列出発

順序 奉讃會旗―分隊布教旗―役僧―天童―樂人―本隊布教旗―法主猊下(自動車)―  
天童―役僧―分隊布教旗―僧侶役員―信徒役員各講社團體―一般會員―拜觀人

午後二時 遠光寺(甲府市伊勢町)到着

法要

三寶札

宗歌(立ち渡る)

讃迎歌(小供會生徒)

奏樂

天童献供(祭文同唱)

奏樂

開白文(法主猊下)

聖訓(如説修行鈔)

神力品

開目抄

宗歌(自から)

三帰

會長挨拶

午後五時 散會

『宗報』には、僧侶の衣帯について言及している。「法服も一定その上に僧侶全部が昌福寺の寄贈にかゝる略燕尾を着けた」当時の昌福寺住職は、深澤湛善師。略燕尾については、現物が残っていないか調査中。

次に『山梨日日新聞』（大正十年三月十二日号（三面）、十四日号（三面））に掲載された記事から伺える様子を紹介したい。

『山梨日日新聞』（大正十年三月十二日号（三面））

題名【降誕<sup>くわんたん</sup>百七年 慶讃式典 本日講演と提灯行列 明日は稚児行列】

三月十二日（土）

午後一時 大講演会

講師 日蓮宗大学長塚<sup>つか</sup>田堯惇

特派布教師横井龍顯

陸軍少将野澤悌吾氏

午後七時 提灯行列

参加者 布教団道路宣伝布教両師

市内信徒

少年少女聖歌団

※波線部は明らかな誤字

この記事は講演会当日の掲載である。翌日の行列と法要の事も次の通り書かれている。「小泉法主、以下僧侶二百名、稚児五百名、信徒約一萬の大行列（中略）當日は県下各地より信徒團體多数参加すべければ稀有の盛況を呈すべし」と。稚児五百名とは随分過大な見込みの様だが、当時の稚児行列参加はそれだけ親子身内にとって魅力があったのであろう、新聞紙面でも「稚児行列」の文字は繰り返し強調されている。また他紙において稚児の優美さを競う風潮が取り上げられている。翌日の記事によれば実際には八十餘名の参加となっている。宣伝効果のためか式典前日である十二日掲載の記事は過大な見込みの数字を載せており、何故か他日の記事に比べ明らかな誤字も多く。記事の分量も少ない。この日に關しては取って付けた間に合わせ記事の感がある。これに対し十四日掲載の記事は、この当時県下各紙の中で最も信用度、発行部数が高かった『山梨日日新聞』らしく記事、写真等紙面から読み取れる情報量も多く詳細である。そこから読み取れる祝典の流れを次にまとめてみた。

『山梨日日新聞』（大正十年三月十四日号（三面））

【春日遅々たる中を美しき稚児の行列 日蓮上人降誕七百年 慶讚式典…昨日の壯観】

三月十二日（土）天候（雨天）

講演会開催の記述のみ

三月十三日（日）天候（晴天）

時刻記述無し 行列集合

一般関係者は舞鶴城に集合

午前十一時 行列出發予定（前日雨天の影響により集合が遅れた為遅延）

正午半 行列出發（煙火合図有）

役僧二百八十名

稚児八十二名

協賛旗を先頭に題目を唱えつつ出發

順序 協賛會旗―遠光寺檀徒總代六名―分隊布教旗―僧侶百名―稚児四十一名（腕車にて）―

布教旗―身延山久遠寺管長代理脇田権大僧正、加茂僧正、隨僧一名（自動車にて）―

稚児四十一名―僧侶百名―分隊布教旗―僧侶役員―信徒役員市郡講中

順路 舞鶴城―桜町―柳町―緑町―太田町―遠光寺

午後二時 遠光寺（甲府市伊勢町）到着

法要 於 佛殿

奏樂（奏樂中に一同着席）

奉讚歌

三寶札  
音楽  
献供  
開経偈  
神力品  
音楽  
慶讃文  
天童祭文  
音楽  
開目抄 三大誓願  
唱題  
回向  
四誓  
奉讃歌  
奏楽（奏楽中に閉式）

この記事は、稚児の写真が大きく二枚掲載されていた。準備に集合した幼稚園に於ける集合写真と稚児行列の写真である。また甲府警察署による雑踏の取締も同日同紙の別記事にて報じられていた。非番巡査を全員招集し行列の沿道に配置したとある。「稀有の盛況を呈すべし」とは誇張では無かったようだ。

『宗報』と『山梨日日新聞』の掲載内容を比較すると十二日の講演會等については、『宗報』が、十三日の行列や法要に関しては、『山梨日日新聞』の記事の方が、詳細な記述がされている。小泉日慈法主猊下の様子については「この行列に加はる筈なりしも入市の際籠に揺られたる為遠光寺に於ける式典のみ加はりたりと云う」と『山梨日日新聞』にあるが、『宗報』にはこの記述は無く行列に加わった事になっている。後に取り上げる他紙においても小泉猊下は、行列に加わっている記述が多い。しかしながら自動車に乗車している人員の構成を載せている点や小泉猊下の満八十一歳という高齢を鑑みればこの記事が最も事実在即している可能性は高いのではないだろうか。身延山側の史料があれば当たってみたい。

他紙にも慶讃祝典の様子が取り上げられている。『宗報』『山梨日日新聞』には記述されていない内容を中心に他紙の記事を紹介してゆく。

『山梨民友新聞』〔大正十年三月十二日号（三二面）〕

【肅々と一萬の大行列で 日蓮慶讃大法會 日宗稀有の大盛典を嚴修し講演會も】

「甲府市でも過般柳町の天晴館に於て小供の會を開き提灯行列を行ったが尚夫々各地に於て各種催しがある」  
「同夜（十二日）七時より市内の信徒各団体及び少年少女聖団員等約一千名にて提灯行列を為して市内を練り廻り又布教隊は市内の數力所に於て道路布教をなすべく」

『山梨毎日新聞』〔大正十年三月十二日号（三二面）〕

【小泉大僧正を最初に 天童八十名の行列 僧侶百名信徒一千名付隨

機山館の法要後遠光寺へ 本日は講演後提灯行列】

「御稚児は市内日蓮宗少女聖歌団員中より選抜するものなるが昨今何れも其の稚児姿の優美を競ひ如何にして人目を惹くかんと云う事に付選抜されたる各家庭にて其服装に意匠を懲らしつゝ、ありと云えば右は當日行列中第一の見ものなるべし」

「午後七時よりは市内信徒及び少女聖歌団の提灯行列を行ひ市中各所に於て布教団の道路布教もある筈なり」

『峡中日報』（大正十年三月十三日号（三二面））

【日蓮主義宣伝 劇と其講演を】

「桜座において（中略）毎夜幕間を利用し川久保日光氏等の講演あり。十三日夜より其々日甲府市に於て行はるゝ日蓮降誕七百年祭行列の実況を撮影の上映□する由會費は特等六十錢一等五十錢二等三十錢三等十五錢なりと」

『峡中日報』（大正十年三月十四日号（三二面））

【日蓮降誕七百年祝賀 法幡翻り法鼓響く】

機山館から伊勢町へと人の流れを為し遠光寺の會式又莊嚴」

「約二千餘の行列は悠々として」

「四時半に無事散會したるが當日は郡部からも日宗信徒及び參觀者幾萬に及びなかなかの混雜を極め且つ近來に比類なき盛況であつた」

『山梨毎日新聞』（大正十年三月十四日号（三二面））

【美観なりし天童行列 僧侶と信者で千餘名 沿道各町人で埋まる】

「天童は市内の中流家庭より選抜され各自が所謂稚児姿の美を競い」

「郡部より押懸けし人々□多かりし（中略）混雑を極め市内に時ならぬ賑ひを呈したりし」

『山梨民報』（大正十年三月十四日号（三二面））

【行列五丁餘に亘りし 降誕記念法會式 団信徒一万餘に達す 沿道人の山を築く】

「参集せる信徒は約一万以上に達しさしにも広き舞鶴城は立錐の余地なき程の盛況を呈し定刻午後一時の合  
図なる煙火と共に各郡團體毎に北に面して整列するや身延本山小泉管長は稚児八十餘を左右に随へて機山  
館より姿を現し同時に大法會の挙式を行い終りて同一時三十分（中略）中央の自動車には小泉管長乗車し  
（中略）桜町より常盤町四ツ角を曲がりて柳町に出で祖師堂前を緑町太田町に出で伊勢町遠光寺に二時半に  
着し小泉管長導師となりて約一時間半に亘る法會を行い午後三時半全く式を終りたるが」

「劇場桜座にては山梨奉賛會の需に応じ當日の盛況を活動に撮影し昨晩より上映せる筈なり」

各紙共熱心に慶讚祝典を取り上げている。これらの記事によって行列の規模や日程の細部については内容に差が有  
り確定するのは難しいが、甲府の街における奉賛祝典の賑わいや熱が記事から感じ取れる。

## ◆柳町の天晴館・祖師堂

今まで見てきた記事より気になる点について掘り下げてみたい。まず柳町の天晴館・祖師堂とはどういう施設な  
か。現代の旧柳町には、残っていない。どちらも日蓮聖人に関わる命名であるのは確かだろう。紙面にその名を採し

てみると『山梨民友新聞』（大正十年三月四日号（三面））に【日蓮降誕七百年祝典に 有意義な講演會 この機に適切な事業】という見出しがあり「柳町天晴館内の祝賀會事務所では（中略）事業として一来る四月三日午前九時甲府機山館に於て祝賀式を挙ぐ、二四月三日午後より五日迄晝夜機山館にて講演會及餘興……」この記事により「天晴館」に祝賀會事務所が、置かれ降誕七百年祝賀會を企畫している組織があるのが判った。

『山梨毎日新聞』（大正十年三月三十日号（三面））【聖誕七百年祝賀會は 聖語に則り広く 會員を募り宗門に私せしめず 講師は大将、博士大僧正其他 愈よ三日より機山館にて】この記事によれば「県下の日蓮上人崇拜の有志相諮り國聖日蓮降誕七百年祝賀會を設立し其事務所を市内柳町祖師堂に置いて」とある。「天晴館」に祝賀會事務所が置かれている記述とは一致しない。「祖師堂」の付属施設が「天晴館」なのか。「祖師堂」は奉讃祝典の記事の中にも出てきた。筆者の師父（昭和三年生）に尋ねると「柳町の祖師堂」と呼ばれた「身延山別院」が戦前にあり戦災を受け移転、現在は再度移転し「身延山尼別院」になっているという事である。「祖師堂」「天晴館」については大正前半の『日宗新報』にも見られるが、法華会、天晴会、勸工場（各種業者が日用商品を主に持ち寄り、一か所に陳列して販売する平面式デパートといった販売組織）が関わりこの紙面では收拾がつかない為継続して研究対象とする。

## ◆降誕七百年祝賀會

「國聖日蓮降誕七百年祝賀會」を続けて追っていく。三十日の記事には、講演會の講師や役員の名が載っている。役員には歴代市長や地元有力者、日蓮宗僧侶、最後に内藤文治郎氏。奉賛祝典において信徒代表を務めた氏の名がこころでも出てくる。

『峡中日報』（大正十年四月四日号（三面））【舞鶴城頭日蓮現はる 法鼓の響きや聖訓誦誦の聲堂内に満ちて莊嚴】この記事によると四月三日午前十時より甲府舞鶴城機山館において降誕七百年記念祝賀式は挙行され、御書聖訓の拝

読、日蓮聖人像の開帳、青少年女達による聖像への献供、聖歌団の讃仰歌などがあり祝賀式修了後、餘興として講談日蓮等が入り、午後一時より記念講演を行った。内藤文治郎をはじめ数名の講師が講演後五時半散会。聴衆は約七百餘に達し翌日も引き続き講演がある旨が報じられている。

記事では内藤氏の講演は、県下に於ける日蓮聖人の事蹟についてとなっている。山梨奉讃會の慶讃祝典では信徒代表となり、聖誕七百年祝賀會においても中心人物と思われる内藤文治郎氏とは如何なる人物だろうか。

## ◆内藤文治郎

氏名 内藤 文治郎（ないとう ぶんじろう）

生年 明治二（一八六九）年二月一日

没年 昭和三（一九二八）年五月二二日 享年六十才

出身地 山梨県西山梨郡清田村（現甲府市玉諸町辺）

菩提寺 山梨県笛吹市 日蓮宗常德寺

学歴 法政大学卒

経歴 文治良とも記す。松影と号す。

明治三十年若くして認められ山梨県会議員に当選。

後に甲府市議会議員も歴任。

山梨農桑社を創業し、明治三十一年山梨農工銀行取締役

日刊新聞『山梨時報』を発刊するが数年で廃刊。

明治三十五年政界実業界から身を引き上京。攻学大に学ぶ。

明治三十七年法政大学卒業後帰甲。

帰甲後直ちに若尾銀行に入行その後副支配人に昇る。

甲州財閥若尾家の事業に與り、恰も顧問役の如しと言われる。

『山梨県志』編纂に関わり會長となつたが、火災や經濟狀況の影響で中途に終わる。残された一部資料は『若尾資料』として伝わっている。

著書に『若尾逸平』『日蓮聖人』などがある。

容貌 「眸子は頗る尖鋭たり（中略）誠に敏者の相たり、豪傑の容貌たり」

人柄 「活動の人なり静思の人に非ず 豪傑なり英雄にあらず謙信たり信玄にあらず」「真の快男児たり」

その著書『日蓮聖人』は、降誕七百年記念に文治郎氏が訳あつて、本人の弁を信じるならばだが三日で書き上げた物である。『日蓮聖人』は四章からなつていて次のような構成である。

『日蓮聖人』内藤文治郎 編著・発行

はしがき

六 十 一 年……日蓮聖人の一代記

聖 訓 片 々……御遺文

讚 歎 の 聲……高山樗牛をはじめ各界からの日蓮聖人に對する讚歎集

衣 香 杖 影……山梨県下に於ける事蹟の紹介

國聖日蓮降誕七百年祝賀會要領

文面、引用されている文章の書き手からは、國柱會や法華會との繋がりを感ずるが、はっきりとした事は判らない

のでこれも今後の研究課題としたい。この『日蓮聖人』は會員に配られ県下各學校各青年団に施本されたという。祝賀會要領を次に抜粋し示す。

國聖日蓮降誕七百年祝賀會要領（抜粋）

高山樗牛曰ク。日蓮ハ予ノ知レル日本人中ノ最大偉人ナリ。（中略）日蓮ハ國聖也。之ヲ一宗徒ノ手ニ委スルハ我帝國ノ一大損失ナリ、一大耻辱ナリ。

今歲大正十年ハ日本ガ彼ヲ生ミタル貞応元年ヲ距ル正二七百年。為ニ全國到ル處ニ記念祝典ノ事業アリ。而モ日蓮ノ英魂ハ長ヘニ本県身延ノ靈山ニ鎮ル矣。本県豈ニ此際ニ何等カノ企畫ナクシテ可ナランヤ。仍チ茲に國聖日蓮降誕七百年祝賀會ヲ提唱スル所以也。

第一、事業

- 一、聖誕祝賀式ヲ挙グルコト（四月三日午前九時甲府機山館ニ於テ）
- 二、講演會ヲ開クコト（四月三日午後ヨリ五日マデ晝夜機山館ニ於テ）
- 三、記念出版ヲナスコト（本県に於ケル聖人ノ事蹟ニ就ヒテ）
- 四、県下各學校各青年団ニ施本ヲナスコト（其種類ハ經費ノ都合ニ依リテ之ヲ定ム）
- 五、身延其他聖跡参拝者ニ便宜ヲ與フルコト

（中略）

第五、事務所

甲府市柳町十番地（電話七九九番）

長野本県知事閣下ヲ本會名譽會長ニ富永本県内務部長、八木警察部長、落合学兵課長、堀甲府市長、中村四九聯隊

長、榎甲府聯隊區司令官、吉田甲府地方裁判所長、印南甲府典獄等各位ヲ本會顧問ニ推戴シタリ。

本會會長ハ名取忠愛、副會長ハ横沢米太郎、秋山源兵衛。理事ハ川久保光正、近藤寛純、石原彦太郎、高野孫左衛門、古谷幸男、羽田柳兵衛、芝海庄太郎、米山玄妙、内藤文治郎等ナリ。

この要領によつて四月三日からの祝賀會の事業や役員、事務所所在地が判る。役員を見ると名取會長をはじめ歴代の甲府市長。県下最古の身代である吉字屋高野孫左衛門。県會議員、市會議員等、日蓮宗から川久保光正師、近藤寛純師、米山玄妙師、最後に内藤文治郎氏といった面々によつて構成されている。また事務所住所は、昭和十六年の市街図で確認すると祖師堂の場所と一致する。

## ◆おわり

甲府に於ける降誕七百年の二大行事と思われる「山梨奉賛會」と「國聖日蓮降誕七百年祝賀會」による記念行事を地方紙の記事を中心に見てきたが紙面も尽きてきたので区切りとしたい。他にも県下各地に派遣された布教隊の動きや各寺院の記念行事、日蓮聖人を題材にした映画、演劇等の公告、連載小説、飛行機からの宣伝、甲府法華會や國柱會の影響、そして盛大に挙行された祖山での記念法要、富士身延鐵道等々まだまだ調査を進めたい事は多いが、最も気がかりなのは、千人規模の慶讃行列を撮影したフィルムの存在である。今後の課題ばかりだが、来年に控えた降誕八〇〇年山静教区大会またその後の管区大会、そして七十五遠忌に向けて、先師先達の想いを少しでも掘り起こし伝えられるなら幸いである。

## 参考文献

- 一. 『甲府街史』中丸真治 楠祐次 山梨日日新聞社 一九九五年
- 二. 『錦町の歴史』錦町自治会 大宣堂印刷 昭和五十八年
- 三. 『現代峡中名士小伝』中村重造 山梨印刷株式會社 明治四十三年
- 四. 『日蓮聖人』内藤文治郎 英文通信社印刷所 大正十年
- 五. 『近代日蓮宗における「御降誕」事業の研究①―大正十年「聖誕七〇〇年」の一考察―』  
日蓮宗現代宗教研究所研究員 池浦英晃
- 六. 『宗報』『日宗新報』（大正四年から大正十年）日蓮宗教師用サイト  
<https://kyoushi.nichiren.or.jp/shuhou/>
- 七. 『甲州文庫』功刀亀内 山梨県立図書館所蔵

# 「十年間の成功と失敗」から得たニュートラルポジション

尾藤 宏明

## 十年間の成功

成功① ウェブサイト

◆平成十六年 ウェブサイト ver. 1

一般人が増加し、申込数が月十件になった。一般人の生の声を聞くことが多くなり、お寺と一般人との温度差やギヤップを初めて知った。今までの布教活動は自分の自己満足であったと気付いた。

◆平成二十年 ウェブサイト ver. 2 (リニューアル)

元筆頭総代の孫のアドバイスにより、一般人の感覚を反映し、可能な法務をすべて掲載し、お布施の金額を明示した。一般人が激増し、他のウェブサイトのデザイン会社から高評価を得た。最近の若い世代の人は「お気持ちで」と言われると悪意を感じる」という声も聞くことができた。宗教界も諸行無常であると気付いた。

◆平成二十六年 スマホ対応ウェブサイト ver. 3 (リニューアル)

通販(クレジット可)を導入するなど一般企業と同じサービスを取り入れた。継続的に一般人が増加したが、ウエ

ウェブサイトをリニューアルしたからといって、または新規に作ったからといって、参詣者が特別に増えることがないと感じた。それだけ、寺社のウェブサイトの数が増加している証拠である。これから、ウェブサイトは、内容やコンテンツを充実させて、有益な情報を提供しなければならないと気付いた。

## 成功② 動画CM『はひふへ本光寺』

### ◆平成二十二年 動画CM『はひふへ本光寺』配信

自死者三万人以上というニュースを見て、お寺がきちんと機能していない、そして、お寺の存在が忘れられているという危機感をおぼえた。お寺に来てもらいたいが、お寺のハードルの高さ（入りづらさ）が非常にネックになっており、何とかしてハードルを低くしたい（入りやすくしたい）と思った。

## 『はひふへ本光寺』のコンセプト

- ① 仏教を知らず、お寺に行ったことがない若者に興味を持ってもらいたかった。
- ② お寺は法事を行う悲しみの場だけであるというイメージから脱したかった。
- ③ お寺は誰でも利用できる公共の場であるということを知ってもらいたかった。

## 『はひふへ本光寺』の工夫したポイント

- ① 仏教・お釈迦様・日蓮聖人・お寺・僧侶を誹謗中傷するような表現、またはイメージを低下させてしまう表現は  
一〇〇%避けるということ。
- ② その限られた条件の中で、インパクトのある奇抜な表現を行い、それとともにきちんと伝えたいこと（コンセプト

ト)を表現すること。

『はひふへ本光寺』の再生回数(平成二十八年十月二十二日現在)

- ① YouTube 五九〇、二二七回(現在、一日に四十回ほど再生されている計算)
- ② ニコニコ動画 三一五、三八八回(現在、一日に二十回ほど再生されている計算)

動画CMを見て自殺をやめたと御礼を言いに来てくれた若者(男性)がいた。他にも全国から御礼の参詣に来てくれた。誰もがお寺に気軽に入りたい、そしてお寺をもっと知りたい、そしてお坊さんとお話ししたいと望んでいる。お寺は、誰にでも平等に、もっとオープンにしていかなければならないと気付いた。

### 成功③ 絵本『木魚のぼっくん』

◆平成二十五年 絵本『木魚のぼっくん』出版

仏教を知らず、お寺に行ったことがない子供に興味を持ってもらいたいと思った。本光寺が行っている子育て応援活動の一環としての社会福祉活動(寄贈)であった。

### 『木魚のぼっくん』の寄贈内容(計一〇二五冊)

市川大野の浄光寺幼稚園様へ贈呈「入園・進級のお祝い三〇〇冊」(平成二十五年四月四日)

市川市内の子育て応援企業様一八三社へ贈呈(平成二十五年四月二十三日)

市川市内の幼稚園・保育園様一三五園へ贈呈(平成二十五年五月四日)

市川市内の小児科の病院様七六院へ贈呈（平成二十五年五月十日）

市川市内の小学校様四二校へ贈呈（平成二十五年五月一日）

千葉県内の図書館様一九五館へ贈呈（平成二十五年五月二十一日）

市川市内の耳鼻咽喉科・産婦人科・小児科の病院様九四院へ贈呈（平成二十五年六月二日）

寄贈先から御礼の手紙をたくさん頂戴した。本光寺の社会福祉活動が評価された。宗教法人の社会福祉活動は必須であると気付いた。

#### 成功④ 一般人とコラボ

#### ◆平成十八年 公開教室

仏教文化、日本文化を伝えるために定期的に開催している。生徒が永代供養墓に申し込み、葬儀を依頼するなど、「生徒↓墓・葬儀」の流れができた。

仏画教室 平成十八年開講、月四回開催、生徒四〇名

茶道教室 平成二十年開講、月二回開催、生徒四名

写経教室 平成二十一年開講、月一回開催、生徒三名

仏像彫刻教室 平成二十三年開講、月四回開催、生徒四〇名

着物着付け教室 平成二十四年開講、月四回開催、生徒一〇名

◆平成二十二年 寺社コン（お寺でのお見合い・合コン）

宿坊研究会堀内克彦様からの要望により、本光寺での寺社コンが実現し、定期的に開催している。堀内克彦様が本光寺で仏前結婚式をあげるなど、「縁結び↓仏前結婚式」の流れができた。

写経コン

過去六回開催

唱題行コン

過去五回開催

模擬仏前結婚式コン

過去三回開催

浴衣着付け教室コン

過去二回開催

中山法華経寺荒行僧によるご祈祷コン

過去二回開催

成功⑤ 行政とコラボ

◆平成二十五年 八カ月までの赤ちゃんとママのひろば

社会福祉活動（子育て応援）の観点から、本光寺より「市民の意見箱」を通じて、場所の提供を提案し、平成二十五年より定期的に開催される。

◆平成二十七年 いきいき健康教室

社会福祉活動（高齢者の応援）の観点から、本光寺より「市民の意見箱」を通じて、場所の提供を提案し、平成二十七年より定期的に開催される。

本光寺は平成二十二年に子育て応援企業第一号の認定を受けた。営利目的でなければ行政と一緒に取り組みできることに気付いた。宗教法人が税の優遇を受けていることを、少しでも市民に納得してもらうために、社会福祉活動を積極的に行う必要性も気付いた。

## 十年間の失敗

### 失敗① 檀家布教

平成五年に住職就任後、檀家に対して、月例祭、会報、祈祷などさまざまな布教を行ったが、何の反応もなく、高齢化とともに行事（催事）への参加人数は減る一方であった。檀家は檀家制度によりお寺と強制的につながっているが、檀家の継承者（次世代）の感覚は一般人とほぼ同じであり、お寺サイドが思うほどお寺に興味がないことに、最近ようやくよく気付いた。

### 失敗② 信行会

平成二十年に、お手伝いの方々の高齢化のため、毎月の信行会でふるまっていた手作り弁当をやめた。すると徐々に参加者も減ってしまった。食事をしながらみんなど会話を楽しむというコミュニティの場を奪ってしまったことに気付いた。

### 失敗③ 檀家規則

檀家制度の崩壊をストップさせるために、また次世代（継承者）にお寺との付き合い方を知っていただくために、平成二十六年八月に顧問弁護士との監修のもと「檀家規則」を施行した。代表者と継承者に署名・捺印をいただくこと

を条件にしたなら、二軒が離檀、一軒が異議を申し立てた。この規則は「寝た子を起こす」行為だった。しかし、檀家規則を説明しながら檀家の家族構成をあらためて聞き取りしてみると、「子供がいない」「娘しかいない」「息子が未婚」という割合が約七割だった。将来、約三十年で檀家数が約三割に自然消滅することが判明した。この情報をもとに、檀家の代表者が七十歳〜七十五歳に達したら、代表者を次世代（継承者）に移行するようなルールが好ましいということに気付いた。代表者や継承者が元気なうちに、住職と一緒に将来の無縁化について具体的な解決策を模索することが望ましいことも気付いた。

#### 失敗④ 私生活

平成二十年から本格的にネットを利用するようになり、今では一日三時間、パソコンを扱うようになった。パソコンを利用することにより、家族や友人と向き合う時間を確実に失ったことに気付いた。

### 成功と失敗から得たニユートラルポジション

ニユートラルポジションとは、左にも右にも、上にも下にも、前にも後ろにも、自由自在に対応できるポジションのことである。

過去のポジション	+	未来のポジション
高齢者	+	若者、子供
檀家	+	一般人
アナログ（教箋）	+	デジタル（ネット）
儀式	+	法話

観覧(見)	+	体験(行)
葬儀式(弔事)	+	結婚式(慶事)
日本人	+	外国人
厳粛	+	勧笑

諸行無常。社会は常に進化・変化し続けている。お寺が変わってはいけない、ということはない。お寺も変化しなければならぬ。しかし、今までの取り組みも大切に守らなければならない。例えば、デジタルだけでも駄目、アナログだけでも駄目。デジタルを大切にし、今までのアナログも大切にす。葬儀のかたち、お墓のかたちなど宗教界を取り巻く環境は目まぐるしく変化している。日本人の価値観も激変している。その変化に柔軟に対応できるように、お寺・住職があらゆるポジションを吸収し、オールマイティに活動していかなければならない。

## 本光寺の歴史や特徴

- ◆ 約六五〇年の歴史があると伝えられている。
- ◆ 昭和三十年頃から祈禱寺・信者寺として布教を行う。
- ◆ 檀家数の推移は、昭和初期三十五件↓平成初期一〇〇件↓現在二〇〇件。  
(※布教による実質的な増加ではなく、墓地分譲により増加した)
- ◆ 住職就任時には貯金が六十万円だった。(※貧乏寺だった)
- ◆ JR武蔵野線「市川大野駅」から徒歩三分。立地条件は良い。

## 成功と失敗から得た八つの格言

格言① 下手な鉄砲も数を撃とう！

取り敢えず行動してみるといふ行動力が大切である。「教を撃てば当たる」といふ精神で、保守的にならず、いろいろとチャレンジしよう。

格言② お寺のストーリーを作るう！

村興し。これは村を起こすのではなく、村人を目覚めさせて起こすのである。寺興し。これはお寺を起こすのではなく、住職自身が目覚めて仏神をも目覚めさせて起こすのである。住職がお寺の歴史や仏神に新たな風をもたらすために、あらゆる物のストーリーを作り上げよう。

格言③ 一般人の感覚、意見を尊重しよう！

「ご住職、お上人、先生」と呼ばれていると雲の上の存在になる。雲の上の存在はとても居心地がいい。これからは雲の上に居てはいけない。地上に降り立ち、一般人の感覚、一般人の意見を尊重することが必要である。まずは仏教を全く知らないご意見番（アドバイザー）を見つけてよう。

格言④ 子供に伝えよう！

子供に仏教を伝えるほど難しいものはない。一方的に専門用語をならべて伝えればいいというわけではなく、伝わらなければ布教の意味がないのである。幼稚園児でもわかるように、かみ砕いた表現を心掛けよう。

### 格言⑤ 時代の流れにのろう！

インターネットで検索して情報が出てこないのは、もはや情報化社会の現代では存在しないと同じである。ネットにお寺の情報を流そう。

### 格言⑥ 一般人のお金の感覚を知ろう！

一般人の方々の金銭感覚を知るべく、期間限定で古物商免許を取得してサイドビジネスを始めた。売上げは年間四〇〇万円。四〇〇万円を稼ぐのにどれだけ大変か、税金をいくら納めるのか、そして宗教法人がどれだけ優遇されているか。お布施（例えば、三十分の法事で五万円だとすると時給十万円）に文句を言う一般人の感覚などを、三年間のサイドビジネスで体験した。一般人の金銭感覚を知ろう。

### 格言⑦ 成功する会社の特徴を学ぼう！

会社が元気であるためには、人件費が収入の三割以内でなければならぬ。また成功する会社と失敗する会社の違い。失敗する会社は、売り上げ利益で、自分を飾る高級車や高級時計を買う。成功する会社は、施設を拡張したり新規に機械を購入したり、会社に投資する。成功している会社の経営者からお寺の運営方法を学ぼう。

### 格言⑧ 檀家だと安心するのはやめよう！

檀家は、お寺とご縁が深いだけで、特別に信仰心があるわけでもなく一般人そのものである。檀家が集まるイベントには一般人は集まらない。檀家のためのコミュニティなので一般人には興味がない。逆に一般人が集まるイベントには檀家も集まる。つまり、一般人がお参りしないお寺は、檀家も徐々に離れていく。檀家が二五〇軒以上あるから大丈夫だとあくらをかいて安心するのはやめよう。

# 山形県米沢市日朝寺安置五輪塔の一考察

——その由来とその意義について——

玉木 晃 仁



## 【はじめに】

吉祥山日朝寺は、米沢藩初代藩主 上杉景勝公（一五五六～一六二三）寄進の上杉家ゆかりの寺院である。<sup>\*1</sup> 日朝寺境内に佇んでいる五輪塔について多くの方々に聞かれた。<sup>\*2</sup> それが五輪塔への興味の端緒である。正確な大きさは不明であるが、高さ約四メートル超くらい位ある。五輪塔は全国の仏教寺院に点在し、日蓮宗寺院にも新旧多種の五輪塔が確認できる。勿論これから調査・検証の必要はあるが、大きさは日蓮宗最大級の五輪塔であると思う。小稿は、日朝寺安置の五輪塔の由来と意義について考察したものである。

## 【日朝寺五輪塔の由来について】

明治二十八年（一八九五）一月八日付けの『米沢新報』第二十三号に

日朝寺本堂落成について報道されている。<sup>\*3</sup> 記事を整理すると、日朝寺落慶式が近々挙行される。松原獄門場の場所に、鉄道敷設のため煉瓦工場を建設する。敷地内の地藏尊と五輪塔を日朝寺へ移動し大施餓鬼会を施行される予定。上杉家統治時代、松原獄門場で一千五百人余が処刑執行されたのだという。特筆すべきは五輪塔で、高さ五尺余りの大石を刻印し積み上げている。以上要略

この新聞報道以外、移動に至った経緯は不明である。正確な移動日時・運送方法・発願者も判明していない。謎の多い五輪塔なのである。米沢市は、長尾上杉氏・またその統治についての古文書資料保持に力を入れている自治体であるが、処刑場の記述は確認できない。米沢新報の記者が江戸時代の死刑執行された数が一千五百人余りとした根拠資料も確認できなかった。また地藏尊は、現在日朝寺には安置されていない。

明治二十七年（一八九四）に勸進目的で制作された本堂建築八千圓見積（左頁図）の挿絵には地藏尊はない。さらに五輪塔の正面に「日・蓮・大・菩・薩」と刻まれ、残り三方は刻まれていない。しかし実物は四方に刻印されている。これは日朝寺に移されたときに刻まれたと思われる。移動とともに新たに法華経・日蓮宗の五輪塔に改めたのである。刻印は

右面	頭	喉	胸	胎	足
正面	日	蓮	大	菩	薩
左面	肝	法	心	腎	脾
後面	妙	肺	蓮	華	経

とある。刻印するとき、根拠にした書物は判らない。日蓮系教団では、五輪塔の意義を今日偽書と判明している『御義口伝』<sup>\*4</sup>に求める場合が多い。南無妙法蓮華経・第三 唯以一大事因縁事（方便品）・第六 五番神呪を表にし検討してみる。<sup>\*5</sup>



薩 達摩 芬陀梨伽 蘇多覽

一 大 事 因 縁

法華經 華嚴 中間三昧

妙 法 蓮 華 經

頭 喉 胸 胎 足

十羅刹女 持国天王 增長天王 広目天王 毘沙門天王

比較してみると、正面に「日蓮大菩薩」とあること、「肝・肺・心・腎・脾」の五臓の配当を『御義口伝』には確認できない。修法師の口伝・切り紙相承を参考にして文字を選んだのかもしれないが、典拠書物の特定はできない。

刻字にも疑問がある。後面「妙・肺・蓮・華・経」左面「肝・法・心・腎・脾」と肺と法が入れ違っている。単純に間違えたのか。可能性は、そればかりではない。米沢では、旧家の多くに建物・造形物・墓碑等を完璧には作らない場合がある。完成したものを作るとそれ以降の発展がない。少し不便な方が、思考が充実するとした思想文化がある。関連事例として上杉家菩提寺 法音寺に安置されている二代藩主上杉定勝（一六〇四～一六四五）と四代藩主上杉綱憲（一六六四～一七〇三）の廟所前の灯籠が上弦の月にされている。満月にしないのは、ただ欠けるだけで、それを避ける意図があったのだという。

二十六世玉木日晃（一八四九～一九二七）の日朝寺復興の象徴ともいえる五輪塔である。こうした意図もあったのかもしれない。また妙法蓮華経を正面に配置しなかったのは、玉木日晃は祖師信仰による布教を行っていたと伝わっている。それが影響したのかもしれない。

## 【日蓮聖人遺文から五輪塔の意義を探る】

小稿は、五輪塔全般の考察が目的ではない。関連部分のみの紹介に留める。<sup>\*6</sup>

狭川真一氏は、五輪塔研究史の概要を示して、五輪塔の出現した時期は、一二世紀前半から一三世紀後半頃までで、時代区分では概ね鎌倉時代中頃までが該当するとしている。<sup>\*7</sup>

川勝政太郎（一九〇五―一九八三）によると、「元来、五輪塔は密教において胎藏界大日如来の三昧耶形とされ、五輪塔そのものが胎藏大日を象徴するものであるが、この塔形は早くから宗派を超えてわが国人に親しまれるようになったので、実際遺品について見ると、いろいろの場合が造設されている」<sup>\*8</sup>さらに「梵字の代わりに「地・水・火・風・空」の漢字を各論にあらわすものは、室町中期の享祿三年（一五三〇）の法華寺墓域一石五輪塔（大阪府堺市鉢ヶ峰公園墓地）などが古い例で、江戸時代には多くの例を見るようになる」<sup>\*9</sup>のだという。また日蓮宗で最も古い五輪塔は、建立時期は不明である。興味深いところで、六老僧の日頂（富士宮市 正林寺）・棧敷女房（鎌倉常栄寺）の供養塔が五輪塔である。これらを含め宗門の五輪塔調査の必要性を感じた。

五輪塔の記述は御遺文に確認できないが、実見した可能性は高い。狭川真一氏の前掲論文所収の「第一表 出現期の五輪塔一覧表」には、平安期から日蓮聖人の活躍した時代を含め網羅している。表によると、刻まれた文字は無字以外は全て梵字の真言で、法華経の文字は一切確認できないのである。

真言との関係で日蓮聖人が京都で書写した覚鏤（一〇九五―一一四四）『五輪九字明秘密釈』の五輪観の思想と五輪塔に関係があると指摘した研究論文が多数ある。また聖人は真言密教に多くの批判をされている。しかし覚鏤には触れられていない。それを含め後の課題とさせて頂く。

五輪観とは、五輪成仏の略。五輪（五大。地・水・火・風・空）を自身の五処（頂・面・胸・臍・膝）に観じて、

即身成仏を期す真言の觀法<sup>\*10</sup>である。それに対し『開目抄』に

仏になる道は華嚴唯心法界、三論の八不、法相の唯識、真言の五輪觀等も実には叶べしともみへず。但天台の一  
念三千こそ仏になるべき道とみゆれ。(『定遺』六〇四頁)

聖人は、五輪觀の修行を否定されている。日蓮宗の五輪塔が五輪觀に基づく塔と定義されると仮定すれば、宗祖の意思に反している存在ということになる。

日蓮聖人は法華經を色読され、見宝塔品第十一から囑累品第二十二までの虚空会を圖顕化したのが曼荼羅であり、重要視された。虚空会では、宝塔が出現している。宝塔について『阿仏坊御書』に

末法に入て、法華經を持つ男女のすがたより外には宝塔なきなり。若然者貴賤上下をえらばず、南無妙法蓮華經  
ととなるものは、我身宝塔にして、我身又多宝如来也。妙法蓮華經より外に宝塔なきなり。法華經の題目宝塔  
なり。宝塔又南無妙法蓮華經也。今阿仏上人の一身は地水火風空の五大なり。此五大は題目の五字也。然者阿仏  
房さながら宝塔、宝塔さながら阿仏房、此より外の才覚無益なり。(『定遺』一一四四頁)

宝塔は、地水火風空の五大であり題目であり多宝如来である。発展解釈すれば、虚空会に出現した宝塔が五輪塔であり、日蓮宗の五輪塔建立の根拠とすることもできる。しかし明確に地水火風空の五大が記されている遺文は、『阿仏坊御書』のみである。<sup>\*11</sup>ただし真蹟は存在しない。史実として日蓮聖人の思想を探る規則がある。身延山久遠寺『昭和定本日蓮聖人遺文』から真蹟遺文・真跡断片がある。直弟子の写本がある。明治八年身延山大火前に曾て身延山にあつた遺文を用いる。この規則に照らし合わせると御遺文から宝塔の根拠は存在しなくなる。さらに浅井要麟<sup>\*12</sup>(一八八三〜一九四二)が僅かに疑問を呈しているようであるが、これ以上真偽について言及できないのが現状のようである。以上を纏めると、日蓮宗の五輪塔は、定義がない曖昧な存在であると思われる。

## 【結び】

墓石カタログの多くに、日蓮宗の五輪塔なるものがあり、建立を勧めている。曖昧な位置の五輪塔の対応を考えるようになった。日蓮宗に対処するべき指標もない。付随して最古または最大規模の五輪塔の所在地はどこなのか？曖昧な存在ゆえに調査さえも行っていないように感じる。日蓮宗寺院に由緒ある多くの五輪塔がある。発願した先師・檀信徒の願いの調査に意義を感じるが、現実問題難しい。

米沢日朝寺の五輪塔が宗門最大級と名乗ると、反応があり面白いと思ったのだが、正確な計測の仕方・定義を御存知な方は教えて頂きたい。玉木日晃により改められた日蓮宗の五輪塔、日蓮聖人遺文から意義の確認を試みたのだが、不十分な感は拭えない。しかし五輪塔の意義を考える良い機会であったと思う。

\*1 拙稿「米沢吉祥山日朝寺の歴史に挑む」『温故』第四十一号 米沢温故会 を参照

\*2 寺院群都市首長会議 寺町サミットの会場寺院になる。「第十八回 寺町サミットイン米沢 人と人を繋ぐ町づくり」をテーマに事例発表、各都市首長による議論。平成二四年一〇月五〜六日 飯山（長野）、金沢・小松・七尾（石川）高岡（富山）上越（新潟）岐阜、米沢の全国八都市加盟二四〇名以上の方が来山。その他多くの団体が、日朝寺に来山された。

発表レジメでは詳細に記した。紙面の都合で割愛

\*3 『米沢新報』明治二十八年一月八日 第二十三号（市立米沢図書館所蔵）「●日朝寺本堂の落成 今町の同寺ハ往古上杉景勝公の御代公に従伴し越後の高田より曆遷せしものなるが彼の享保年中立山三明院より發火せる祝融の為に全市殆ど一朝よして惨恒たる焦土と化し古史を繙き今に之を追思すれば轉た酸鼻悲哀に堪へざるもるあり其際同寺も不幸にして類焼し爾后今日迄晋請の運びに至らざりしが同寺の住職玉木日晃氏の斡旋盡力に依り漸く其晋請の成功を見るに至れり巍然たる高

閣天に聳ひ宏潤たる建礎地に漫り一目清浄爽感を慈き起す斗りなり就て其落成式を近々舉行せらるゝと由なるが彼の松原獄門場を這般鐵道敷設の爲め煉瓦製造場を使用することとなりしを以て右に安置せる地藏尊並に五輪塔等を悉く移置し大施餓鬼を施行せらるる筈の由なるが聞く処に依れば同獄門場に於て處刑せられしものは一千五百有余の多きなりと定めし此大施餓鬼の爲め地下に瞑目し得べけん因に記す同寺本堂の構造と高さ五丈八尺余奥行間口八間四尺四方の大且つ廣くして殊に珍しきは五輪塔なり其高さ壹丈五尺余の大石を以て刻み建てたるものなりと云ふ」(全文掲載)

\*4 執行海秀(一九〇七〜六八)によって、六老僧の日興(一二四六〜一三三三)の著作とされていた『御義口伝』は偽書と今日認定されているが、それまで日蓮宗では重要な位置であった。『大正藏経 八四』にも収められている。日蓮系教団では、現在でも重要な著作と扱われている場合もある。詳しくは執行海秀『御義口伝の研究』、『日蓮宗事典』御義口伝の項を参照

\*5 『定遺』二六〇五頁・二六一五頁・二六九六頁

\*6 五輪塔を含め石造物について、平重衡の南都焼討によって消失した東大寺を、重源(一一二一〜一二〇六)の勧進により復興した。その際、宋から石工を招いた。その展開は、山川均『石造物が語る中世職能集団』に詳しい。また五輪塔の発展展開に、日蓮聖人と同時代で関係のある良寛房忍性(一一一七〜一三〇三)が普及に大きな役割を果たしたことについても記されている。

\*7 狭川真一『五輪塔の成立とその背景』、『元興寺文化財研究所研究報告二〇〇一』の、二、五輪塔の研究史の概要で研究者の説を紹介し、さらに全国の出現期の五輪塔の一覧表も作成されている。

\*8 川勝政太郎『新版 石造美術』二二二頁

\*9 同右 一二五頁

\*10 『日蓮聖人遺文辞典 教学編』三三七頁

\*11 日蓮聖人は、五大(地・水・火・風・空)を認識していた。書写した『五輪九字明秘密釈』に記されている。配当について『戒之事』(『定遺』二二二二頁、真蹟三島本覚寺)があるが、水と火のみである。『昭和定本日蓮聖人遺文』三巻に続

編として所収の遺文は偽書の可能性が高い。統編の『戒法門』（『定遺』一九三四頁）に配当が記されている。真蹟ではないが『生死一大事血脈鈔』（『定遺』五二四頁）に文脈から確認できる。ただし「空」は記されていない。

\*12 浅井要麟は、『阿佛房御書』について、「文永九年三月塚原に在つて阿佛房に送られた消息と云ひ、また建治二年身延からともいはれてゐるが、その他にも不審の點が甚だ多い。（後略）」日蓮聖人遺文全集改題『昭和重修 日蓮聖人遺文全集 別巻』二〇九頁

本堂建築八千圓見積を日朝寺檀徒加藤利夫様に寄贈して頂きましたこと。米沢市郷土史を同檀徒佐藤由美子様の示唆・教示を得ましたこと。御礼申し上げます。

# 近現代哲学の認識問題から教化を考える

石 伏 叡 齋

十六世紀以後のヨーロッパはルターによる宗教改革とそれに伴う戦乱の渦中であつた。一方、時を同じくして、自然哲学から自然科学が生まれた。自然科学の成果は客観的で共通了解を可能とするものであつた。

宗教や哲学では自然科学のような客観的な共通了解は得られない。そこで主観・客観という認識問題が近代哲学の中心問題となる。

宗教戦争と自然科学の台頭の渦中であつて、デカルトは主観・客観問題の一致の可能性があり得ないことを主張した。どんな認識も主観の認識なので、誰も自らの主観を出て客観と一致してゐるかどうかが参照することができないというものである。

その後、スピノザやライブニッツは合理的推論によつて世界は必ず認識できるといふ独断論の立場をとる。対してヒュームはそのように世界を正しく認識できないという相対主義（不可知論）の立場をとつた。それらの対立に対して、カントは物自体という回答を出した。人間としての共通認識は取り出せたとしても、あるがままの客観は全知全能の神以外は認識不可能というものである。

それに対して、「神は死んだ」と唱えたニーチェは全知全能の神のような認識も否定し、客観世界を終焉させてしまふ。そしてフッサールに到って、一切の認識は信憑であるという現象学的還元に至る。これらが近現代の主要なテーマである認識問題の背景と当初の流れである。

さて、フッサールの現象学的還元について掘り下げてみる。デカルトは「我思う、故に我あり」という有名な言葉を唱えた。この世の全てを疑ってみても、疑っている自分の意識の存在だけは疑えないというものである。その思考から導き出される世界は次のようになる。普通に考えたと世界（主体）の中に自分（客体）がいるのであるが、デカルトでは逆に、世界を認識する自分が認識の主体であり、自分が認識する世界は客体となる。

さらに、フッサールの現象学的還元によればこうなる。普通に考えると、客観が原因で主観が結果となる。つまり、「世界はこのように存在するから（客観）、私は世界をこのように思う（主観）」というように。ところが、現象学的還元では、順序が逆になる。主観が原因となって客観が結果になる。すなわち、「私は世界がこのようなものと経験するから（主観）、私は世界をこのようなものとして認識する（客観）」というように。

要するに、我々はいろんな仕方の主観の認識を作っていて、ここから客観はこうだという確信を作り上げているだけということになる。一切の認識はそのような信憑（主観の確信）であるというものだ。

それを今の日本人に当てはめて考えるとこうなる。宗教団体の運営する私立の学校などを除いて、小学校、中学校、高等学校で宗教の教育はなされない。そんな教育で育った戦後の日本人が今は人口の大多数である。祖父父母の世代も

そんな世代であるから、家庭でも宗教的な情操を育む機会がない。現象学的還元から述べると、そんな環境で育った子供たちは、宗教から隔絶された世界観を客観的世界だという信憑（主観の確信）を形成している。直葬、墓は要らない、菩提寺に行かない。言い換えると葬式離れ、墓離れ、寺離れの三離れの根本となる認識である。

そこを何とか教化しなくてはならない。教化というのは仏法の本質について認識を得て共通理解を得ることである。ここでは、難信難解ではあるがこれが真理だ、以信代慧だ、行浅功深だ・・・といったことを肯て離れて、キリスト教の凋落と自然科学の台頭ともに起こった近現代哲学の認識問題から考えを進める。

ニーチェにしても、フッサールにしても、世界の真理という意味での客観世界は存在しない。それではどのような認識の世界があるのか。フッサールの現象学では一切の認識は信憑であるとして、その信憑の認識には三つの間主観的な相がある。

- ① 主観的確信
- ② 共同的確信
- ③ 普遍的確信

① 主観的確信とは、共有されない一人だけの個人的な確信や信念といった主観的な確信である。② 共同的確信とは、二人以上の複数に共有された共同的確信である。宗教も宗派ごとに認識が異なりその意味では普遍的な確信とはなりえず共同的な確信となる。そして③ 普遍的確信とは、普遍的に共通理解を得られる確信である。自然科学や論理学が

それに当たる。

共通了解が成立する普遍的な確信の領域はともかく、それが不成立の個人の主観や限られた集団での共同的な確信の領域では、違った様々な異なる認識があり、それぞれ相容れないものがある。

そのような信仰の世界は、①主観的確信②共同的確信と位置づけられてしまう。そうになると、それぞれが自らの宗教や信仰の絶対性を互いに主張しあっても取捨はつかない。近世以前なら棲み分けも可能であっただろうが、地球が狭くなった現代では宗教対話による共存の道が関の山であり不可欠である。

一方で、普遍的確信といった共通了解が成立する領域は自然科学、論理学である。これを指摘すると、自然科学と仏教の親和性や類似性から、仏教の共通了解の成立を試みられないかという指摘もありそうである。しかし、この点について花園大学の佐々木閑教授は「犀の角たち」にて、

確かに、科学と仏教のひとつひとつの要素を見ていけば、似ている点は見つかる。しかし実際には、その何百倍も何千倍も、似ていない点があるのだから、個々の類似点をもって、両者の相対的類似性を主張することなどできない。

佐々木閑『犀の角たち』三頁

と述べている。物理学出身の筆者としても何か仏教と物理と類似性を調べ、そのことで仏法の普遍性を述べて教化

に役立てられないか調べてきた。しかし、この通りで不可能であると考えるに到っている。

ともかく、一生懸命教義を学び、信行に励んで、教化力を高めて、信徒を増やし感化を及ぼすことに勲功があっても、一天四海皆婦妙法に到るような共通了解は得られない。少なくともニーチェやフッサールによる認識問題への回答からはそう指摘せざるを得ない。

もちろん、手立てが全くないわけではない。

釈尊が創成した本来の仏教は、我々が想像する以上に合理的なものであり、神秘の影はきわめて薄い。そして、科学と同じ土俵に上がって四つに組むことができるのは、その本来の仏教だけなのである。

佐々木閑『犀の角たち』四頁

ここでいう本来の仏教とは、インド仏教学でいうところの原始仏教である。先述の共通了解が成立する領域は、自然科学と論理学である。原始仏教の論理的な部分を教化に活用して、共通了解の足がかりにならないかと考える。更に普遍的確信に到るためには、原始仏教を記号論理学の言語に翻訳を試みてはどうかと考えている。

「不受余経一偈」に反するかもしれないが、私はつくづく教化の場面で感じ入ることがある。それは、数十年前までの檀信徒は仏教や法華仏教の極基礎を知っていた。だから、お題目を結論とする法話もしやすかったかも知れない。しかし、今の檀信徒は未信徒と同じである。法華信仰の未信徒ではない。仏教の未信徒なのである。

よって、普遍的確信に到るような共通了解の成立する領域、あるいはそれに近い共同的確信に到るような領域に誘引し、しかる後に法華仏教の本質を説くという手立てが必要であると考える。また、原始仏教から法華仏教への誘引の過程にあつてはインド仏教学やその見地からの梵本法華經の知識も必要になると考える。それは種智院大学の荻谷定彦名誉教授の講義を東方学院で受講した筆者として常々考えることである。

従前の、寺院と檀徒の関係は寺請制度の寺檀制度の名残であつた。そして、明治維新以後その絆は死者儀礼であつた。また、檀徒も信徒も木鈿修法や占いを駆使するなどした祈禱系の信徒であるかも知れない。それも大切なことであるが、現代に到つてもそのバイアスが強く、仏教の本質なかんずく法華仏教の素晴らしさを説こうにも難しいものがある。そう考えると、彼らにすら普遍的確信に到るような原始仏教の共通了解が成立する領域は必要であると考える。

最後に、今後の課題について述べておく。デカルトの、自分が認識の主体であり、自分が認識する世界は客体となるという考え方や、フッサールの現象学的還元は、どことなく己心に三千世界が具足するという一念三千の法門に通じるものがあるのではないかという期待があり、そのあたりを深く掘り下げてみたい。

また、フッサールの現象学還元にはエポケー（括弧入れ）という作業がある。実存する疑えない唯一の私の感覚器官から感じる形容的なものは疑えない確実なもの。たとえば、仏壇に供えられた仏花の菊（のようなもの）を見て、花弁は白と黄色があり、葉は緑色といった感覚は疑えない。しかし、そこから発する確信は不確実である。菊だと思つても、よくできた造花かも知れない。感覚器官で感じたことは疑いようのないことであるが、そこから来る確信

(認識) は不確実である。前者のエポケーされた感覚から現象学的に妥当な認識、普遍的な認識を得られる可能性がある。このことと如実知見との関連を研究するのも面白いと考える。というのは、仏教の行 (*samāsāra* 形成作用) との対比を試みることができそうである。「無明は行に縁たり、行は識 (認識作用) に縁たり…」の十二因縁の「行」である。この行とエポケーを絡めて如実知見と現象学を対比する研究も面白く有用かも知れない。それだけではなくそこに「認知神経科学」「錯覚の科学」といった方面からも認識問題を考えること。これらは基礎的な仏法の現代的理解や教化に役立つものに違いないと考える。

更に、認識問題のハイデガーやそれ以後の展開である。実存論哲学、ポストモダン思想と仏教ということも考えなければならぬ。それらには現代人の思考の潮流に大きな影響があり、現代人に恩恵だけでなく苦悩をもたらすものである。その特質の源泉を鑑み研究することは現代人への教化にとって欠くべからざることと考える。

総じて、教化は仏法を正しく認識していただき、共通理解を得ることと考える。一天四海皆帰妙法は普遍的確信の認識であろう。だから認識問題の切り口ははずせない。その観点から研究を続けていく所存である。しかし、認識問題ひとつをとっても、哲学はあまりに難解かつ膨大な思考の大海原であり、底知れぬ世界である。今般はその入口を示すに留まってしまったこと、またそうならざるを得なかったことをお許しいただきたい。

参考文献

- 「現象学は思考の原理である」竹田青嗣 ちくま書房
- 「超解説！はじめてのフッサール 現象学の理念」竹田青嗣 講談社現代新書
- 「竹田教授の哲学購読21講」竹田青嗣 みやび出版
- 「哲学用語図鑑」田中正人 プレジデント社
- 「年表で読む 哲学思想小辞典」ドミニク・フォルシエー 白水社
- 「100分で名著 ニーチェ」西研 NHK出版
- 「近代科学の源流」伊東俊太郎 中公文庫
- 「犀の角たち」佐々木閑 大蔵出版
- 「諸行無常」再考」鈴木隆泰 山口県立大学国際文化学部紀要 10, 21-31, 2004-03-25
- 「自然科学と仏教」現代宗教研究 第四十六号

# 「寺と社会」を考える

——もし、自分のお寺が避難所になったら——

石原 顕 正

今年も日本各地で、過去の経験やデータをはるかに超えた、異常気象によって大きな被害が発生しました。さらに世界中で起きているさまざまな気候変動関連の自然災害は、干ばつ、洪水などを引き起こし、水不足、食糧不足により飢餓・貧困が生まれ、果てには紛争の要因の一部といわれています。これから将来、地球全体の異変はさらに深刻な事態となり、自然の猛威は人間社会にさまざまな影響を与えることでしょう。私たち宗教者もこうした現実に対し、社会的課題として積極的に取り組む姿勢が求められています。私もこの二十年間、さまざまな災害現場での救援・復興活動に関与し、宗教的取り組みや防災に対する危機管理の必要性を学びました。

## 1、社会的背景（寺と社会の関係）

一九九五年、戦後五十年目の節目を迎えた、一月十七日、「神戸の街並みが一瞬にして崩壊炎上し、阿鼻叫喚の巷と化す」と言われたように、阪神・淡路大震災が発生。震災によって多くの尊い命が犠牲となり、人間の生きる意味さえ失われる事態に、私は現場に駆けつけ、悲惨な現実を前に、ただ、ただ怒りと悲しみがこみ上げ、「無常感」だけが強く感じられたことを今も覚えています。

震災以来、地元被災地の皆さんの懸命な復興への努力、全国から一〇〇万人とも言われた善意の支援は、慣れない

ながらも、「災害救援活動」として当時の社会現象ともなりました。

当時、山折哲雄氏は「宗教は大震災を前に沈黙した」と評されたが、その中には確かに多くの宗教者たちが積極的に人道援助を展開していました。こうした社会の動きと共に各宗教団体や教師の取り組みが本格的に始動し、重要な社会貢献として注目されるようになりました。

震災後まもなく、世間の悲しみをよそに三月二十日、「日本の安心・安全神話の崩壊」を象徴するような、オウム真理教の「地下鉄サリン事件」が起き、社会的に大きな衝撃を与えました。

「日本の寺は風景の一部でしかなかった」というオウム信者の、宗教に対する満たされない心の叫びが大きく反響を呼びました。それは何を意味していたのか。当時の日本が世俗化し、宗教、教えそのものが形骸化し、社会のニーズに十分に応えることができなかつたからでしょうか。この深層は今後に大きな課題を残すことになりました。

現代社会においては、私たちは災害時をはじめ、社会的困難に対する宗教救済の実践が求められ、寺院は、地域の防災資源としてさまざまな役目を果たすことが改めて期待されています。さらに教師や寺院婦人が防災や支援に関する知識や実践を身につけ、被災時のリーダー的存在になることが求められることでしょう。

しかし、現実はどうだろうか。「社会」について宗教の内部から考えてみると、その宗教の教義や布教の方法をもって宗教活動することはあつても、社会の困難を克服するための宗教的可能性、寺院としての機能を活かす取り組みはまだまだ少ないのではないのでしょうか。

災害時には、眼に見える風景ばかりではなく、社会的機能をはじめ、あらゆるものが根底から失われます。当然、被災によって当たり前前の日常が寸断され、大きな人的被害や避難を余儀なくされることが予想されます。災害はいつ、

どこで起こるかわかりません。その時、あなたは「自分の命は自分で守れますか」まず、我が身の安全が確保されなければ他者への支援は始まりません。

## 2、「もし、あなたのお寺が避難所になったら」

たぶん、皆さんは「うちは無理です」「来ないで」と心の中で叫びたくなるでしょう。

万一、大勢の人たちが「お寺にだけ込んでくる」ような事態になったらどうしよう。

そんな夢物語のような話が現実になるのです。

「公的避難所が指定されているのに……」と、思われるかもしれませんが、想定外の範囲を超える緊急事態には、様々な障害によってどうしても対処しなければならぬ事態が発生します。

これまでも多くの被災地で避難者が行き場を失い、お寺に居場所を求め避難生活を続けた現場を目の当たりにしてきました。

災害時にまず必要なことは、寺のスペースを開放したり、備蓄を提供することだけではありません。現実には被災者を目の前にして、本当に求められるものは、精神的支えであり、被災者を理解することは、体力や時間以上に創意工夫が必要でした。

もし、「自分自身が被災したら、どんな救援を求めただろうか」そう考え始めると、相手は被災者という集団ではなく、一人一人の個人であり、一つ一つの家族であることに気づきました。傷ついた人々こそ、自分を大切にしてほしい。尊敬してほしいと思っています。私たちの真の仕事、役目とは、被災者一人一人に、まず人間の尊厳を見いだすことが求められます。

支援者の大半は、己の行為に満足し、気持ち良い疲労感は、「してあげた」という快感を伴っていました。しかし、私たちは、一時の同情や涙ではなく、個人的な支援の誘惑を捨てて、対等な関係で被災者と向き合うことが肝心です。まず、お寺にとっての「災害対策」とは、

『一般人とは違い被災者にならない』こと。

当然、被害は一樣に受けて被災はするが、みんなと一緒に避難所に避難しているだけでは、お寺としての立場が埋没し、宗教者としての使命を果たすこともできなくなります。予めいち早く地域に貢献できる準備をしておく事が重要です。

寺院の建造物は、貴重な歴史的遺産（レガシー）が多く、自ら被災し損傷することも考慮しなければなりません。堂塔伽藍はじめ、ご尊像、位牌、荘厳具の転倒、落下の防止。山門、鐘楼堂、石塔、扉などの倒壊に備え、事前の点検、改良が必要となるでしょう。

### 3、支援の拠点となる

阪神では、壊滅的被害を受けて埋没する寺院もある中、すべてのライフラインが止まり、自坊が被災しながらも避難者をはじめ、全国から駆け付けてくれた多くの支援者を受け入れ、救援活動の拠点として機能していたケースもありました。連日、求めに応じて亡くなられた犠牲者への読経、回向など宗教的使命を果たし、さらに支援者と共に多

くの被災者が避難する学校の校庭、公園などへの炊き出し、支援物資の調達配布などに奔走する日々が続きました。北海道、有珠山噴火の際には、町役場はじめ行政機能が他の地域に移転避難する中で、教会の施設に避難者を収容し、公的支援や外部の支援など届かない状況の中、自らすべてを提供し、寒さをしのぎながら孤軍奮闘する教師の姿があった。

新潟の場合、住職が法務など外出時に地震が発生し、やっとの思いで寺に戻った時、被災した自坊を目の当たりにして途方に暮れてしまった。「気がついたら自分自身が、被災者になっていた」と、お上人は実感を語ってくれました。

その後、本格的に現地拠点として、外部からの支援者の衣食住を担いながら、避難者への支援・サービスは檀信徒対象に止まらず地域全戸への活動に拡大し、気が付けば自らの痛手を忘れるかのような多忙な日々を過ごすことになりました。

さらに、NPOなどの支援を受け、さまざまに戸別支援の機会を通して被災者との信頼の絆を結び、被災により、すでに中止が決定していた地域の「夏祭り」の開催をお寺が先導し、地域住民と一体となって復興に向けての取り組みが実現しました。

#### 4、お寺の「備災」を考える

お寺が避難所になったら

いきなり、「お寺が避難者になだれ込まれる事態」を避けるためにも準備を怠りなく。

いざ、という時のための【防災寺族会議】を実施しましょう。

まず、住職、教師はじめお寺にいる寺族全員の理解、協力が不可欠となります。さらに檀信徒、地域の人々との連携や、日頃から危機対応能力のある（マンパワー）人材の確保、協力が得られることが大きな地域貢献への資源となります。

・ 社会活動を開始するための覚悟が必要。

・ 日頃のお寺と社会との付き合いによって、どれだけ必要な情報が集められるか。

・ お寺として求めに対応して、救いの手立てを実践する事ができるか。

・ 地域の地形や環境などさまざまな要因について検証し、自坊でのリスクや危険度を把握する。

・ 自坊に避難者の受け入れが可能かどうか、事前に意思決定を。

お寺が避難所となれば、日常の法務に加え、宗教的求めに応じ、亡くなられた犠牲者への読経回向をはじめ、時には葬儀を依頼されるケースも発生するでしょう。さまざまな事情をかかえる被災者に寄り添いながら、悲しみや不安を和らげ、共に現実を克服するためには手間隙を惜しまず対応することが求められます。生存者への衣食住をはじめ、情報発信、救援物資の補給や調達などに追われ、さらには行政との連携、外部からの支援組織、支援者との調整も不可欠となります。

住職（宗教者）として宗教面で関わる一方、お寺のどこまでを開放すべきか判断を迫られることもあり寺院施設の管理者としての立場や、寺族との暮らしを確保するなど、それぞれの役割を担うこととなります。被害の程度や公的避難施設の状態によっては、避難や支援が長期化することも予想されるため精神的ストレスや、経済面での負担も覚悟しておかなければなりません。

突然の災害に、お寺に人がなだれ込むというより、私たち自身が「災害に飲みこまれない」ための備えが絶対に必

要であり、災害時にこそ、お寺は常に「人が生きる場所」、「救いの拠点」として機能することが期待されています。すべてを失った悲惨な人々の「心の叫び」を受け止め、「心をうめる」救いの手立てが宗教力となるよう、宗教者自身の真価が問われることになるでしょう。

近年SNS等により、地域内限定ではなく広く全国、世界に向けて情報を発信し支援を求めることが可能になりました。今回の熊本地震でも現地のお寺が現地拠点として、国内外から多くの善意を頂き、現在も被災地でのさまざまな支援を展開しています。皆さんもこの機会に、新たな社会との関わりを考え、人と人との絆を広げてみませんか。

ご静聴ありがとうございました。

# 過疎地域における寺檀関係の持続可能性

——他出子の動向に注目して——

中 條 曉 仁

## 一 はじめに

筆者は農村地域研究を専門領域とし、地域や空間を対象とする地理学を基盤に研究を進めている。我が国の農山村、特に過疎地域で生じている社会経済的な地域問題について、フィールドワークに基づきながら現場で考えている。本報告で対象とする「寺院問題」は過疎地域問題の一つであり、地域社会の本質的变化を考える重要な手がかりを与えてくれる事象である。すなわち、過疎地域（農山村）の「イエ」あるいは「家族」の流動化を示す指標として位置づけられるのである。

筆者の寺院問題に対する取り組みは、「過疎問題連絡懇談会」への参加がきっかけであった。以前から過疎地域の寺院問題に対して関心を寄せてきたが、懇談会への参加を打診され本格的な学術研究に取り組むこととなった。その懇談会は日蓮宗をはじめ、浄土宗、浄土真宗本願寺派、同大谷派、臨済宗妙心寺派、真言宗智山派で構成され、隔月で集会を開き「過疎寺院」に関する情報交換と各派での研究活動の報告が行われている。また、筆者は二〇一二年〜三年にかけて日蓮宗過疎地域寺院活性化検討委員会が主催した「寺づくりアイデアコンペ」において応募アイデアの審査に携わり、応用研究としての「寺づくり」の実践にも関心を寄せているところである。

寺院問題に関する学術的な調査と研究に関しては、浄土真宗本願寺派総合研究所が主宰する「寺院調査会議」に協力研究者として参画していることが大きい。後述するが、過疎地域に多くの寺院を有する同派において、過疎地域の寺院と地域社会に関する調査計画の策定とその実施に参与し、分析活動に協力している。本報告の内容は、ここで機会を得た調査活動における成果の一部である。

## 二 本報告の問題意識と目的

現代の過疎地域では、「寺院問題」が顕在化していることが指摘されている。過疎地域で「寺院問題」が生じる要因として、檀家というイエの構成員の空間的流動化が挙げられる。すなわち、檀家のメンバーである家族が、過疎地域から都市へ転出するなど空間的に分散居住することによって、従来の定住型システムの上に成り立っていた寺檀関係が維持できなくなっていることが想定されるのである。

寺院問題の具体的事象は三つに区分できると考えられる。第一としては檀家の減少が挙げられる。これは檀家の家族の転出に伴う寺檀関係を解消するイエの増加が想定される。第二は、檀家の減少に伴い寺院の管理者である住職の不在に伴う問題がある。しかし、この時点では本堂や境内などは檀家の人々の手によって維持されている。そして、「廃寺」化という第三の問題が出現する。この段階では伽藍を管理する檀家すらもいなくなり、境内そのものの維持が難しくなる。寺院の統廃合が現実化する事象である。

本報告の問題意識は、現代の過疎地域で生じている家族の空間的分散居住の広域化、すなわち老親が地元に残留し、子どもが域外へ転出する（以下、他出子）というパターンが一般化しているなかで、他出子が寺檀関係を継続するかを考えることである。老親は寺檀関係を維持するが、地元にいらない他出子は果たしてどう対応するかを問うことである。まず、檀家における他出子の存在形態を明らかにすること、そして老親が域外に転出している子どもに対し

て寺院との関係や仏事等の継承をどのように考えているのか、それを規定する地域的要因を明らかにすることが本報告の課題である。

なお、本報告でいう「寺院問題」とは、寺檀関係の持続可能性が困難になっている事態を指す。また、寺院とは伝統仏教教団の「寺院」を指し、過疎地域に所在する寺院を「過疎寺院」とよぶ。寺檀関係は、寺院を経済的・人的に支える檀家との関係を表すことを予め断っておく。

### 三 近年における「寺院問題」研究

近年、寺院問題について検討、あるいは報告する書籍が相次いで出版されている。その主なものを取り上げると、櫻井義秀・稲場圭信編（二〇一〇）『地域社会をつくる宗教―叢書 宗教とソーシャルキャピタル―』明石書店、鶴飼秀徳（二〇一五）『寺院消滅―失われる「地方」と「宗教」―』日経BP社、櫻井義秀・川又俊則編（二〇一六）『人口減少社会と寺院―ソーシャルキャピタルの視点から―』法蔵館などがある。人口減少社会における檀家数の減少が寺院の維持にいかん作用するのかを起点にして、仏事的機能から社会的機能を担う寺院や寺族のあり方にまで幅広く検討した論考が収録されている。特に、櫻井・川又編（二〇一六）で、これまで寺院が担ってきた仏事中心の機能をソーシャルキャピタル形成の素地として評価している点は注目されよう。

鶴飼（二〇一五）にある「寺院消滅」というタイトルはセンセーショナルであるが、その背景にあるのが「地方消滅論」である。これは増田寛也編著（二〇一四）『地方消滅―東京一極集中が招く人口急減―』中公新書で展開されている、いわゆる「増田レポート」の議論である。そこでは地方の人口減少問題を「消滅可能性都市」（二〇四〇年に若年女性人口が五割以下に減少する市区町村）を軸に論じており、特にそうした都市が全国一七九市区町村のうち半数近くの八九六に上り、さらに五二三市区町村が人口一万人未満となり消滅の可能性が高いことを指摘した。同

書の巻末に「消滅可能性都市」を名指しして、関係者に大きな衝撃を与えたことは記憶に新しい。さらに、これに基づいて「選択と集中」という名のもとに、国家予算投下の費用対効果の薄い地方自治体の整理再編を進めるべきとの論調が引き起こされていることは憂慮すべきことである。

それに対する反論が農村地域研究者から相次ぎ、その代表的な書が小田切徳美（二〇一五）『農山村は消滅しない』岩波新書、山下祐介（二〇一四）『地方消滅の罨―増田レポート』と人口減少社会の正体―ちくま新書である。全国が進められている「地域づくり」や、「田園回帰」とよばれる農山村の地域的価値を見出そうとする人々の人口移動現象などを取り上げ、農山村の地域社会は強靱で、簡単には消滅しないという論が展開されている。

#### 四 我が国における過疎地域の分布と「過疎寺院」

まず、我が国における過疎地域の分布を確認しておく。過疎地域とは、いわゆる「過疎法」とよばれる一九七〇年から施行されている一〇年単位の時限法で定められている地域のことを指す。現行法は、二〇〇〇年から継続されている「過疎地域自立促進特別措置法」である。

図1は、現行法で指定されている地域を示している。全国一七〇〇〇余りある市区町村のうち四六パーセントにあたる七九七自治体が過疎地域に指定されており、その人口は一一三五万人で、面積は二二万一九一平方キロメートルに及ぶ。人口は総人口のわずかに八パーセントに過ぎないが、面積は実に五八・七パーセントに達する。過疎地域の分布は、北海道地方の大半に及ぶ地域、東北地方は北部から奥羽山脈と日本海側に面する地域、関東地方は房総半島の南部、中部地方は山岳地域と半島部、近畿地方は紀伊半島南部と日本海に面する地域、中国・四国地方は都市部を除くほぼ全域、九州地方もこれに同じ状況である。

以上をふまえて過疎寺院の分布を都道府県別に確認する。ここでは、各都道府県の過疎地域に立地する宗派別寺院

数を、各都道府県の宗派別総寺院数で除して算出された割合から検討する。まず日蓮宗寺院の分布(図2)をみると、北海道から東北地方、中国地方西部、四国地方西南部、九州地方中南部において三〇パーセントを超える地域が目立つ。身延山久遠寺が所在する山梨県においても、寺院数が多いゆえに過疎寺院比率の顕著なことが窺える。過疎地域を多く抱える都道府県ほど過疎寺院比率の高いことがわかるが、この比率は各宗派の寺院分布に影響されることを確認しておきたい。それを顕著に示すのが、次に示す浄土真宗本願寺派における過疎寺院の分布である。図3によれば、中国・四国地方と北海道地方において顕著である。これは同派寺院が西南日本や北海道に偏倚して分布しているためであり、東北地方から中部地方にかけては少ないことが作用している。なお、同派寺院は近畿地方において多くの分



図1 過疎指定地域 (総務省資料を基に作成)

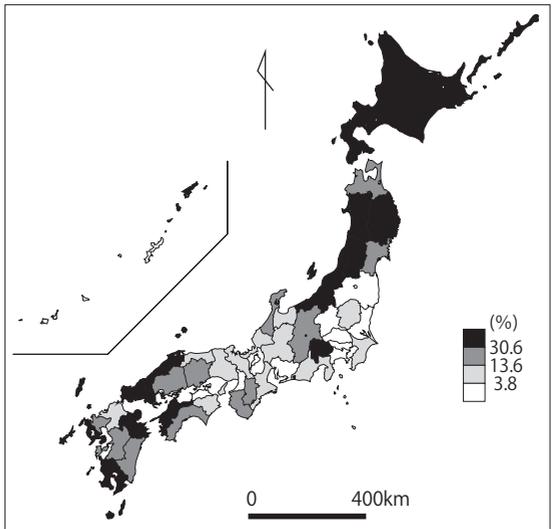


図2 都道府県別に見た日蓮宗の過疎寺院比率 (日蓮宗寺院名簿を基に作成)

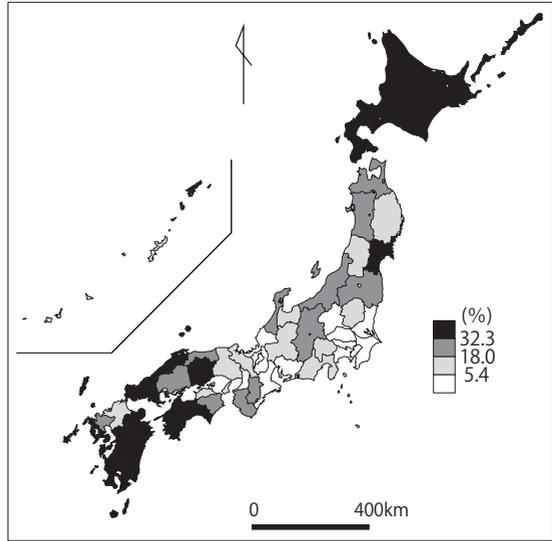


図3 都道府県別にみた浄土真宗本願寺派の過疎寺院比率（浄土真宗本願寺派寺院名簿を基に作成）

布をみるが、都市部に集中しており過疎寺院比率が低くなっているのが特徴である。

このように、過疎寺院問題は過疎法指定地域の分布にあわせて各宗派が共通して全国一律に同様の形態をとるのではなく、各宗派の寺院分布の濃淡によって地域的発現形態が異なることを確認しておきたい。それは各地域の状況に応じて、過疎寺院対策を講じる必要があることを示唆しているのである。

## 五 調査対象地域の概要

一で指摘したように、現代の過疎地域では、家族の空間的分散居住が広域化している実態がある。すなわち、老親は地元に残留し、子どもが域外へ転出するという形態である。域外へ転出した子どもを「他出子」とよぶが、その他出子の動向が寺檀関係の継続性を左右すると考えられるため、本報告ではその他出子の動向に注目する。老親は寺檀関係を継続するが、他出子はどのような対応をとろうとしているのか、これを明らかにすることが本報告の目的である。

本報告の対象地域は、広島県三次市作木町（旧双三郡作木村）である（図4）。中国山地のほぼ中央、広島県の北中部に位置し島根県と接する。「平成の大合併」の流れの中で、旧作木村は隣接する旧布野村や旧君田村とともに、二〇〇四年四月に旧三次市と合併した。二〇一五年現在における作木町の人口は一四七一人、高齢化率は四八・八パーセントである。

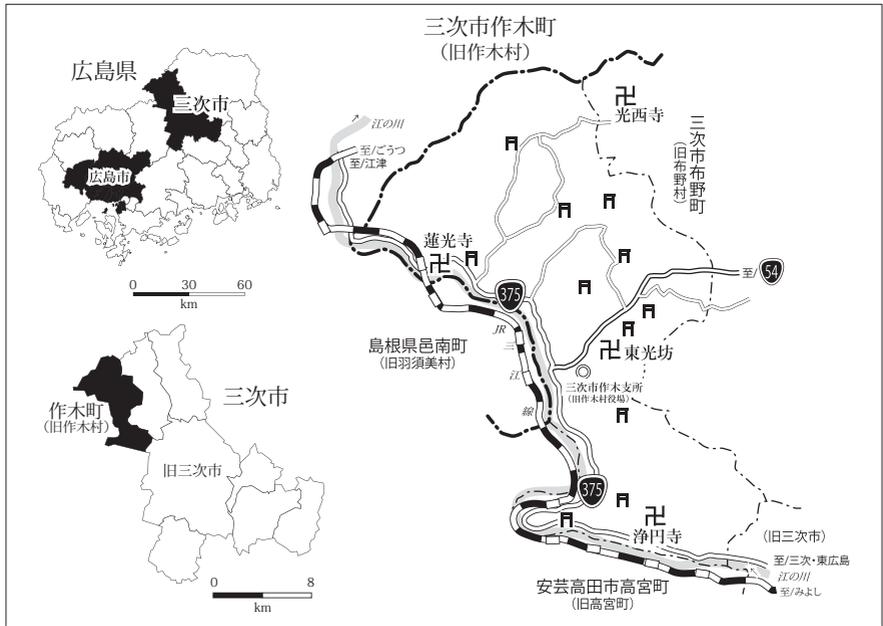


図4 調査対象地域の概観

ーセントに達している。  
 図5は、同派寺院の分布状況を都道府県別に示した図である。大きな円が集中している地域に寺院が集積していることを示している。これによれば、近畿地方や中国地方を中心に、西日本に展開していることがわかる。中国地方では広島県西部の「安芸門徒」や島根県西部の「石見門徒」が知られており、特に中国山地

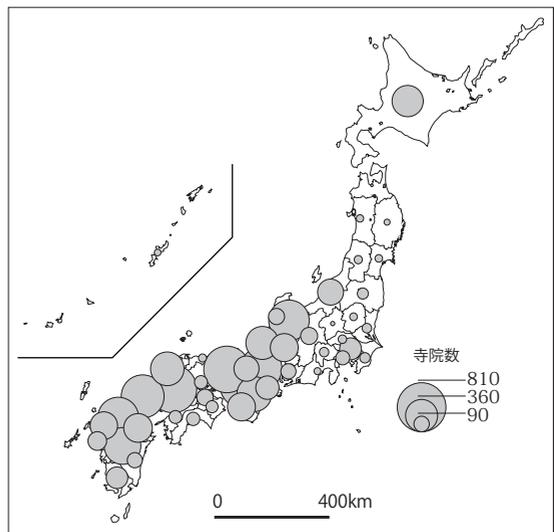


図5 都道府県別にみた浄土真宗本願寺派寺院数 (浄土真宗本願寺派寺院名簿を基に作成)



草が生い茂る境内  
将来的に本堂は倒壊の危険がある



大型仏具（厨子）は放置されたまま

写真1 廃寺となった寺院の外観と内部（2015年9月筆者撮影）

は「真宗地帯」と呼ばれる地域を形成している。三次市は旧備後国に位置するが、当該地域の門信徒は安芸門徒として認知されている。

調査対象の作木町には本願寺派寺院のみが分布し、現在、東光坊、浄円寺、蓮光寺の三カ寺が活動を展開している。十年ほど前まで正住寺があったが、住職の不在と門徒の減少により廃寺の手続きがとられた。写真1は、その廃寺となった正住寺の写真であるが、境内は草が生い茂り、本堂入口の障子も朽ちて、内部も本尊仏は近隣の蓮光寺に遷されているが、須弥壇など大型の仏具は放置されたまま、荒れ放題になっていた。いずれ本堂は倒壊の危険性があるということであった。

現地調査は二〇一五年九月に実施された。調査対象は浄土真宗本願寺派の門徒世帯を対象とし、調査票による訪問聞き取り調査を行い、二―二世帯から有効回答を得た。これは、宗門と地元寺院の協力が得られたことよって実施された。寺檀関係の持続性の問題については経験的に理解されてきたが、それが調査されるのは初めてのことである。

分析の対象は六五歳以上の高齢単身世帯と、高齢夫婦世帯の他出子に注目する。子どもと同居する高齢者の世帯に比べて、寺院との関係が他出子の動向によつて変動する可能性が高いこと、老親亡きあと他出子が仏事の担い手となり、寺院の存続を左右すると考えられるためである。調査対象世帯のうち高齢者のみの世帯は六一世帯、他出子は一三九人いた。なお、データは他出子に対する

表1 他出子の基本属性

属性項目		比率 (%)	実数 (人)	属性項目		比率 (%)	実数 (人)
性別	男性	46.0	64	職業	農業	1.4	2
	女性	54.0	75		常勤 (正規)	51.8	72
年齢	20歳代	2.2	3		常勤 (非正規)	5.8	8
	30歳代	10.7	15		非常勤	6.5	9
	40歳代	32.4	45		自営業	8.6	12
	50歳代	31.7	44		主婦	11.5	16
	60歳代	17.2	24		その他	7.2	10
	70歳代	0.7	1		無回答	7.2	10
	無回答	5.0	7	世帯構成	1人暮らし	13.7	19
学歴	初等教育	6.5	9		夫婦2人暮らし	19.4	27
	中等教育	43.2	60		夫婦と未婚の子ども	48.9	68
	専修学校	12.9	18		1人親と未婚の子ども	0.7	1
	高等教育	31.7	44		配偶者の老親と同居	0.7	1
	無回答	5.8	8		その他	5.8	8
			無回答		10.8	15	

(老親に対する聞き取り調査を基に作成)

老親の意向であり、他出子本人の意向ではないことに注意を要したい。

なお、対象地域において門信徒の仏事が執り行われる場所や墓地に注目して地域類型を行うと、葬儀や年回忌法要はすべて自宅で執り行われ、墓地は集落墓地(ムラ墓地)あるいは屋敷墓であり、伝統的に寺院境内地に墓地は存在しない地域になる。各寺院の本堂は、主要な法会である報恩講や永代経供養などのときにのみ使用されることに留意されたい。

## 六 対象他出子の基本属性

次に、分析の対象となる他出子の基本属性をみておく。表1によれば、対象となる一三九人のうち、「男性」は四六・〇パーセント(実数六四人)、「女性」は五四・〇パーセント(七五人)であった。このうち中心となる年齢層は、「四〇歳代」の三二・四パーセント(四五人)と「五〇歳代」の三一・七パーセント(四四人)である。次いで、「六〇歳代」の一七・二パーセント(二四人)と「三〇歳代」の

表2 他出子の居住地域と帰省頻度（単位：%）

	該当他出子数	ほぼ毎日	週に1~2回	月に1~2回	年に1~2回
旧作木村内	5人	20.0	40.0	40.0	0.0
三次市内	32人	6.3	25.0	37.5	25.0
広島市内	45人	4.4	2.2	44.4	48.9
広島県内	22人	4.5	9.1	68.2	9.1
中国地方	4人	0.0	25.0	0.0	50.0
関西圏	8人	0.0	0.0	0.0	87.5
首都圏	8人	0.0	0.0	0.0	75.0
その他	7人	0.0	0.0	0.0	71.4

（調査世帯のうち、最も多くの情報を寄せた老親のデータを抽出し集計）

一〇・七パーセント（一五人）と続く。学歴は高卒以上の人が七〇パーセントを超えており、「中等教育」が四三・二パーセント（六〇人）で「高等教育」が三一・七パーセント（四四人）に上る。職業は、「正規の常勤」が五二・八パーセント（七二人）、次いで「主婦」の一・五パーセント（二人）であった。世帯構成は「夫婦と未婚の子ども」の形態が四八・九パーセント（六八人）に上り、核家族という典型的な他出子の家族形態となっている。また、他出子の子世代が独立あるいは別居していると考えられる「夫婦二人暮らし」が一九・四パーセント（二七人）で、二番目に多かった。

続いて、老親との距離関係を確認するために、他出子の居住地域と帰省頻度との関係を表2からみておく。三次市作木町の他出子は広島市内に四五人おり、最も多い。広島市内へは中国自動車道を経由して一時間〜一時間三〇分の距離にあるため、他出子の帰省頻度は月に一回以上を数える他出子が五〇パーセント以上に上る。次いで多いのが作木町を除く三次市内で、三二人存在する。月に一回以上の帰省を数える人が七〇パーセントに達し、日常的に老親子関係が維持されている実態が読み取れる。また、広島市や三次市を除く広島県内に居住する他出子は二二人おり、これらの人々も八〇パーセント以上が月に一回以上帰省している。なお、作木町内に居住す

表3 きょうだい関係でみた寺檀関係の継承（単位：％）

きょうだい関係	該当人数	継承させる	継承させる つもりはない	わからない	無回答	
男性のいる きょうだい	長男	45人	51.1	22.2	26.7	11.1
	次男	14人	14.3	42.9	14.3	28.6
	長女	31人	3.2	29.0	54.8	12.9
	次女	9人	11.1	22.2	44.4	22.2
女性のみ きょうだい	長女	16人	31.3	18.8	37.5	12.5
	次女	14人	7.1	35.7	50.0	7.1

注1) 個々の他出子について老親の意向を聞き取った

2) 三男・四男、三女・四女は5人未満のため除いた

(調査世帯のうち最も多くの情報を寄せた老親のデータを抽出し、他出子に対する意向を集計)

る他出子は五人いるが、このうち週一回以上帰省する人は三人いた。このように、作木町の他出子の多くは広島市内に居住している実態が読み取れた。言い換えれば、このデータから広島市の中国山地に対する人口吸引力の大きさを確認することができる。

## 七 他出子による「寺檀関係」の継承

他出子の基本属性をふまえて、他出子による「寺檀関係」の継承そのものについて検討していく。まず、他出子のきょうだい関係に注目して、どんな他出子が寺檀関係の継承者となっているのかを検討する。表3から「男性のいるきょうだい」をみると、老親が長男に継承させたいと思っていることが一目瞭然である。長男に該当する人は四五人いるが、寺檀関係を継承させるといふ老親の意向を受ける人は五一・一パーセントに上る。次男は一四・三パーセントであり、継承させるつもりのないとされる人は四二・九パーセントで、長男が圧倒的に継承者として目されていた。老親は、あくまでも「長男」に寺院とのつながりを求めている。「わからない」とされる人も長男で二六・七パーセント、長女で三七・五パーセントあり、継承を留保する傾向もみられた。一方、「女性のみきょうだい」では長女が一六人存在するが、継承させるといふ意向を受けける人は

表4 他出子（長男）の居住地域と寺檀関係の継承（単位：%）

比率%	該当人数	継承させる	継承させない つもりはない	わからない
旧三次市内	13人	75.0	8.3	16.7
広島市内	13人	50.0	16.7	33.3
広島県内	7人	71.4	14.3	14.3
関西圏	5人	40.0	0.0	60.0

注1) 各寺院に門徒として所属するイエの長男に注目した

2) 該当人数が2人未満の圏域は除いた

(調査世帯のうち最も多くの情報を寄せた老親のデータを抽出し、長男に対する意向を集計)

三一・三パーセントあり、女性のみのきょうだいにおいては長女に期待が寄せられるが、婚家の寺檀関係がある中での継承が進むかどうかは疑問である。

長男を重視することが判明したので、長男の居住地域が寺檀関係の継承にどのような影響をもたらしているのかを検討する。表4は、長男の居住圏域と寺檀関係の継承の有無をみたものであるが、旧三次市内に居住する七五・〇パーセント、広島市内に住む五〇・〇パーセント、広島県内に住む七一・四パーセント、関西圏の四〇・〇パーセントの長男が継承を求められており、老親子間の距離が小さいほど期待は高まるが、広島市内に住む長男においても半数に上り、高い数値となっている。すなわち、老親からみれば長男はどこに住んでいても長男に期待していることがわかる。ただし、「わからない」として継承を留保されている人もおり、長男との空間的距離が大きくなるほど老親は期待しにくくなっている。

## 八 他出子による仏事への関与の実態

老親が他出子に寺檀関係を継承させる意向を前節で検討したが、ここでは他出子が仏事にどの程度関与しているのかを明らかにする。

寺檀関係を男性の子どもに継承させる意向が強いため、他出子を「男

表5 他出子の「きょうだい関係」と仏事関与の実態（単位：％）

きょうだい関係		該当人数	葬儀	法事	お盆	報恩講	墓参り	新年参賀
男性のいる きょうだい	長男	45人	71.1	77.8	66.7	0.0	60.0	28.9
	次男	14人	57.1	71.4	35.7	0.0	57.1	7.1
	長女	31人	70.9	80.6	61.3	9.7	51.6	25.8
	次女	9人	77.8	88.9	88.9	11.1	55.6	44.4
女性のみ きょうだい	長女	16人	68.8	62.5	68.7	6.3	68.8	18.8
	次女	14人	64.3	64.3	57.1	7.1	57.1	35.7

注1) 三男・四男、三女・四女は少数のため除いた

2) 各仏事に関与する他出子を算出

(調査世帯のうち最も多くの情報を寄せた老親のデータを抽出し、他出子に対する状況を集計)

性のいるきょうだい」と「女性のみきょうだい」に区分し、他出子のきょうだい関係に注目して検討する(表5)。前者のうち、長男に該当するのは四五人で、七七・八パーセントの人が法事に、七一・一パーセントが葬儀に、またお盆の行事には六六・七パーセント、日常の墓参りには六〇・〇パーセントの長男が関与していた。一方、各寺院で開かれる報恩講に対しては皆無であり、法事や葬儀など家族に関わる行事や世間一般の習俗といえる墓参りなどには積極的参加が認められる。なお、葬儀や法事には近隣住民や地元在住の親族のそれも含まれており、地元での「おつきあい」関係の維持に長男が努めていることも重要である。

一方、女性のきょうだいをみると、「男性のいるきょうだい」では長女にあたる人(三一人)が法事に八〇・六パーセント、葬儀に七〇・九パーセントが参加し、次女にあたる人(九人)が法事に八八・九パーセント、葬儀に七七・八パーセントが参加していた。男性のきょうだいに比べ、女性のきょうだいは実家やその近隣者等の仏事に積極的に関わっているようすがうかがえる。「女性のみきょうだい」に注目してみると、長女にあたる人(一六人)のうち六八・八パーセントが葬儀に、六二・五パーセントが法事に参加している。次女にあたる人(一四人)のうち、六四・三パーセントが葬

表6 他出子（全体）の居住地域と仏事関与の実態（単位：％）

	該当 他出子数	葬儀	法事	お盆	報恩講	墓参り	新年 参賀
旧作木村	5人	100	100	100	0.0	80.0	40.0
旧三次市	32人	78.1	84.4	71.9	3.1	71.9	18.8
広島市	45人	68.9	75.6	66.7	0.0	62.2	37.8
広島県	22人	72.7	68.2	68.2	9.1	54.5	27.3
関西圏	8人	50.0	75.0	62.5	0.0	25.0	0.0
首都圏	8人	87.5	87.5	50.0	0.0	50.0	25.0
その他	7人	71.4	71.4	28.6	0.0	57.1	28.6

注1) 中国地方（広島県を除く）は5人未満のため除いた

2) 各仏事に関する他出子を算出

（調査世帯のうち、最も多くの情報を寄せた老親のデータを抽出し集計）

儀と法事に関与していた。また、お盆や墓参りなどについては、女性のきょうだいのうち五〇～六〇パーセントにあたる人が参加している実態が浮き彫りになり、男性のきょうだよりも女性のきょうだいが実家に関わる仏事に参与しやすい傾向が読み取れる。

続いて、その他出子の仏事への関与は居住地域に影響を受けるものなのかを表6から確認する。これは、居住地域別に他出子全体について集計したものである。

まず、最も多い広島市に居住する他出子（四五人）のうち、七五・六パーセントが法事に、六八・九パーセントが葬儀に、六八・二パーセントがお盆に関わるなど、多くの子どもが実家に帰省して対応していた。次いで三次市に居住する他出子（三二人）は、法事に八四・四パーセントが、葬儀に七八・一パーセントが、お盆に七一・九パーセントが関与している実態があった。広島市に居住する子どもよりも高い比率で対応しており、実家へ帰省しやすい環境にある。

また、広島県に該当する三次市周辺の市町に居住する他出子（二人）をみると、広島市に居住する人とほぼ同じ傾向が読み取れ、七二・七パーセントが葬儀に、六八・二パーセントが法事に、同じく六八・二パーセントがお盆に関わっていた。これら三地域に居住

する他出子のうち五〇〜七〇パーセントが日常の墓参りを行っていた。広島県外の関西圏（八人）や首都圏（八人）に居住する他出子を見ると、法事や葬儀には八〇パーセント前後が参加していた。これは、集落住民に関わる葬儀や法事ではなく、実家に関わるものに限定されると思われる。

このように実家や集落の仏事に関与がみられる中で、寺院で執り行われる報恩講に対しては皆無かわずかな人が参加するにとどまっていた。寺院の行事よりも、イエやムラの行事に空間を超えて積極的に参加する傾向があることがわかった。

## 九 他出子による「墓」と「仏壇」の継承

次に、信仰の継承と大きく関わる「墓」や「仏壇」の継承をみていく。墓や仏壇の存在は、墓参りやお盆など他出子が実家に帰省する要素になると同時に、現代の農山村で課題となっている空き家の流動化に関わる要素にもなっている。それゆえ、他出子が墓や仏壇を継承するかどうかは、出身村への関与の動向を考える手がかりにもなる。

はじめに、きょうだいの形態に注目して墓や仏壇の継承（表7）をみていく。この回答は、世帯を単位に老親の意向を聞き取っている。男性のいるきょうだいを子どもに持つ四五世帯のうち、「今の場所で継承する者が決まっている」とするのは、墓では五五・六パーセント、仏壇は四二・二パーセントであった。これは作木町内から墓や仏壇を移動せずに、老親子で話し合って決めていることを示しており、男性がいる場合は継承しやすいことがわかる。「今の場所で継承してほしいが、決まっていない」は、老親の気持ちとしては作木町内から墓や仏壇を移動させてたくないと希望しているが、話し合いが進んでいないことを示唆する。子どもに負担をかけたくないという老親の気持ちも反映していると推測される。対象地域では話し合いが進んでいる世帯が多いので、墓は三一・一パーセント、仏壇は四〇・〇パーセントであった。

表7 きょうだいの形態からみた継承（単位：%）

	該当世帯数	今の場所で継承する者が決まっている		今の場所で継承してほしいが、決まっていない		継承者の居住地へ移転する		処分する	
		墓	仏壇	墓	仏壇	墓	仏壇	墓	仏壇
男性のいるきょうだい	45	55.6	42.2	31.1	40.0	4.4	6.7	2.2	8.9
女性のみきょうだい	16	37.5	37.5	50.0	50.0	0.0	0.0	12.5	12.5
全体	61	50.8	41.0	36.1	42.6	3.3	4.9	4.9	9.8

注) イエ（世帯）単位で老親の意向を聞き取ったため、「きょうだいの形態」で算出（調査世帯のうち、最も多くの情報を寄せた老親のデータを抽出し集計）

反対に、「女性のみのきょうだい」（二六世帯）の場合、「今の場所で継承する者が決まっている」とするのは、墓と仏壇ともに三七・五パーセントであった。「今の場所で継承しているほしいが、決まっていない」は、前者よりも上がって墓と仏壇ともに五〇・〇パーセントであった。婚家で管理する墓や仏壇のことが念頭にあるため、老親から具体的な話ができずにいる実態が想起される。また「処分する」をみると、「女性のみのきょうだい」が「男性のいるきょうだい」よりも比率が大きく上回っており、老親の娘に対する配慮が窺える。

次に、長男の居住圏域に注目して墓や仏壇の継承を検討する（表8）。墓の場合、「今の場所で継承する者が決まっている」が高い圏域は、実数が二世帯で少ないが一〇〇パーセントとなっている旧作木村内と関西圏に住む長男であった。一三人と最も人数の多い広島市は墓で一・五パーセントと高く、仏壇は三〇・八パーセントと低い。同じく三次市内では、墓は三八・五パーセント、仏壇は五三・八パーセントであった。広島市や三次市を除く広島県内（七人）では、墓は五七・一パーセント、仏壇は二八・六パーセントであった。また、標本数は少ないが関西圏では一〇〇パーセント、首都圏では六〇・〇パーセントで継承者が決まっていた。

墓に対しては作木町内に住む継承者で決まっている場合が高いのに

表8 他出子（長男）の居住地域からみた継承（単位：％）

長男の 居住圏域	該当 世帯数	今の場所で 継承する者が 決まっている		今の場所で継承 してほしいが、 決まっていない		継承者の 居住地へ 移転する		処分する	
		墓	仏壇	墓	仏壇	墓	仏壇	墓	仏壇
旧作木村内	2	100	100	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
三次市内	13	38.5	53.8	38.5	30.8	15.4	0.0	0.0	0.0
広島市内	13	61.5	30.8	30.7	46.1	0.0	0.0	7.6	0.0
広島県内	7	57.1	28.6	42.8	71.4	0.0	0.0	0.0	0.0
関西圏	2	100	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
首都圏	5	60.0	40.0	40.0	40.0	0.0	0.0	0.0	0.0

注) 男性のいるイエ（世帯）のみを抽出

（調査世帯のうち、最も多くの情報を寄せた老親のデータを抽出し集計）

対し、仏壇は継承者が決まっていない現状が窺える。浄土真宗の仏壇は一昼ほどもある据え付け型の大型仏壇であり、他出子の住宅事情を考えると、継承者の居住地への移転は困難である。仏壇を管理することは家屋（屋敷）を管理することでもあり、本当は実家で受け継いでほしいと考えているが、子どもに負担をかけられず、決められずにいるのが現状である。それを示すように、三次市では三〇・八パーセント、広島市で四六・一パーセント、前二者を除く広島県内では七一・四パーセントが決められずにいた。このように、長男の居住地域に関わらず墓の継承者は決まっているのに対し、仏壇の継承者は決まっていなかった。また、仏壇や墓の移設や廃棄は、実家に帰省する契機、出身村との縁が失われることを指摘しておかなくてはならない。

そして、長男の年齢層との関連で墓や仏壇の継承を確認しておく（表9）。「今の場所で継承する者が決まっている」とされているのは、墓では四〇歳代以上で五〇パーセントを超え、仏壇は五〇歳代以上で六〇パーセント近くに上昇している。反対に「今の場所で継承してほしいが、決まっていない」としている世帯では、墓に対しては三〇歳代で五〇・〇パーセント、四〇歳代で三五・七パーセントになっている。仏壇については、三〇歳代で六六・七パーセント、

表9 他出子（長男）の年齢層からみた継承（単位：％）

長男の年齢	該当世帯数	今の場所で継承する者が決まっている		今の場所で継承してほしいが、決まっていない		継承者の居住地へ移転する		処分する	
		墓	仏壇	墓	仏壇	墓	仏壇	墓	仏壇
30歳代	6	33.3	33.3	50.0	66.7	0.0	0.0	0.0	0.0
40歳代	14	50.0	28.6	35.7	50.0	7.1	0.0	0.0	7.1
50歳代	12	66.6	58.3	16.7	16.7	8.3	0.0	8.3	22.2
60歳代	9	66.6	44.4	33.3	55.6	0.0	0.0	0.0	0.0

注1) 男性のいる世帯のみを抽出

2) 20歳代と70歳代は1人のため除いた

(調査世帯のうち、最も多くの情報を寄せた老親のデータを抽出し集計)

四〇歳代で五〇・〇パーセントとなり、年齢が下がるほど決まっていな  
い。ただ、六〇歳代で仏壇の継承が決まっていない世帯が多いのは、長  
男自身が高年齢を迎えて大きな仏壇の処置を決められずにいるためと考  
えられる。

仏壇に比べ墓のほうが継承を決定している年齢が低くなっているのは、  
対象地域において二〇年前から山上の集落墓地から屋敷内に墓地を移設  
する家が多くなり、新装なった墓に対する意識の高いことが背景にある  
と考えられる。ただ、墓も屋敷内に移され、家屋内にある仏壇とセット  
に扱われる実態になっているにもかかわらず、墓の継承意識が早くから  
形成されていることについては今後の検討課題である。いずれにせよ長  
男の年齢が高くなるほど継承が決まる傾向にあり、特に墓の継承が早い  
時期から確実に進められている実態がみえる。

## 一〇「ムシのお寺」の存在意義

最後に、寺院の存在意義を地域住民がどのように意識しているのかに  
ついて、表10から検討したい。表中にある九つの項目を挙げて質問し、  
A～E地区に区分して地区別に集計した。地域別に提示しているのは、  
作木町内に所在する寺院が「化境ケキョウ」とよばれる集落を単位とする護持  
制度を運用しているためである。神社は「氏神」として地域単位（集落

表10 ムラのお寺の存在意義（地区別）（単位：%）

	A地区	B地区	C地区	D地区	E地区
地域社会の象徴として	95.0	97.4	80.0	95.2	92.1
地域社会の活動拠点として	85.0	87.1	40.0	76.2	63.2
家族のつながりの象徴として	68.3	64.1	53.3	52.4	76.3
親族が集まる機会を提供する存在	66.6	64.1	46.6	71.4	60.5
信仰の重要な拠り所	81.7	74.4	80.0	61.9	92.1
個人的な相談に乗ってもらふ場所	43.3	43.6	33.3	52.4	42.1
地域社会の伝統を守る存在として	83.3	79.5	80.0	76.2	81.6
教えを聞く場所	76.7	74.4	100	76.2	81.6
お墓の面倒をみてくれる存在	63.3	35.9	40.0	38.0	28.9
回答総数（人）	60	39	15	21	38

（調査世帯のうち、最も多くの情報を寄せた老親のデータを抽出し集計）

単位）に「氏子圏」を形成しているが、それに類する護持システムといえよう。

まず高かったのは、「信仰の重要な拠り所」や「教えを聞く場所」など、寺院本来の宗教的役割を意識する項目は四分の三以上の支持があった。同様に、「地域社会の伝統を守る存在として」の寺院の機能も高く、作木町内の寺院は中世以来の歴史を有し、寺族が連綿として寺を支えてきたという実績がそれを反映している。一方、評価が低くなる項目として「個人的な相談に乗ってもらふ場所」が三〇〜四〇パーセント台となっていた。寺院が廃寺となったC地区では三三・三パーセントと特に低く、社会的分業の深化により寺院の相談機能は相対的に低下しているが、日常的に寺院とのつながりが薄いことも要因になると思われる。すなわち、仏事はすべて自宅、墓地も境内外にあり、日常的に寺院に足を運ぶことがないことが大きいと思われる。「お墓の面倒をみてくれる存在」としての機能は、当該地域では低い。いわゆる寺墓地ではなく集落墓地や屋敷墓であるため、寺院が墓の管理に関与しないためである。ただ、A地区において六〇パーセントを超えて高いのは、山上の集落墓地から屋敷墓への移転が進み、それに寺院が協力していることが背景にあると考えられる。

社会的機能としては、「地域社会の象徴として」の寺院の意義が最も高かった。九項目中最も高く、地域差なく各地区で八〇～九〇パーセント以上の高い比率であった。「地域社会の活動拠点として」の役割で、地域差を伴いながらも六〇～八〇パーセントと比較的高い比率を示していた。広島県北部の備北から芸北地域は真宗地帯であり、地域社会の結節的役割を担ってきたことを示すデータといえる。C地区が低くなっているのは廃寺となった寺院が所在したためである。親族の結節としての役割は、「家族のつながりの象徴」や「親族が集まる機会を提供する存在」が各地区とも六〇～七〇パーセントであり、廃寺が影響しているためかC地区は他地区に比べ低い。

このように、各地区に所在する寺院の特性、あるいは地区独自の事情などが寺院の存在意義を左右している実態を確認することができた。

## 一一 寺檀関係の持続可能性—他出子に注目する—の意義—

本報告は、過疎地域とりわけ中国山地の山村における浄土真宗寺院に注目し、地元に残留する門信徒（老親）や都市へ他出した子ども（他出子）の動向から寺檀関係の持続可能性を検討した。最後に、他出子に注目することの意義について確認し攷筆したい。

山村をはじめとする現代日本の過疎地域では、檀家を構成する家族の空間的分散が進んでいるため、寺檀関係の持続は他出子が寺院との関係をどのように関係構築しているかにかかっている。出身村あるいは老親との関係性を維持する他出子は法事や墓参りなど仏事に関与しているが、それは帰省頻度など老親子間の距離に作用されている。ただし、他出子のうち長男か次男かなどのきょうだい関係、あるいは男性のいるきょうだいか女性のみのみきょうだいかの形態によっても影響を受けることはいままでもない。それゆえ、きょうだい関係と空間性を加味して他出子を検討することの有効性が、本報告から確認できたといえよう。

また、「他出子」に対する検討に加えて、「他出者」に対する検討の必要性も指摘しておきたい。すなわち、老親が地元に残留している「他出子」のみならず、老親が死去して出身村との縁が薄くなっている「他出者」の対応について研究することの必要性である。本報告は老親が現役で寺院との関係を維持している例であったが、この現役世代が寺院との関係を維持できなくなった際に、他出者の対応が寺檀関係の持続可能性を左右すると考えられるためである。本報告の冒頭で、寺院問題は過疎地域問題を構成する一つの要素と述べたが、それは地域社会の持続性を考えることでもある。寺院との関係の維持は地元との関係の維持でもあるからである。本報告の分析からも他出子の帰省するきっかけの多くは仏事を伴うものが多いと考えられるため、出身村との関係の継続性を計るバロメーターになりうる。他出子のみならず他出者の動向にも注目することによって、今後の地域社会の持続可能性を議論することができるのである。

# あとがき

第十七回日蓮宗教化学研究発表大会は、平成二十八年十月二十七日、日蓮宗宗務院で開催されました。本冊子は、当日の発表内容を収録したものです。

本年度は、特にテーマを設定せずに発表者の募集を行いました。この為、様々な分野からのご発表を頂き、多種多彩なものとなっております。

今般総務省より出された、平成二十八年二月二十六日付の平成二十七年国勢調査人口速報集計結果の要約によれば、日本の人口は、一億二千七百一十一万人となり、平成二十二年から九十四万七千人減少とあり、大正九年の調査以来、初めての減少と報告されています。人口減少社会は檀家数減少に直結し、寺院運営に大きな影響が出るのは明白です。

最後に、この問題に関して、本宗教師でもあり、静岡大学で農村地域研究を専門とされ、過疎地域で生じている問題について調査・研究に取り組まれている中條暁仁師に「過疎地域における寺檀関係の持続可能性―他出子の動向に注目して―」と題した特別発表をして頂きました。師は、浄土真宗本願寺派総合研究所が主宰している「寺院調査会議」に参画し、その調査成果の報告となりますが、本宗の過疎地域における問題を考える為の一助と成り得ると考えます。是非ご一読下さい。

# 執筆者一覽（敬称略・掲載順）

- 三原正資（現宗研所長・広島県妙長寺住職）
- 齋藤宣裕（現宗研研究員・秋田県法華寺修徒）
- 三谷祥祁（大阪府観世音寺住職）
- 大場唯央（静岡県大慶寺修徒）
- 釋一祐（岐阜県寶光寺住職）
- 森下龍浄（長崎県日誠寺住職）
- 西口玄修（現宗研元囑託・栃木県妙建寺住職）
- 大野真如（佐賀県勝嚴寺修徒）
- 鈴木義俊（山梨県法元寺修徒）
- 尾藤宏明（千葉県本光寺住職）
- 玉木晃仁（山形県玉泉寺住職）
- 石伏叡齋（現宗研元研究員・兵庫県廣濟寺住職）
- 石原顕正（現宗研囑託・山梨県立本寺住職）
- 中條曉仁（静岡大学准教授・静岡県本能寺修徒）

現代宗教研究 第51号 別冊

〈教化学研究 8〉

平成29年3月31日 発行

編集 日蓮宗現代宗教研究所

発行所 日蓮宗宗務院

発行責任者 三原正資

〒146-8544 東京都大田区池上1-32-15

電話 03(3751)7181(代)

印刷所 ティケイ ハンデル アート

電話 048(256)4763

